国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和37年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001190

昭和37年度

国立国語研究所年報

－14－

国立国語研究所
1963

刊行のことば

本書は，昭和37年度の調査研究について，その概要を記したものである。

昭和37年３月31日に一ッ橋の旧庁舎から現在地に移転した。今度の庁舎は既設の建物を利用したものであって，研究施設として理想的なものとは言いがたいが，研究のためにこれまでよりもいくらか広い面積を使用することができるようになった。敷地も約１万平方メートルほどあるので，今後新しく建物を建築することも可能であり，研究所として各種の将来の計画をたてて行きたいと思っている。

なお，本年度内に刊行した書物は次の通りである。

現代雑誌九十種の用語用字（第二分冊）　（報告22）
―― 漢字表 ――

話しことばの文型（２）　（報告23）

国語年鑑　昭和37年版　<秀英出版刊>

昭和38年10月

国立国語研究所長　岩淵悦太郎

目　次

刊行のことば

昭和37年度の調査研究のあらまし……1

話しことばの調査研究

話しことばの文型の調査研究……3

書きことばの調査研究

現代雑誌一般の用語・用字の概観調査……7

地域社会の言語生活の調査研究

日本言語地図作成のための調査（第6年度）……17

国語教育に関する調査研究

中学校生徒の言語能力の発達に関する研究……28

言語の効果に関する調査研究

国語文章の横組みのための印刷条件の研究……47

国民各層の言語生活の実態調査……48

国語の歴史的発達に関する調査研究

明治時代語の調査研究……61

『色葉字類抄』の索引作成……75

特殊問題の調査研究

類義語の調査研究……84

中国の言語・文字問題に関する調査……89

国語関係文献の調査……92

図書の収集と整理……98

庶務報告……108

昭和37年度の調査研究のあらまし

本年度の研究項目および分担は次の通りである。

(1)	話しことばの文型の調査研究（継続）	話しことば研究室
(2)	現代雑誌一般の用語・用字の概観調査（継続）	書きことば研究室
(3)	日本言語地図作成のための調査（継続）	地方言語研究室
(4)	中学生の言語能力の発達に関する研究（継続）	国語教育研究室
(5)	国語文章の横組みのための印刷条件の研究（継続）	言語効果研究室
(6)	明治時代語の調査研究（継続）	近代語研究室
(7)	「色葉字類抄」の索引作成（継続）	古代語研究室開設準備室
(8)	類義語の調査研究（継続）	第一資料研究室
(9)	国語関係文献の調査研究（継続）	第二資料研究室
(10)	中国の言語・文字問題に関する調査研究	第三資料研究室

「話しことばの文型の調査研究」は前年度にひきつづき，講演・講義・演説などの独話資料による研究を進めて来たが，その成果がまとまったので，「話しことばの文型(2)」として刊行した。

「現代雑誌一般の用語・用字の概観調査」は昭和31年度以来，現代雑誌九十種について調査を行なって来た。その成果の一部は先に「総記・語彙表」として刊行したが，本年度はさらに「漢字表」を「現代雑誌九十種の用語用字」の第二分冊として刊行した。

「日本言語地図作成のための調査」は昭和32年度以来 7か年 計画で全国約2,000地点の調査を行なう予定であったが，予算の都合で8か年計画で全国に変更せざるを得なかった。今年度はその第六年度で265地点の調査を完了した。この結果，通算1,665地点を調べたことになる。

なお，「地方言語研究室」では「沖縄語辞典」の編集を行なってきたが，ようやく完成した。（昭和38年4月に刊行した。）

「中学生の言語能力の発達に関する研究」は，前年度，準備的調査として，中学生の言語能力の問題点をとらえ，かつ調査方法を考案するために，小規模な調査を行なったが，今年度はその結果を整理して，検討を加えた。

「国語文章の横組みのための印刷条件の研究」は国語の文章を横組みにした

場合，読了速度や理解度に活字（よこ長・正方形・たて長）の違いがどのように影響するかを明らかにしようとしたものである。結果を整理・分析し，成果をまとめた。

「明治時代語の調査研究」は従来行なってきた明治初期の新聞・学校文献その他について，それぞれに行なって来た用語調査を一括して，全体の語彙表を作成した。また，明治初期の文章について文体と用語との関係を考察した。

「色葉字類抄の索引作成」は語彙について五十音順索引を作成している。

「類義語の調査研究」はコミュニケーションにおいて，類義的関係の語がどのように存在するか，それは何らかの障害をおこすことがないかについて考察しようとした。今年度は前年度収集した資料を中心に分析を進めた。

なお，今年度は所内の総合研究として「国民各層の言語生活の実態調査」を行なった。（この調査の中核をなしたのは，第二研究部の言語効果研究室である）

これは国民各層がどのような言語生活を営んでいるか，どのような問題を持ち，意識を持っているかを調べようとしたものである。環境との関係や生活上の諸条件との関連の上で研究を進めていくために，特に新潟県長岡市を選んでその市民の各層について調査を行なった。なお，知識の高い層として特に大学生について意識・意見を調査した。大学生が，その修める学問の種類によって，言語に対する意識や意見を異にして来るかどうかを知ろうとしたものである。

本年度当初の研究組織は次の通り。

第一研究部		（部　長）林　　大			
	話しことば研究室	（室長）大石初太郎	宮地　裕	南不二男	鈴木重幸
	書きことば研究室	（室長）見坊豪紀	水谷静夫	石綿敏雄	宮島達夫
	地方言語研究室	（室長）柴田　武	野元菊雄	上村幸雄	徳川宗賢
第二研究部		（部　長）輿水実			
	国語教育研究室	（室長）芦沢　節	村石昭三	吉沢典男	
	言語効果研究室	（室長）永野　賢	高橋太郎	渡辺友左	
第三研究部		（部　長）山田　巌			
	近代語研究室	（室長）林　四郎	進藤咲子		
	古代語研究室開設準備室	（主任）山田　巌	広浜文雄		
第四研究部		（部　長）岩淵悦太郎（兼任）			
	第一資料研究室	（室長）松尾　拾	西尾寅弥	田中章夫	
	第二資料研究室	（室長）飯豊毅一	大久保愛	高田正治	
	第三資料研究室	（室長）斎賀秀夫	松本　昭		

話しことばの文型の調査研究

A. 前年度までの経過

話しことばの文型の研究を，最初に各種の対話資料によって行ない，その報告書『話しことばの文型(1)——対話資料による研究——』を，昭和35年3月に刊行した。ここでは，表現意図・構文・イントネーションの三つの面から文の文法的特徴に迫ろうとして，それぞれの面の分析を行ない，また，この三つの面のからみあいとしての総合的文型の小規模の試みを行なった。

ひきつづき，昭和35年度から，独話資料による文型研究にとりかかった。先行の対話資料による研究と比べて，立場や方法の基本においては変化はないが，方法の細部を改めた点があり，とくに構文の研究調査に大きく力をさいた。対話資料による研究の段階からもう一段発展させようとしたものである。

B. 担　当　者

下記の話しことば研究室員の共同研究であるが，表現意図・構文・イントネーションのそれぞれについては，付記するような分担により，随時，共同討議にかけて研究を進めた。

大石初太郎　　宮地　裕（表現意図・イントネーション）

南不二男（構文）　　鈴木重幸（構文）

なお，泉喜与子・吉村香苗が作業を助けた。

C. 本 年 度 の 作 業

1. 報告書『話しことばの文型(2)』

前年度にひきつづき，独話資料による文型の研究を進めて一応のまとめに達し，報告書『話しことばの文型(2)——独話資料による研究——』を，昭和38年3月に刊行した。その内容は次のような構成によった。

Ⅰ　概　　要

Ⅱ　表現意図

表現意図に対応する文表現を，

- ⓪よびかけ・わかれなどの表現
  - よびかけ（コミュニケーションの発始）などの表現
  - わかれ（コミュニケーションの終止）などの表現
- ①詠嘆表現
  - 未分化表現（感動詞による）
  - やや分化した表現（形容詞類による）
- ②判叙表現
  - (1)判断既定の表現
    - a．事実の叙述表現
      - 1．態の表現
      - 2．相の表現
      - 3．時の表現
    - b．断定の様相表現
      - 1．断定の表現
      - 2．伝聞の表現
      - 3．希望の表現
      - 4．推定の表現
      - 5．意志の表現
  - (2)判断未定の表現
    - a．判断の未確定の表現
    - b．判断への疑念の表現
- ③要求表現
  - a．質問的表現
    - 肯否要求の表現
      - 1．確認要求の表現
      - 2．判定要求の表現
    - 選述要求の表現
      - 1．選択要求の表現
      - 2．説明要求の表現
  - b．命令的表現
    - 1．消極的行為要求の表現
    - 2．積極的行為要求の表現
- ④応答表現
  - a．未分化表現（応答詞などによる）
  - b．やや分化した表現（指示詞などによる）

のように分け，それぞれの文末形式を調べて記述する。

表現意図に対応する社会的習慣としての言語形式には，文法的形式と語彙的形式とがあるが，ここでは文法的形式を中心とする。

Ⅲ 構　文

文の成分（文の構成に一次的に参加するものに限る。）を，

述語　主語　補語　目的語　連用語　状況語

陳述的成分　独立語

と分け，さらにこのほかに，

従属句

を認め，これら成分の組み合わせの類型としての構文の型を，

1．独立語構文

2．述語構文

(1)　基準構文

a．骨ぐみ構文

b．拡大構文

c．複合構文

(2)　付加構文

と分類する。これにもとづいて，主として資料にあらわれた構文の型をあげ，それぞれの型の特徴を記述する。

Ⅳ　イントネーション

ここで扱うイントネーションを，

a．意図表現のイントネーション

b．卓立表現のイントネーション

の2種として，資料のイントネーションを分析調査し，話しことばの文型にイントネーションがどういう位置を占めるかを追究する。

Ⅴ　総合的文型の試み

表現意図・構文・イントネーションの三つの面を総合した総合的文型のための問題点として，次の3点について記述する。

1．成分の陳述的変容について

2．「主題一解説」の類型について

3．表現意図との関連から見た状況語について

次に，表現意図・構文・イントネーションの対応関係を示した文型一覧表をかかげる。

2．イントネーションの調査

イントネーションの研究をさらに進めるために，昭和38年3月に，福島県安

達郡東和町針道，同県須賀川市仁井田の２地点で，イントネーションの小調査を行なった。日本語イントネーションの研究の一面の作業として，一型アクセント地帯のイントネーションを調べようとする計画にもとづくものである。これの分析は次年度に行なう。この調査に関して，とくに

福島大学学芸学部助教授　菅野　宏氏

東和町針道小学校教諭　遠藤秋男氏

須賀川市仁井田中学校教諭　加藤義久氏

の協力を得た。

D. 今後の予定

次年度からは，あらためて話しことばの文法の体系的研究を目ざし，問題点を順次取り上げて詳しい調査研究を行なう。話しことばの文型に関しては残されている部面が多いが，その研究をさらに進めるためにも，これが必要である。

（大石）

現代雑誌一般の用語・用字の概観調査

A. これまでの研究経過

昭和31年度以後，現代雑誌一般の用語・用字の概観調査を行ない，昨36年度にその成果の一部を『現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊総記および語彙表（国立国語研究所報告21，昭和37年３月）で，また今年度は同上第二分冊漢字表（国立国語研究所報告22，昭和38年３月）で，それぞれ報告した（第二分冊の概要はpp. 14～15，Ｅ項にしるしてある)。

計量的調査では，調査目的に即応した統計理論の整備の必要はもちろんであるが，そのほかに，大量のカードを等質的に作成・操作するための，調査単位（単位語）の認定のしかた，カード採集・集計整理などの作業方式の決定，作業の手順，作業の品質管理などに関する周到な計画と実施が大切である。

現在調査中のものも含め，われわれはこれまで三回にわたって，もっぱら人力による調査としては大規模な用語・用字の調査を経験し，方法論的にも実践的にも多くの成果をあげたと信ずる。

方法論的には，層化集落抽出法の一変形による語彙調査の理論と方法を確立し（⇨報告13，pp. 79～108；⇨報告21，pp. 295～320)，標本から調査対象全体の語彙量を推定するための公式を求め(⇨年報６，pp. 52～59；⇨報告13，pp. 26～37)，また，同音の別語か同じ語の意味の違いかを操作的に判別する公式を作り（⇨報告13，pp. 108～115)，さらに，ある語がよく使われる語であるかどうかを論ずるには，なまの使用度数から，相対尺度である使用率を計算し，かつ，調査対象全体での使用率の推定精度をも考慮すべきであることを明らかにした（⇨報告12，p. ５)。一方，実践的成果としては，五十音順・使用率順の各種語彙表，意味による分類語彙表，各種漢字表，語の表記の一覧表など，国民の言語生活の実態を反映する資料を蓄積してきた。

以下に，書きことば研究室がこれまでに行なってきた用語・用字調査の規模その他をまとめて示せば次の通りである。

用語調査

	資　料	調査対象	抽出比	標本延べ語数	標本異なり語数	母集団の推定延べ語数	発表
1	婦人雑誌	主婦之友*(25年1月～12月)（本文全体）	約1/6	14.6万	2.7万	90万	報告4
2	総合雑誌	13種(28年7月～29年6月)（本文全体）	約1/40	23万	2.3万	900万	報告12～13
3	現代雑誌一般	5部門90種（本文全体）(31年1月～12月)	約1/230	53万	4.0万	1億4千万	報告21（以下続刊）

*別に，実用記事だけについて婦人生活（25年1月—12月）を同じ抽出比で調査した。標本延べ語数は 5.2万，同異なり語数は 1.0万，実用記事全体の推定延べ語数は33万である。参照，報告4。

用字調査

	資　料	調査対象	抽出比	標本延べ字数	標本異なり字数	現われなかった当用漢字数	発表
4	婦人雑誌	1に同じ*	全標本	17.0万	3048	41	報告4
5	総合雑誌	2に同じ	全標本の1/2	11.7万	2781	73	報告19
6	現代雑誌一般	3に同じ	全標本の2/3	28.0万	3328	15	報告22

*婦人生活の実用記事の場合は，標本延べ字数 6.0万，同異なり字数 2,000字である（追記参照）。

参考　婦人雑誌の調査の前に，朝日新聞の昭和25年6月分に対し全数調査を行ない，延べ24万，異なり 1.5万（人名・地名を含まない）の語数を得た（⇨資料集2『語彙調査——新聞用語の一例——』（昭和27年3月））。

B．調査の輪郭

目標　現代書きことば資料のうち雑誌という形態をとる刊行物について，多くの部門にわたり，その用語ならびに用字の概観を標本調査法によって計量的に試み，基本語彙設定ならびに表記法体系の改善のための基礎資料を得ようとする。

ここに現代雑誌一般とは，特定の部門にかたよらず，ひろく各分野にわたり選定された成人用の雑誌（季刊，月刊，旬刊，週刊）をさす。ただし学術・技術・専門雑誌の類を含まない。（調査対象の項参照）

調査対象　昭和31年度刊行の雑誌，5部門90種（1月～12月号）の本文全体(付録・増刊号を含む）。

部門の分け方と各部門の雑誌の種類は次の通り（調査した誌名の一覧は pp. 15～16にしるしてある)。

I	評論・芸文（世界・中央公論・新潮・群像等）	12種
II	庶民（文芸春秋・家の光・週刊朝日等）	14種
III	実用・通俗科学（ダイヤモンド・自然・時の法令等）	15種
IV	生活・婦人（主婦の友・装苑・暮しの手帖等）	14種
V	娯楽・趣味（オール読物・読切小説集・映画の友・野球界等）	35種

調査対象の大きさ

延べページ数　　226,358ページ

推定延べ語数　　約 1.4億（β 単位による）

内訳 ｛下記以外の語　約8,400万語 ／ 助詞・助動詞　約5,600万語｝

抽出比　1/230

標本の大きさ

(1) 助詞・助動詞以外の語……広告を除いた全紙面から 1/8 ページ大の部分8,000箇所。ページに換算して1,000ページ分。

(2) 助詞・助動詞……(1)の1/3。

(3) 表記・漢字………(1)の2/3。

標本延べ語数　約53万（総合雑誌の語彙調査で用いた規準（β単位）によって数えた語数)。おおよその内訳は次の通り。

	助詞・助動詞以外		助詞・助動詞		合計	漢字調査の部	
区分	延べ	異なり	延べ	異なり	延べ	延べ	異なり
前段	14.5万語	2.3万語	9.5万語	150語	24.0万語	13.8万字	2943字
中段まで	29.2	3.4	-	-	38.7	28.0	3328
後段まで	43.8	4.0	-	-	53.3	42.0(推定)	3505(注)

（注） 漢字調査は，中段までの標本について行ない，後段には及んでいないが，後段ではじめて現われた漢字の種類については，別に追跡を試みた結果 177字を得た。したがつて，後段までの全標本を調べた場合は，異なり字数が3505になる見込みである。 なお，その場合の延べ字数は約42万字と推定される。

作業の段階　各部門とも 9 段階に分け，3 段階ごとに集計する。

C.　前年度までの経過

資料用雑誌の決定とその収集，採集箇所の抽出，採集用カードのリプリント，全段階のカード採集・検査・整理・集計および語の使用率ならびに推定精度の計算。

助詞・助動詞調査用のカードの採集・検査・整理・集計・記述法の研究および語の使用率ならびに推定精度の計算。

表記調査用のカードの採集・検査・整理・集計。

漢字調査用のカードの採集・検査・整理・集計。

複合語調査用のカードの採集・検査。

報告書「現代雑誌九十種の用語用字」第一分冊総記・語彙表（国立国語研究所報告21，昭和37年3月）の刊行。

D.　本年度の作業の概要

Ⅰ　報告書第二分冊「漢字表」編の原稿を作成し，これを印刷した（→E項参照）。

Ⅱ　報告書第三分冊の材料をまとめた。第三分冊では主として今回の調査結果の分析を行なう。以下におもな内容を項目別に示し，簡単な説明をつけくわえる。

1　語の基本度を測る方法の探究

「基本語彙」を，よく使われかつ様々の分野に満遍なく現われるような語（見出し語）の集合と規定すれば，かような見地から各語の「基本度」が数量化できよう。その一案として，使用率と散らばり度とに基づき，その語がどの程度基本的であるかということを数量的に示そうとする。

2　複合語の調査

今回の調査では，たとえば「自動車」は「自動」と「車」とに句切って採集した。そこで，ある見出しを核としてどんな複合語が構成されるかを概観し，複合の類型・傾向などについて分析する。

3　語種・品詞の分布と使用率との相関分析。

4　活用語の各活用形の使用率の分析（助動詞をふくむ)。

5　同語・別語の判別に関する問題の概観と問題点の分析。

6　同語・別語判別のための語例集の作成。

語例集見本

語　例	用法例，処置	見出し
あつい	①〔暑，熱〕あつい気候／あつい湯／あつい戦争／あつい仲	アツイ①
	②〔厚，篤〕あつい板／あつく礼を述べる／あつい情／友情にあつい	アツイ②
かいめつ	潰滅・壊滅 } 合併	カイメツ

7　助詞・助動詞の分析

(1)　接続の分析

助詞・助動詞の接続の模様を，その助詞・助動詞のついたままの形で数えて分析する。

(2)　助詞・助動詞の意味・用法別の使用率を一覧表にまとめる。

(3)　類義表現の分析

「山へ」と「山に」，「降れば」と「降ると」と「降ったら」など，同義または類義の表現を取り上げて分析する。

III　分類語彙表の作成（約三万語)。この表は，現代雑誌九十種で得られた七千語の，意味分類上の位置を明らかにしたもので，三万語についての五十音順索引を含む。なお分類語彙表は，今回の調査の報告書とは別途に近く刊行の予定である。

IV　用字の分析。漢字ならびに表記法に関する分析として，以下の仕事をした。

1　漢字の字数に関する分析。

標本に現われた漢字の使用度数の分布，および異なり字数や延べ字数について分析し，その結果を『報告22』の中におさめた。（⇨報告22，pp. 6〜14)

2　漢字の音訓に関する分析

(1) 音訓一覧表の作成

当用漢字1850字のうち，標本には1835字が現われた。また，当用漢字補正案で新たに加えられる候補になった漢字28字は，いずれもこの標本に現われている。そこで，この1835字に28字を加えた合計1863字の一々の音訓について，それが当用漢字音訓表および当用漢字補正案に示された音訓の範囲内にあるかどうかを調査した。その結果に基づき，音訓一覧表を作成し，表内音訓，表外音訓の種類とその使用度数，および表内音訓でありながら標本に一回も現われなかった音訓等が一覧できるようにした。

なお，使用度数９以上の漢字についての音訓の使用状況は，『報告22』所収の用法別漢字表〔第２表〕に見られるが，ここでは，使用度数の多い漢字（使用度数 200以上）の音訓使用状況について，比較的目立つ例をぬき書きしておく。

〔標本にあまり現われなかった表内音訓〕

漢字	総使用度数	表内音訓とその度数		(その音訓を使った語)	〔備考〕
出	2107	スイ	1	(出納)	
今	863	キン	2	(古今)	
彼	799	ヒ	1	(彼岸)	
何	753	カ	1	(幾何)	
社	654	やしろ	0		
回	409	エ	0		
和	382	やわらぐ	1		
政	366	{まつりごと	0		
		{ショウ	1	(太政)	
連	361	つらなる	0		〔つらねる５〕
仕	320	つかえる	2		
民	304	たみ	1		
解	303	ゲ	0		
供	274	ク	0		
青	261	ショウ	1	(群青)	
治	233	おさめる	0		〔おさまらせる１，おさむ(人名)3〕
交	230	{まじる	1		〔まぜる１，かわす７〕
		{まじわる	1		
公	230	ク	1	(公卿)	
務	215	つとめ	0		

〔標本に多く現われた表外音訓〕 ……… 人地は，人名地名に使われた度数を示す。

漢字	総使用度数	表外音訓とその度数		(その音訓を使った語)
本	1643	もと	238	(人地230)
分	1458	わかる	60	
入	1022	はいる	245	
部	810	へ	167	(部屋115，人地52)
主	602	おも な・に	18	
体	563	からだ	52	
近	509	コン	35	(人地35)
男	503	お	55	(人地55)
正	385	まさ	39	(正しく，正に10，人地29)
和	382	かず	31	(人地31)
母	290	かあ	53	
信	283	のぶ	38	(人地38)
眼	272	め	221	
判	263	わかる	41	
御	261	お	30	(人地2)
等	259	ら	64	
空	251	から	18	
		あく	12	
父	243	とう	29	
		おじ	29	(伯父，叔父，小父)
達	243	タチ	134	
光	237	みつ	57	(人地57)

(2) 問題になる音訓の検討

当用漢字表のまえがきには「使用上の注意事項」というのが付記されている。これは，音訓表の適用範囲を示したものであるが，この規定のしかたには多少おおまかなところがあるため，実際にこれを適用するにあたっては疑問の起こる点が少なくない。そこで，その問題点を明らかにするため，上記の作業に並行して，表内か表外かの判定に迷う音訓を分類整理して検討した。

(3) 表記のゆれに関する分析

標本（前段・中段）に現われた，異なり約三万四千語（延べ約二十九万語）のうち，表記法の固定しないものについての調査を始めた。今年度は，漢字で書くか，かなで書くかで表記のゆれているもの，および送りがなのつけ方がゆれているものについてカード化し，目下分類整理中である。

E. 報告書（第二分冊）の内容

本年度は，『現代雑誌九十種の用語用字』の第二分冊（国立国語研究所報告22）として，漢字表編を印刷した。その内容は下記の通りである。

解説　次の二つの部分から成る。

1．調査のあらまし――用字調査のねらいと調査研究項目，調査対象，調査の結果と報告書の構成等について説明し，終わりに，この報告書におさめた漢字表の引き方についての解説を付けた。

2．漢字の字数――標本(注)に現われた漢字の使用度数の分布，および漢字の延べ字数と異なり字数に関する，一二の分析結果について述べた。ここでは，標本全体から見た場合，雑誌の部門によって分けた五つの層ごとに見た場合，および，漢字の制限範囲(教育漢字，教育外の当用漢字，表外漢字)別に見た場合の，それぞれの結果について示し，そこに見られる特徴的な傾向について説明した。なお，従来行なった，婦人雑誌，総合雑誌における漢字調査の結果とも，簡単な比較をした。

漢字表　この報告書におさめた漢字表の種類は，次の三つである。各表とも，はじめに「まえがき」を用意し，表の性格，体裁について説明してある。

使用率順漢字表（第１表）――標本使用度数９以上の漢字1995字を使用率の高い順に排列し，標本全体として見た場合，および五つの層ごとに見た場合の，使用順位と使用率とを示した表である。

用法別漢字表（第２表）――標本使用度数9以上の漢字1995字の一々について，(1)標本全体での使用順位と使用度数　(2)使われた音訓の種類と，それぞれの使用度数　(3)その漢字を用いた語の種類と，それぞれの使用度数（ただし，標本使用度数８以下の語については使用度数を掲げない）　(4)その漢字を用いた語の他の表記の種類と，それぞれの使用度数（ただし，他の表記の種類の使用度数が合計で８以下の場合はそれぞれの使用度数は掲げない）を，示した表である。

（注）用字調査は．現代雑誌九十種の全紙面から用語調査のために抽出した標本の三分の二の分量（全紙面のほぼ1／340）について実施した。この項で以下「標本」と称するのは、用語調査の標本の三分の二にあたるものをさす。なお，これはダブルサンプリングではなく、用語調査の標本の前段と中段とを使つたものである。

五十音順漢字表（第3表）——標本に現われたすべての漢字3328字を，主として音によって五十音順に排列した表である。このうち，標本使用度数9以上の漢字1995字に限っては，その使用度数と使用順位とを示したので，第1表や第2表への索引を兼ねることができる。なお，上記の3328字というのは，標本の前段・中段を通じて現われた異なり字数であるが，後段にいたってはじめて現われた漢字を追跡調査した結果，177字を得たので，参考のためその字母だけをこの第3表の中に掲げておいた。

上の第1表，第2表に掲げた1995という字数は，異なり字数の観点からすれば約60パーセントにとどまるが，延べ字数の観点からすれば，総使用度数の98.6パーセントを占めている。

F. 担　当　者

担当者は

見坊豪紀　水谷静夫　石綿敏雄　宮島達夫（書きことば研究室）
斎賀秀夫　松本昭（第三資料研究室）

であり，このうち，斎賀，松本は主として用字調査に従事した。

なお第一研究部長の林大が，意味による分類語彙表関係の仕事を分担した。また補助者として，研究補助員橋本圭子，高木翠，鈴木百合子，小林さち子，宇野瑠美子が作業に従事した。

付　調査した雑誌名一覧

Ⅰ　評論・芸文　12種

群像　芸術新潮　新潮　世界　大法輪　短歌　中央公論　俳句　美術手帖　文芸　別冊文芸春秋　みづゑ

Ⅱ　庶民　14種

葦　家の光　キング　サンデー毎日　週刊朝日　週刊サンケイ　週刊読売　人生手帖　特集人物往来　知性　日本週報　文芸春秋　丸　リーダーズダイジェスト

Ⅲ　実用・通俗科学　15種

エコノミスト　科学朝日　科学読売　自然　実業之日本　ジュリスト　商店界　ダイヤモンド　東洋経済新報　時の法令　農業朝日　農業世界　農耕と園芸　保健同人　ポピュラーサイエンス

Ⅳ　生活・婦人　14種

暮しの手帖　主婦と生活　主婦の友　スタイル　装苑　それいゆ

ドレスメーキング　婦人朝日　婦人画報　婦人倶楽部　婦人公論
婦人生活　婦人之友　若い女性

V　娯楽・趣味　35種

アサヒカメラ　囲碁　映画之友　映画ファン　オール読物　面白倶楽部
音楽の友　棋道　近代映画　月刊ファイト　傑作倶楽部　講談倶楽部
娯楽よみうり　実話雑誌　週刊新潮　週刊東京　小説倶楽部　小説サロン
小説春秋　小説新潮(別冊小説新潮を含む)　小説と読物　小説の泉
スクリーン　相撲　旅　トルーストーリー　文芸春秋漫画読本　平凡
ベースボールマガジン　宝石　明星　野球界　読切倶楽部　読切小説集
笑の泉

(見坊・斎賀)

日本言語地図作成のための調査(第6年度)

A. はじめに

北海道から沖縄まで，日本語地域の全域を範囲として，語の地理的分布を明らかにし，日本語の歴史を再構することを目的として始めたこの調査は，今年度，8か年計画[1]の第6年度を終えた。今年度は，後期計画[2]の第1年度にあたるが，265地点での調査を終わり，初年度からの調査地点数は，合計1930になった。

B. 担当者

前期計画と同様，地方言語研究室が調査センターとなり，調査全般の企画・運営および結果の整理に当たった。臨地調査は，主として地方研究員が地域を分担して行なったが，地方言語研究室の室員4名も，随時これに加わった。

昭和37年度にあたって，臨地調査を分担した人々は，次のとおり。

調査者番号	担当地域	氏　名	勤務先（1963年4月現在）	住所（左に同じ）
01	北海道Ⅰ	五十嵐三郎	北海道大学文学部(助教授)	札幌市月寒西3条5丁目
02	北海道Ⅱ	長谷川清喜	北海道学芸大学（助教授）	札幌市北23条西7丁目
03	北海道Ⅲ	石垣　福雄	札幌市教育委員会（指導主事）	北海道札幌郡手稲町西野79
04	青森	此島　正年	弘前大学教育学部（教授）	弘前市袋町20
05	岩手	小松代融一	県立杜陵高校（教頭）	盛岡市下小路63
48	宮城	加藤　正信	東北大学文学部（助手）	仙台市南小泉伊藤屋敷48
07	秋田	北条　忠雄	秋田大学学芸学部（教授）	秋田市手形東新町1
59	山形	佐藤　亮一	東北大学文学部大学院（学生）	仙台市福室字松堂市営住宅L B32の135
54	福島	三浦　芳夫	県立田村高校（教諭）	福島県田村郡三春町大町51
55	茨城	金沢　直人	茨城大学教育学部(助教授)	水戸市石川町4043の2

1) 当初は，7か年で終了する予定であつたが，1か年の延長を余儀なくされた。それはもつぱら諸物価，ことに運賃・宿泊費の値上がりがあつたにもかかわらず，一定の予算で実行しなければならなかつたからである。

2) 後章，および年報13参照。

11	栃木	多々良鎮男	宇都宮大学学芸学部（助教授）	宇都宮市一の沢町1の61
12	群馬	上野　勇	県立沼田女子高校（教諭）	沼田市810
52	埼玉	江原　要	市立城南中学校（教諭）	川越市南通町9の17
57	千葉	後藤　和彦	都立大学人文学部大学院（学生）	横浜市港北区大曽根町460
58	東京	馬瀬　良雄	長野県短期大学（講師）	長野市淀ケ橋町柳町アパートB14の1
49	神奈川	日野　資純	静岡大学文理学部（助教授）	静岡市大岩町2の82静岡大学大岩宿舎内
16	新潟	劔持隼一郎	県立柏崎高校（教諭）	柏崎市柏木町1255
17	富山・石川	岩井　隆盛	金沢大学教育学部（助教授）	石川県河北郡津幡町字清水ホ313
18	福井	佐藤　茂	福井大学学芸学部（教授）	福井市湊新町66
19	山梨	清水　茂夫	山梨大学学芸学部（助教授）	山梨県中巨摩郡白根町百々3062
20	長野	青木千代吉	市立三陽中学校（教諭）	長野県更級郡更北村中氷鉋1089
21	岐阜	谷開　石雄	県立岐阜商業高校（教諭）	岐阜市旦の島402
22	静岡	望月　誼三	静岡大学教育学部（教授）	静岡市北安東628
23	愛知	山田　達也	日本福祉大学（助教授）	名古屋市中村区大秋町3の26
56	三重	慶谷　寿信	名古屋大学文学部大学院（学生）	名古屋市北区若園町2の50今村方
50	滋賀	筧　大城	県立虎姫高校（教諭）	長浜市分木町1260佐脇方
25	京都[1]	奥村　三雄	岐阜大学学芸学部（助教授）	岐阜市長良六本松大学住宅
60		遠藤　邦基	京都大学文学部大学院（学生）	京都市左京区下鴨上川原町43
29	大阪	西宮　一民	奈良を見よ。	
28	兵庫	岡田荘之輔	町立温泉小学校（校長）・同幼稚園（園長）	兵庫県美方郡温泉町湯
29	奈良	西宮　一民	皇学館大学（教授）	枚岡市河内町920
30	和歌山	村内　英一	和歌山大学学芸学部（助教授）	和歌山市片岡町1の1
31	鳥取	広戸　惇	島根大学文理学部（教授）	出雲市元宮町
32	島根	岡　義重		島根県簸川郡斐川村大字富村
33	岡山	虫明吉治郎	県立岡山操山高校（教諭）	岡山市津島字イツクシ山2413の15

1）8月，一身上の都合から地方研究員を辞退した奥村氏に代わって，9月からは遠藤氏が担当した。

34	広島	村岡　浅夫	町立三興中学校（校長）	広島県佐伯郡五日市町屋代121
35	山口	阿波　　陽	県立下関南高校（教諭）	下関市小月町中迫2561中野方
36	徳島	宮城　文雄	徳島大学学芸学部（教授）	徳島県那賀郡那賀川町島尻931の２
37	香川	近石　泰秋	香川大学学芸学部（教授）	高松市九番丁公務員宿舎41
38	愛媛	杉山　正世	新田高校（教諭）	今治市河南町２区267
39	高知	土居　重俊	高知大学教育学部(助教授)	高知市弥生町44
40	福岡	都築　頼助	福岡学芸大学（教授）	福岡市高宮玉川町56
41	佐賀・長崎	小野志真男	佐賀大学教育学部（教授）	佐賀市赤松町中館93
43	熊本	秋山　正次	熊本大学教育学部(助教授)	熊本市若葉町36
44	大分	糸井　寛一	大分大学学芸学部(助教授)	臼杵市海添190
45	宮崎	岩本　　実	宮崎大学学芸学部(助教授)	宮崎市下水流町190の1
46	鹿児島	上村　孝二	鹿児島大学文理学部(教授)	鹿児島市武町965
51	沖縄	仲宗根政善	琉球大学（教授）	Crawford Hall 210, University of Hawaii, Honolulu, Hawaii, U. S. A.

（以上地方研究員48名）

99	柴田　　武	（室長）
98	野元　菊雄	
97	上村　幸雄	
96	徳川　宗賢	

（以上研究室員４名）

なお，結果の整理については，言語地理学の専門家W・A・グロータース神父の協力を受け，また，作業一般に，研究補助員白沢宏枝が参加した。

C．後　期　計　画

1．調査項目　――前期計画と変わった点について説明する。前期計画開始のころは，230項目の調査票（第１調査票・第２調査票[1)]）を，調査終了まで一貫して使用する予定であった。しかし，調査を進めてみると，これにいくらかの修正を加えれば，いっそうの成果を期待できることがわかった[2)]。そこで，後期計画では，当初の230項目のうち66項目を削り（新第１調査票・新第２調査票を作った），それに前期第４・第５年度に準備的に調査した55項目（第３調査

1）年報９参照。　2）年報12・13に，その考え方の一部が見られる。

票・第4調査票[1]）のうち51項目を加え（新第3・4調査票を作った），合計215項目で調査することにした。[2] 230項目から削った66項目の中には，調査第3年度まですでに調査を打ち切った11項目[3]も含まれているが，あとの55項目は第5年度をもって調査を打ち切ることになる。

調査を継続するか打ち切るか，つまり項目の採否は，研究室員4名が，調査結果を記入した整理地図について，全項目を検討した上で決定した。これは，第4・5年度に準備的に調査した55項目についても，同様である。採否の基準は，さらに調査を進めることによって得られるであろう効果の見通しであったが，削除した項目には，①すでに結果の大勢が明らかなもの，②これ以上調査しても3か年ぐらいでは成果の期待できないものが含まれる。

前期計画で調査を終わり，後期計画では調査しないもの70項目は，次の通り（項目の番号と語のみを掲げる）。

003	くもの糸	061	ほくろ	121	ごろごろ	167	きぬいと	203S	こわい
004	くもの巣	*062S	あざ	131	ごみ	168	もめんいと	*205S	こわい
017	黄色い	074	垢	132	ごみ	169	おりいと	206S	こわい
018	赤い	075	ふけ	133	ほこり	170S	せんたくする	207S	けち(だ)
*020S	青い	077S	こけ	134	ごみ	171S	せんたくする	208S	けち(だ)
021	嘘をつく	*078S	こけ	135	地震	172S	くさる	209S	けち(だ)
023	作る	080	男	137S	はやし・やま	173	米	210S	けち(だ)
024	作る	091	お釣り	139S	はやし	175	もち米	*211S	はそんする
*025S	なおす	092	かぞえる	140S	もり	176	飯米	227	ちっちっ
*027S	なおす	*098S	あずける	144S	かど	177	米びつ	229	ちゅんちゅん
*029S	おどろく	108	あした	145S	かど	183	畑	▲245S	うち
*030S	おどろく	109	あさって	151	灰	184	鳥おどし	▲246S	うち
037	鼻	113	あしたのばん	155	すりばち	192	すみれ	▲267	ふとる
050	辛い	*117	雨	156	すりこぎ	198	竹	▲285	やんま

＊印は，第3年度までで，すでに調査を打ち切ったもの。
▲印は，第4・5年度で準備的に調査したが，後期計画では調査しないもの。

なお，項目の採否の検討中，ある地域では調査を続けたいが，別のある地域ではもう調査しなくてもいいのではないかと考えられる項目が，いくつかあった。前期計画では，全国一率に，調査項目はどこでも同じであった。[4] しかし，

1） 年報12・13参照。 2） 沖縄は，地域的な特殊事情から，後期計画においても，旧第1・第2調査票から11項目を削ったものに新第3・4第調査票を加えて調査する。 3） 年報12参照。 4） 沖縄に関して特例がある。年報12・13参照。

後期計画では，結果についてすでにある程度の見通しが立っているから，そう機械的に調査しなくてもいいのではないか。そこで，後期計画においては，調査項目 215のうち38項目に関して，調査を続ける地域と，調査を打ち切る地域とを分けて指定し，できるだけ調査を能率的に進めることにした。

ある地域では調査を続けるが，ある地域では調査を打ち切る38項目の詳細は次頁の表の通り。×印は，その項目を，その地域で調査しないことを示す。

したがって，後期計画の調査項目全部で 215のうち，たとえば青森の地方研究員は，その担当地域内で198項目を，大阪の地方研究員は，同じく189項目を調査することになる。[1]

2．調査地点 ——前期計画５か年は，調査開始の昭和 32 年度に立てた計画にもとづいて調査を進めてきた。地点選定は，研究室員が中心となって行ない，基準は人口密度・自然地理的条件を主とした，機械的なものであった。前期計画で調査した地点は，全国で 1665 地点であった。

これに対して，後期計画３か年では，選定の基準を変え，主として言語的・社会的に重要な地点を選ぶことにした。[2] 資料としたものは，①地方研究員の意見，②各種の文献によって知ることのできる，古代から近世に至る地方文化の中心地と，水上交通の要衝などである，もっとも，第４年度・第５年度に準備的調査を行なった項目（第３調査票・第４調査票[3]）のうち大部分も調査するのであるから——その調査結果は，かならずしも全国に満遍なくばらまかれていない——，一面機械的な基準を加味する必要もある。全国的視野に立って，研究室で調整の上決定した後期計画における調査予定地点は，683である。[4]

なお，調査地点にについて，細かいことであるが，次のことを記録しておく。

(1) 調査予定地点682のうち，172か所は，特にその地点で調査したいものとして，調査にあたって変更しないよう，地方研究員に求めている（たとえば山形県米沢市中心部，岡山県牛窓町中心部など）。他については，どうしても調査できなければ，３kmの範囲での移動は許される。

(2) 各地方研究員の担当地域について，前期計画では改訂しなかったが，後

1) 沖縄については，21頁の脚注2)参照。 2) 沖縄については、昭和33年度に全計画における調査予定地点をきめたので．後期計画にあたつても，それは変更しない。 3) 年報12・13参照。 4) このうち本年度265地点で調査した。なお、この683には沖縄における調査予定地点22が含まれる。

項目 ＼ 地域	北海道Ⅰ	北海道Ⅱ	北海道Ⅲ	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野	岐阜	静岡	愛知	三重	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌山	鳥取	島根	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島
002 蜘蛛													×	×	×	×					×			×									×		×	×	×											
014 いくつ				×			×						×		×	×		×	×				×	×	×									×	×			×	×									
015 いくら				×			×	×					×		×									×	×								×	×	×			×	×		×							
016 いくつ				×			×	×				×	×		×								×	×	×								×	×	×			×	×									
019S あかい	×	×	×																																													
022 灸をすえる															×	×												×	×	×																		
026S なおす											×	×	×		×								×		×												×					×	×	×	×	×	×	×
028S おどろく	×	×	×			×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			×	×		×	×	×	×			×										×	×	×			×
031 頭				×	×	×	×	×				×	×		×	×		×	×		×	×		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×		
034 目				×			×																			×			×			×	×	×			×					×				×		
043 耳	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×							
044 口	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×							
058 痣	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×																
081 女										×	×	×	×		×	×					×	×		×																					×	×	×	×
082 爪										×	×	×	×	×	×	×					×			×																								
094 もらう	×	×	×			×		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×							
095 やる																											×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×							
096 呉れる													×		×	×					×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×					×	×	×	×	×							
097S あずける																										×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
099 借りる									×	×	×	×	×		×	×													×		×	×					×	×	×	×	×	×				×		
100 貸す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×															×	×		×		×						×	×	×	×	×	×				×		
101S かってくる	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×					×			×					×			×						×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
102 今日	×	×	×									×	×		×	×			×	×	×		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×							
125 雪	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×							
138 森										×	×	×	×	×	×	×		×	×	×	×		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×										×	×		×		×
147 井戸	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×				×	×		×	×																							
150 灰	×	×	×										×	×		×					×	×				×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			×	×	×	×
157 瀬戸物						×	×	×							×	×					×			×	×				×		×																	
166 糸																																										×	×	×	×	×	×	×
180 田	×	×	×																																													
201S おちる	×	×	×									×	×		×	×				×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×					×	×	×
202S すてる	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×																																					
217 たてがみ	×	×	×															×	×	×					×	×	×	×	×		×	×																
218 牛				×	×	×	×													×			×			×	×	×	×	×	×	×			×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
228 すずめ	×	×	×	×		×	×	×	×		×	×	×		×		×			×	×	×	×	×	×		×	×	×	×			×	×	×	×	×	×	×			×	×	×	×	×	×	×
230 とさか											×	×	×		×	×					×			×				×	×			×																
231 禿げる	×	×	×	×	×	×	×			×	×	×	×		×	×					×			×			×	×	×									×	×	×	×							
269 無い	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×							

期計画にあたって，調査の便宜を考慮して，部分的に修正した所がある。

変更を加えたものは，岩手・宮城・秋田・山形・奈良・和歌山・熊本・大分・宮崎の各地方研究員の担当地域である。

D. 進 行 状 況

1．調査地点 ——昭和37年度に調査した 265地点は，次のとおり。[1] なお調査者を番号で示した。

調査地点	調査者番号
北海道	
松前郡松前町字唐津	03
上磯郡木古内町字本町	03
奥尻郡奥尻村字奥尻	03
礼文郡礼文町香深字トンナイ	02
利尻郡利尻町沓形字泉町	01
利尻郡東利尻町鴛泊字本町	01
目梨郡羅臼町本町	02
紋別郡雄武町字雄武市街地基線中通り	02
雨竜郡幌加内町字平和	01
青森県	
青森市大字雲谷字山吹	04
五所川原市大字福山字福山	04
東津軽郡平内町大字狩場沢字浜懸	04
東津軽郡蓬田村大字阿弥陀川字阿弥陀川	04
東津軽郡平舘村大字根岸字湯ノ沢	04
東津軽郡三廐村大字宇鉄字竜飛	04
西津軽郡木造町大字出来島字雉森	04
西津軽郡鰺ケ沢町大字長平字音羽山	04
中津軽郡岩木町大字常盤野字上黒沢	04
岩手県	
盛岡市簗川第三地割	05
下閉伊郡新里村茂市	05
下閉伊郡岩泉町大川釜津田滝ノ上	05
下閉伊郡岩泉町字上有芸	05
岩手郡雫石町橋場	05
岩手郡葛巻町荒沢口	05
岩手郡岩手町川口字水無	05
岩手郡滝沢村柳沢	05
岩手郡松尾村寄木字畑	05
宮城県	
仙台市大字茂庭字中ノ瀬	48
塩釜市中心部	48
柴田郡川崎町青根	48
名取郡秋保村野尻	48
宮城郡宮城村定義	48
宮城郡泉町根白石	48
秋田県	
秋田市土崎港旭町字琴平	07
秋田市下浜村字羽川	07
横手市大町上丁	07
男鹿市船越町	07
由利郡仁賀保町平沢	07
平鹿郡大森町字大森	07
雄勝郡羽後町西馬音内上川原	07
雄勝郡雄勝町秋之宮造石	07
山形県	
山形市中心部	59
東根市関山	59
尾花沢市母袋	59
西置賜郡小国町大字小玉川字長者原	16
最上郡真室川町大字大沢	59
最上郡真室川町大字新及位	59
福島県	
会津若松市湊町大字原字新橋	54
安積郡熱海町大字安子島字町	54
安積郡逢瀬村大字多田野字久保田	54

1) 本年度から後期計画となるので各地点で調査した項目は，本文Cで説明したように，地方研究員担当地域ごとに異なる。沖縄では，旧第1・第2調査票から11項目を除いたものに，新第3・4調査票を加えた270項目を調査した。

耶麻郡山都町字館ノ原　54
耶麻郡西会津町(奥川)大字飯根字極入　16
耶麻郡猪苗代町大字若宮字鬼田　54
耶麻郡磐梯町字源橋　54
田村郡三春町字北町　54
田村郡中田村大字中津川字堂作　54

茨城県

水戸市泉町３丁目　55
土浦市外西町　55
高萩市大字中戸川字米平　55
北茨城市磯原町大字大塚字峰岸　55

栃木県

宇都宮市戸祭町　11
日光市稲荷町　11
真岡市田町　11
那須郡黒羽町大字須佐木　11

群馬県

群馬郡倉賀野町田子屋町　12
吾妻郡高山村大字中山字判形　12
利根郡利根村大字根利字西沢　12
利根郡片品村戸倉　12

埼玉県

浦和市高砂町２丁目　52

千葉県

安房郡白浜町白浜小字島崎　57
安房郡天津小湊町字内浦　57
安房郡長狭町字平塚大田代　57
君津郡平川町横田　57

東京都

文京区西原町　58
西多摩郡福生町福生　58
西多摩郡桧原村小沢　58
（大島支庁）利島村　99

神奈川県

藤沢市藤沢　49
愛甲郡清川村宮ケ瀬落合　49

新潟県

長岡市千手町３丁目　16
村上市大字村上安楽町　16
南魚沼郡六日町大字六日町　16
刈羽郡西山町大字下山田　16
刈羽郡黒姫村大字折居字餅糧　16
岩船郡朝日村大字三面　16
岩船郡朝日村大字高根　16

富山県

富山市岩瀬町御蔵町　17
新湊市放生津東町　17
下新川郡入善町大字入善町　17
射水郡小杉町三ケ　96

石川県

七尾市石崎町　17
輪島市大沢町大字宝来町　17
石川郡美川町字新町　17
河北郡宇ノ気町字宇野気　17
羽咋郡富来町福浦港　17

福井県

福井市春山中町　18
小浜市上根来　18
坂井郡金津町十日区　18
今立郡池田村河内　18
大飯郡大飯町本郷　97

山梨県

甲府市泉町　19
東八代郡石和町市部　19

長野県

上田市北天神町　20
佐久市大字原　20
南安曇郡穂高町　20
北佐久郡望月町春日堀端　20
上高井郡高山村荻久保　20
更級郡大岡村字宮平　98
埴科郡坂城町中之条　20
埴科郡松代町紺屋町　20
小県郡東部町楢原　20

岐阜県

岐阜市安良多町１丁目　21
羽島市竹鼻町上鍋　21
羽島郡笠松町新町　21
恵那郡上矢作町本郷　21
益田郡金山町本町　21
大野郡久々野町大字小屋名　98
吉城郡河合村羽根　21

静岡県

磐田市見付町　22
賀茂郡下田町３丁目　22
賀茂郡南伊豆町妻良　22
賀茂郡河津町小鍋　22
浜名郡舞坂町仲町　22
引佐郡三ケ日町三ケ日　22

愛知県

豊橋市瓦町字通り　23

西春日井郡清洲町	23
愛知郡日進町大字北新田	23
知多郡南知多町大字内海中前田	23
渥美郡田原町大字六連	96
三重県	
鈴鹿市江島町	56
伊勢市大湊町	56
南牟婁郡紀和町和気	99
北牟婁郡海山町上里	56
度会郡南島町方座	56
度会郡度会村脇出	56
滋賀県	
蒲生郡日野町大窪	50
愛知郡秦荘町岩倉	50
伊香郡木之本町大字杉野上村	98
京都府	
京都市伏見区淀町	60
綾部市味方町	97
亀岡市安町中	60
相楽郡木津町小寺	29
竹野郡網野町塩江	60
大阪府	
貝塚市南	29
茨城市泉原	96
富田林市宇甲田	29
南河内郡千早赤阪村千早	96
泉南郡岬町深日	30
兵庫県	
姫路市飾磨区御幸	28
明石市東魚町	28
多可郡加美町市原	98
神崎郡神崎町粟賀町	28
宍粟郡波賀町飯見	28
城崎郡竹野町竹野	28
出石郡但東町小坂	28
養父郡大屋町横行	28
三原郡緑町庄田	28
奈良県	
御所市706	29
吉野郡十津川村谷瀬	99
和歌山県	
東牟婁郡本宮町三越	99
西牟婁郡串本町大島	30
海草郡下津町下津	30
那賀郡粉河町鞆淵中ノ組	30
鳥取県	
米子市糀町1丁目	31
東伯郡三朝町丹戸	31
東伯郡三朝町助谷	31
東伯郡赤碕町宮木	97
島根県	
出雲市今市町	32
簸川郡佐田村大字反辺宇町	32
簸川郡大社町大字宇竜	32
周吉郡西郷町大字大久	32
穏地郡都万村大字油井	32
知夫郡西ノ島町大字別府	32
岡山県	
岡山市下之町	33
岡山市小串	33
津山市綾部字王地	96
玉野市向日比	33
和気郡吉永町都留岐	33
邑久郡牛窓町牛窓	33
広島県	
佐伯郡五日市町五日市	34
佐伯郡沖美町三吉字古戸	34
佐伯郡宮島町宮島	34
佐伯郡吉和村市垣内	34
安佐郡高陽町中深川中ノ堂	99
山県郡豊平町字長沢	34
山県郡芸北町細見	34
山口県	
萩市相島中	35
長門市通11区	35
豊浦郡豊浦町大字宇賀小字湯玉	98
美禰郡秋芳町嘉万八代中辺	35
阿武郡阿武町大字奈古浜	35
阿武郡須佐町大字鈴野川字大原	35
阿武郡田万川町大字江崎弌町	35
徳島県	
徳島市入田町笠木	96
小松島市二条通り	36
阿南市椿町横尾	36
板野郡大麻町板東字北条	36
香川県	
高松市丸亀町	37
小豆郡内海町福田	96
仲多度郡多度津町大通町	37
愛媛県	
西宇和郡瀬戸町大字川之浜	38
温泉郡中島町元怒和	38

越智郡伯方町大字木浦字瀬戸浜	38
周桑郡丹原町大字明河保井野字日浦	38
宇摩郡別子山村保土野	38
高知県	
高知市浦戸	39
安芸郡北川村島	39
香美郡物部村久保堂ノ岡	39
長岡郡大豊村立川下名成川	39
土佐郡土佐村東石原	39
福岡県	
久留米市諏訪野町５丁目	40
柳川市曙町	40
甘木市秋月魚町	40
八女市本通	96
糸島郡二丈村字深江	40
三井郡小郡町字大保	40
佐賀県	
佐賀市伊勢屋町	41
東松浦郡鎮西町大字馬渡島	41
東松浦郡相知町大字田頭	97
長崎県	
佐世保市早苗町	98
平戸市度島町度島浦	41
平戸市築地町	41
松浦市今福町楠原	41
北松浦郡生月町一部浦	41
北松浦郡大島村神ノ浦	41
下県郡厳原町大字小茂田	97
壱岐郡勝本町勝本浦	41
熊本県	
宇土市網田下網田西原	98
飽託郡河内芳野村大字船津	43
阿蘇郡阿蘇町大字赤水	43
八代郡泉村大字樅木	43
天草郡有明町上津浦字横浜	43
天草郡御所浦村嵐口	43
大分県	
臼杵市大字佐生藤田	44
津久見市大字四浦字落ノ浦	44
南海部郡米水津村浦	44
大野郡野津町大字清水原字今俵	44
直入郡荻町大字柏原字柏原	44
日田郡前津江村大野本村	96
宮崎県	
宮崎市上町１丁目	45
日南市大字酒谷字深瀬	45
日南市大字宮浦字吹毛井	45
東臼杵郡門川町字上納屋	45
東臼杵郡北郷村大字入下字椿原	45
東臼杵郡諸塚村大字家代本村	45
鹿児島県	
川内市平佐町加冶屋馬場	46
川内市港町京泊	46
串木野市羽島小字白浜	46
出水市大字上大川内大水流	46
加世田市大字唐仁原小字大崎	46
垂水市牛根町麓宮崎小路	98
西之表市国上浦田	99
揖宿郡喜入町前之浜	98
揖宿郡山川町福元	46
川辺郡坊津町坊	46
日置郡郡山町郡山	99
薩摩郡鹿島村藺牟田	46
出水郡高尾野町旧番所	46
沖　縄	
那覇市寒川町１丁目	51
北部地区（国頭郡）伊江村字東江上	51
北部地区（国頭郡）屋我地村字饒平名	51
南部地区（島尻郡）小禄村字小禄	51
南部地区（島尻郡）東風平村字富盛	51
中部地区（中頭郡）読谷村字波平	51
中部地区（中頭郡）具志川村字兼箇段	51

2．同行調査 ――次に示す地点では，地方研究員の調査に地方言語研究室（調査センター）の室員が同行し，調査現場で起こるいろいろな事態について打ち合わせをして，全国での調査が統一して行なわれるように努めた。同行調査を行なった地方研究員は，昭和37年度から新たにこの計画に参加した人である。

地点名	地方研究員	同行研究室員
山形県東根市関山	佐藤　亮一	徳川　宗賢

なお，年度途中から調査に参加した遠藤氏についての同行調査は，昭和38年度に行なう予定である。

3．調査者の言語の調査――昭和36年度までに集めた「調査者の言語[1]」の調査結果を補充するために，新しく研究員になった2名（遠藤・佐藤）についての資料を集めた。

E．来年度以降の見通し

昭和37年度を第1年度とする「日本言語地図作成のための調査」後期計画は特別の事態がおこらない限り，昭和39年度にその第3年度を終わり，8年間にわたる全計画を終了するであろう。（柴田・徳川）

1）年報11参照。

中学校生徒の言語能力の発達に関する研究

A. 前年度までの経過

国語教育研究室では，小学生の言語能力の発達に関する調査研究にひきつづいて，継続調査法による中学生の言語能力の発達に関する研究を行ないたいと思っているが，この調査を始める前に，あらかじめ，中学校1年から3年までの間にみられる言語能力の発達の実態，傾向，問題点等を概観し，中学校の特殊性に適した調査方法，調査問題等を検討しておく必要があるので，昭和36年度に，中学生の言語能力の実態についての概観調査を実施した。

調査の実施校には，一，二の特定地域にかたよらず，なるべくいろいろな地域の特殊性が出，それらの地域から出そうな問題点を把握することができるように，大都市・地方都市・農村・山村・漁村・炭坑地域の性格をもった，東京都新宿区四谷第二中学校・滋賀県大津市打出中学校・神奈川県中郡比々多中学校・長野県諏訪郡富士見南中学校・宮城県桃生郡雄勝中学校・佐賀県多久市中部中学校の6校を選んだ。6校の全学年からそれぞれ1学級分（学校によっては2学級分実施したところもある）の生徒を被調査者とした。

調査項目は，聞き方，話し方（いずれも録音器使用），読解，読書量（読書速度），作文，文字（漢字），語彙，文法，表記（送りがな・かなづかい），付帯調査（文字・語彙，作文の発達要因調査）にわたり，テスト所要時間は延べ8時間を要する規模のものとなった。この調査項目が広範にわたったことと，テストの実施時期がいろいろな事情のために遅れた（12月～1月）こととから結果整理の大半が，37年度の仕事として持ちこされた。

B. 本年度の研究作業の概要

本年度のおもな仕事は，(1) 36年度末に実施した中学生の言語能力の実態調査の結果整理と，(2) 国民各層の言語生活の実態調査（特別共同研究）のうち学校の生徒を対象とする調査――「中学生・高校生の文字習得要因調査」の問

題作成・実施・結果の集計整理とである。

1　中学生の言語能力の実態調査の結果整理作業

この調査項目は，次の一覧表にみられるように多項目にわたっている。

義務教育終了者として必要と思われる能力が，中学生のうちにどの程度つくか，また中学生としての学年的な発達はどうなっているかなどがわかるように従来行なわれた各種の調査・検査，および教科書（各社）などを参考にして，問題を作成した。また，小学校高学年で実施した諸調査の結果なども参照し，その発展的な問題，あるいは，ある部分はそのままの問題をとり入れて，中学生としての発達，あるいは発達上の特色がわかるように配慮した。

言語能力の実態調査のテスト項目一覧

テストの種類	問題構成	調べる能力
聞き方 （録音した話を再生して聞かせる）	I　二つの同種のニュース 1．公安委員長会議の話 2．オリンピック組織委員会の話 II　座談会（スポーツについて）を聞かせる。	二つの同種の話を継続的に聞いた場合の関係的な聞きとり理解力を調べる。 1．数人の発言する座談会での理解能力を調べる。 2．座談会を聞く前と，聞いたあとでの話中の語句（10語句）の理解度の差と，語句の理解と話の理解との相関を調べる。
話し方 （生徒の話を録音する。） 個別テスト	一定の話題（作文IIと同じ）で話させる。	1　一定の話題（『私のきらいな学科について』）について，自分の意見・感想を人に伝える力をみる。 2　作文テストとの比較により，ことばの表現的特徴をとらえる。 3　方言介在の特徴を調べる。 付　改まった場での応答のしかたをみる。
読解力	I　（説明・小説・評論・随筆・論説文） II　（随筆・説明$_2$・手紙・論説文）の各文	1　説明的文章および生活文（説明・評論・論説・手紙など） 2　文学的文章（随筆・小説など） などそれぞれの文章に即した読解能力

	章（Ⅰ・Ⅱとも５題）を読解させる。	を調べる。 （１……要点・要約・要旨<意図>・段落・文脈　２……情景・心情・主題・文脈・細部）
読書量 （読書速度）	１文章500字（本文400字・設問 100字），10文章からなる小学校高学年～中学生程度の生活文を読ませる。	読みの上で，困難のない生活文が３分間でどの程度読めるかの読書量（読書速度）をみる。
作文	Ⅰ　通信文（手紙）を書かせる。 付帯調査 Ⅱ　文題(「私のきらいな学科について」)を与えて，意見・感想文を書かせる。	人から通信を受け，それに即して適切な通信文を書いて出すという条件設定のもとで，手紙を書く能力をみる。（あわせて封筒の書き方もみる） 手紙を書くことの学習・経験の有無・度合を調べ，実際の手紙を書く力との関連を調べる。 共通の経験で，具体的に意見や感想の出やすい題目「私のきらいな学科について」によって，意見・感想を文にまとめる能力をみる。
文字	Ⅰ　当用漢字のよみ（200字） １　教科書（７社）で１～３年にそれぞれ共通して提出している当用漢字 160字 ２　教科書に未提出又は提出度は少ないが社会生活で用いられる当用漢字　40字 Ⅱ　漢字のかき（100字） １　小学校終末テスト結果正答率の低い教育漢字，書く生活の上で必要な漢字70字 ２　社会生活で多用される当用漢字　30字 付帯調査	１　学習した当用漢字の読みの習得度をみる。 ２　義務教育終了者が社会生活で経験する文字が，どの程度読めるかをみる。 １　教育漢字を書く力の発達をみる。 ２　社会生活で多用される当用漢字がどの程度書けるかをみる。 新聞や一般の読み物に，どの程度親しん

		でいるかを中心に，他のマスコミ（ラジオ・テレビも含む）への接近度をたずね文字・語彙習得と，特に新聞・雑誌の閲読状況との関係をみる。
語　　彙	I A　4語 　B　8語 } 小学校6年生のテスト語彙から 　C　5語（34年度全国学力テスト問題から） 　D　漢　語　15語 II E　和　語　15語 　F　外来語　21語 　G　反対語　4語 　　　類似語　4語 　H　ことわざ　10語 　I　漢語　6語（Dと共通）	A・B語彙理解の程度，発達を，テスト法によって(A正否判別法　B選択法)みる。 C全国水準との比較をする。 D・E・F それぞれ中学1年～3年用に分けて語彙をえらび，その理解度をみる。 G反対語・類似語をみつける力をみる。 H日常接することが多いことわざの意味の理解度をみる。 I語の使用力をみる。
文　　法	I A助詞の用法　(4) 　B文の接続のし方(6) 　C各種の文法能力(5) 　D首尾照応の力　(3) 　E接続詞の使い方(3) II F修飾のしかた　(5) 　G助動詞の用法　(4) 　H動詞の活用形　(6) 　I動詞の基本形　(2) 　J用言の基本形　(10) 　K男性語・女性語を区別する力　(10) 　L敬語を使い分ける力　(4)	A～Lのそれぞれが問題としている文法能力がどの程度あるかをみる。
表　　記	I　送りがな 名詞・複合名詞・動詞・複合動詞・形容詞・副詞・形容動詞など　85語	中学生の送りがなのつけ方の実態と，その問題点を調べる。

	II　かなづかい 助詞（は・へ・を）・拗音・促音・長音（ア・イ・ウ・エ・オ列）ぢ・じ，づ・ず，同音の連呼，連濁音，二語の連合によるぢ・づ 刺激語　65語 （聴写による）	中学生のかなづかいの実態と，その問題点を調べる。

これらの各調査項目について，主として，次の観点から整理作業をすすめた。

1　中学生の言語能力の学年的発達状況

2　中学生の言語能力における問題点

3　小学生の言語能力との比較，特質

4　各言語能力の間の相関関係

5　男女差・地域差

本年度の予定としては，この調査の集計整理作業を完了し，まとめの段階——原稿作成にまで進むはずであったが，調査項目が多岐にわたり，整理作業が予想外にひまどったことと，本年度のもう一つの仕事，(2)の「国民各層の言語生活の実態調査」に参加し，その担当部分の問題作成・実施・結果の集計整理等に相当時間をさいたために，予定のまとめにまで至らず，各調査項目の第一次集計整理を終るまでに止まった。各能力間の相関を見るなどの第二次集計整理は，昭和38年度前期にも引きつづき行ない，調査結果はまとめて報告書として刊行する予定であるが，各調査項目のうち，集計・整理が比較的進んでいる語彙テストの一部について，中間報告をしておくことにする。

2．中学生・高校生の文字習得要因調査は，「国民各層の言語生活の実態調査」（特別共同研究）に参加した当研究室がその一環調査として行なったもので，この共同調査の調査地点として，特定の地域（新潟県長岡市）が選ばれたので，地域における文字刺激が漢字習得にどのような影響を及ぼしているか，その習得要因と経路を，表外字を中心に，当用漢字・教育漢字の読み書き調査によってみようとしたものである。長岡市の中学校2校，高等学校3校を調査対象

校としたほか対照調査校として，東京の中学校1校，高等学校1校，山形市の高等学校1校に同一の調査を行なって，結果の解釈の参考にした。調査の結果は，集計整理を完了している。

C. 担　当　者

「中学生の言語能力の発達に関する研究」は，下記の国語教育研究室員および第2研究部長輿水実の共同研究であるが，調査項目が広範なため，問題作成，結果の整理・まとめ等については，それぞれ分担を決め，随時，共同討議にかけながら，研究作業をすすめた。

輿水　　実（読解・読書量）

芦沢　　節（作文・文字・表記）

村石　昭三（聞く・話す）

吉沢　典男（語彙・文法）

なお，研究補助員，根本今朝男・川又瑠璃子が，集計整理などの作業を助けた。　（芦沢）

D. 語彙力検査

語彙の検査は，上記「問題の構成」に示したように，問A～Lの9問によって行なった。そのうち，問A～Cで，小学校6年生，および34年度全国学力テストとの比較をし，この調査対象校の生徒の語彙力を一応たしかめておき，問D以下でそれらの生徒の語彙力の発達をみようとしたものである。ここでは，そのうちの中学生の学年別語彙を想定して選んだ語からテストしてみた問D，E，Fの3問の結果について述べる。

1. 検査語彙・方法

問D，E，Fは，語彙理解の程度を，学年発達をタテの軸に，地域差をヨコの軸として，調査しようとしたものである。

まず，検査語彙は，つぎのようである。

〔問D〕　15語

① 狂的　私語　重々　着服　物色　② 意表（をつく）　横死　去来　才色

段取り　③　引導（をわたす）　家訓　こうでい〔拘泥〕　正攻法　氷解

<注　①②③は相当すると考えられる学年別を示すためのもの。後に説明>

〔問E〕　15語

①　きわだつ　まのあたり　ときめく　のさばる　さりげない

②　あらいざらい　うごめかす　しどろもどろ　はがゆい　毒づく

③　荒立てる　息まく　うらはら　ごうも（〜ない）　見つくろう

〔問F〕　21語

①　アクセサリー　クリスチャン　シーン　デッサン　テーマ　マッチする
モザイク　②　アマチュア　インフレ　ソナタ　タイピスト　デビューする
ユーモア　ラッシュアワー　③　アトリエ　コスト　コンサート
シャンデリア　ナンセンス　ブローカー　メッセージ

これら問D〜Fを通じて，①グループの5または7語は，発達的にみて中学1年に相当する語彙と考えられるものであり，同じく②グループは2年に，③グループは3年にそれぞれ相当すると考えられるものを選んだものである。

この学年別相当の語彙を選ぶにあたっては，つぎの手続きによった。

さきに，文部省は「児童，生徒の語い力の調査」を行なってきており，その第一次の発表に示されている小学校6年生が調査語14,241語に対して示した理解度を一応の基準として，学年別に学習語彙を配当しようという試みが一部で行なわれている。それによれば，理解度の低い20%までの語と，理解度の高い80%以上の語を除いた残りの語を，10%の幅で区切って，六つのランクとし，この六つのランクを理解度の高い方から小学校4年，5年，6年，中学校1年，2年，3年の6か年に配当する。このようにして各学年に配当されている語の中から，中学1年〜3年に相当する検査語を，適宜選んだものである。

問題をつぎに示すが，検査の方法として，問D・Fは定義選択法により，問Eは用例選択法によった。

〔問題〕

〔問D〕つぎのことばの意味としては，それぞれ，1・2・3・4のうち，どれが正しいでしょうか。正しいと思うものの番号に○をつけなさい。

(1) 狂　的
- 1　きちがいのようす，ありさま。
- 2　まとが狂ってしまうこと。
- 3　きちがいじみたようす。
- 4　狂ったまと。

(2) 私語する
1 ひそひそ話をする。
2 自分から話しだす。
3 ひとりごとをいう。
4 自分でことばを作る。

(3) 重々
1 おもおもしい。
2 重なっているようす。
3 二つがさねの重箱。
4 かさねがさね。

(4) 着服
1 不服(ふふく)を胸(むね)にもっていること。
2 ひそかにとって自分のものにしてしまうこと。
3 洋服がつくこと。
4 洋服。

(5) 物色
1 中間色の別名。
2 ものの色彩(しきさい)。
3 黒と赤の混合色。
4 あれこれと，さがすこと。

(6) 意表をつく
1 相手の思いがけないところをつく。
2 意見を表にまとめる。
3 めいめい意見をあらわす。
4 辞表(じひょう)をつきつける。

(7) 横死
1 病気の名前の一つ。
2 思いがけない災難で死ぬこと。
3 きいろになって死ぬ病気。
4 横になって死ぬこと。

(8) 去来する
1 去年(きょねん)来たことがある。
2 ゆっくりとやってくる。
3 去っていく。
4 いったりきたりする。

(9) 才色
1 才知(さいち)と容色(ようしょく)。
2 色の配合。
3 中間色の名前の一つ。
4 才能と色彩の感覚。

(10) 段取(だんど)り
1 じゅうどうの段をとること。
2 段々をとりはずすこと。
3 位取りの別語。
4 手順。

(11) 引導をわたす
1 人々を教えみちびく。
2 引率者(いんそつ)をかえる。
3 宝物を人にわたす。
4 最後的な宣告をする。

(12) 家　　訓
1 家の設計図。
2 月々の家の借り代。
3 家名のよみ方。
4 家庭の教えや，いましめ。

(13) こうでい
1 こだわること。
2 しょうちすること。
3 しょうちしないこと。
4 かたいどろ。

(14) 正 攻 法
1 相手をひどくやっつけること。
2 あれこれ策略（さくりゃく）を用いないで，正しい方法で攻めること。
3 成功に必要な方法。
4 正面の方から攻めること。

(15) 氷　　解
1 こおりがとけること。
2 数学の解法の一つ。
3 こおりがとけるように，うたがいがとけること。
4 化学の分解法の一つ。

〔問Ｅ〕つぎの(1)から(15)までの，ことばの使い方としては，それぞれ，イ・ロ・ハ・ニのうちで，どれがよいでしょうか。よいと思うものひとつの記号に○をつけなさい。

(1)きわだつ
イ，よし子さんは大きな杉の木のもとへきわだった。
ロ，太郎くんは，きわだって歩いたので石につまずいた。
ハ，弟が「早く電車に乗ろう」ときわだったので，ぼくは「あわてなくてもいいよ」といってやった。
ニ，着物を着た人はたくさんいるが，おねえさんは，きわだって美しく見える。

(2)まのあたり
イ，トンネルを出ると，まのあたりに海がみえた。
ロ，山田さんはやさしくて，まのあたりがいい人だ。
ハ，冷たい風が，まのあたり吹きすさんだ。
ニ，まのあたりが悪くて，きのこによる食中毒をおこした。

(3)ときめく
イ，ぼくたちは，山の頂上に立って，「やっほう！」と大きな声でときめいた。
ロ，にわとりは，毎朝早くときめく。
ハ，ぼくは，「こんどの日曜日にハイキングしないか。」と，ときめいた。
ニ，いよいよ，きょう，わたしたちの作った放送劇が放送されるんだと思うと，しぜんに心がときめいた。

(4)のさばる
イ，わたしは，ゆうべ夢をみて，思わず足をのさばらせた。
ロ，大山くんは，学校の帰りに，いなごをとろうとして，たんぼの中へのさばった。

ハ，このごろ，駅前の盛り場に不良学生がのさばりだしたので，警察では注意している。

ニ，広い牧場には，牛があちこちに，ゆうゆうとのさばっていた。

(5)さりげない

イ，おとうさんは，さりげないことばかりして，子どもたちを笑わせる。

ロ，ぐっすりと眠ったあとの気分は，さりげなくさわやかだ。

ハ，その人は，あとから乗りこんできた老人に，さりげなく立って席をゆずった。

ニ，おばさんは，ときどき，ぼくのことを，「あんたはほんとにさりげないわね。」といって，ほめてくれる。

(6)あらいざらい

イ，きのうは一日中あらいざらい洗濯した。

ロ，何もかも，あらいざらいしゃべったので，気がすっと軽くなった。

ハ，この辺も人家がふえてきて，あらいざらい土地が値上がりしている。

ニ，登山熱はますます盛んで，日本のあらいざらいの山は，登山者でいつもにぎやかだ。

(7)うごめかす

イ，動物園の象は，バナナをもらうとうれしそうに鼻をうごめかした。

ロ，けんび鏡でのぞくと，いるいる。アミーバがうようよとうごめかされている。

ハ，太郎くんは，先生にほめられたので，とくいげに鼻をうごめかした。

ニ，大きな地震がおこって，家全体をうごめかしている。

(8)しどろもどろ

イ，おかあさんの作っているおしるこの鍋(なべ)の中をのぞくと，あずきがおいしそうにしどろもどろになっている。

ロ，不意(ふい)に質問されたのであわててしまい，わたしの答えはしどろもどろで，みんなに笑われてしまった。

ハ，運動会が終わり，父兄(ふけい)たちは，しどろもどろ連れだって帰っていく。

ニ，秋の山はしどろもどろにもみじしていて，とてもきれいだ。

(9)はがゆい

イ，このあいだ治療してもらった二本の虫歯(むしば)が痛みだして，はがゆくてしようがない。

ロ，堅(かた)い紙を食べさせたら，ひつじははがゆいような顔で，すぐにはきだしてしまった。

ハ，いくら説明しても，弟はわかってくれないので，わたしははがゆくてしかたがなかった。

ニ，毎日雨が降りつづき，はがゆくていやな天気です。

(10)毒づく

イ，そのきのこは，大きくなると毒づいてきて，食べられない。

ロ，よっぱらいがいくら毒づいても，そのおまわりさんは，相手にしませんでした。

ハ，どうしてそれが毒づくかというと，製造過程(せいぞうかてい)でよごれがはいるからです。

ニ，あの人は，このごろ急に毒づいた服装を身につけるようになった。

⑾荒立てる

イ，そんなにほこりを荒立てては，みんながめいわくするじゃないか。

ロ，入場したら荒立てないように静かにしていてください。

ハ，あの人が荒立てられたのは，たくさんお酒を飲みすぎたからだよ。

ニ，あの人は，すぐに事を荒立てるので，司会者としては，適任ではない。

⑿息まく

イ，いくら息まいても，もう，すんだことはしかたがないじゃないか。

ロ，百メートル競走をしたあとは，みんなはあはあと息まいている。

ハ，しめきった部屋で炭火を使うと，息まいてきて衛生上よくない。

ニ，もっと息まかなければ，長くはもぐれないさ。

⒀うらはら

イ，きょうはうらはらと晴れわたっていかにも春らしい日です。

ロ，それは同じことをうらはらの表現であらわしたにすぎない。

ハ，着物のうらはらは，あまり厚くないほうがいいと思う。

ニ，あの人の言うことには，うらはらがあるので，人に信用されない。

⒁ごうも

イ，仕事がごうもうまくいかないので，みんなにすまないと思う。

ロ，「ごうも動ずることなく，事にあたる」ということがあるね。

ハ，みんなが力を合わせたので，車はごうも動き出してしまった。

ニ，「ごうも多くも望みなきにあらず」ということがあるね。

⒂見つくろう

イ，ぼくの顔をそんなに見つくろわないでくれよ，はずかしいじゃないか。

ロ，スケッチするのにも，もっとよく見つくろわなければいけない。

ハ，ぼんやりと見つくろっていたので映画のすじは忘れてしまった。

ニ，クラスの懇親会の費用は一人五十円ですから，お菓子は適当に見つくろって買ってください。

〔問Ｆ〕つぎのことばの意味としては，それぞれ，１・２・３のうち，どれが正しいでしょうか。正しいと思うものの番号に○をつけなさい。

(1)アクセサリー
- 1　はでな服装。
- 2　自動車の運転装置の一つで，速度を調節するもの。
- 3　服装に，変化や色彩をつけるための飾り。

(2)クリスチャン
- 1　キリスト教信者。
- 2　外国人によくある名前。
- 3　スキーのすべり方の一つ。

(3)シーン
- 1　場面。光景。
- 2　季節。時期。
- 3　物語のすじ。

(4)デッサン
- 1　風景画。
- 2　画家の名前。
- 3　下絵の素描。

(5)テーマ
1 登場人物の感情。
2 問題。題目。
3 余裕。ひま。

(6)マッチする
1 一致する。似合う。
2 はみだす。
3 間違える。

(7)モザイク
1 本物と変らないような，よくできた模造品(もぞうひん)。
2 西洋式に建築したビル。
3 ガラス，タイル，木片などを材料にしたはめこみの絵や，もよう。

(8)アマチュア
1 無線通信の技術者。
2 しろうと。
3 ものずき。

(9)インフレ
1 お金(かね)の発行高が急にふえたために，物の値段がどんどん高くなること。
2 お金の発行高がへったために物価がさがること。
3 流行性感冒の一種。

(10)ソナタ
1 作曲家の名前。
2 器楽の独奏曲。奏鳴曲(そうめいきょく)。
3 ピアノの一種。

(11)タイピスト
1 自分のタイプばかり気にする人。
2 タイプライターを打つのを仕事とする女の人。
3 機械の部品の名まえ。

(12)デビューする
1 はじめて，おおやけの場に登場する。
2 映画に撮影する。
3 おおやけの場であいさつする。

(13)ユーモア
1 品のいい，しゃれ。
2 楽曲の名前。
3 ひにく。

(14)ラッシュアワー
1 混雑(こんざつ)時間。
2 休み時間。
3 よく聞かれる放送時間。

(15)アトリエ
1 医師の診察(しんさつ)室。
2 画家の仕事部屋。
3 がくぶち。

(16)コスト
1 消費価格。
2 生産原価。
3 輸出入品。

(17)コンサート
1 講演会。
2 演奏会。
3 食後の果物。

(18)シャンデリア
1 壁にかける，かざりの絵。
2 街路樹(がいろじゅ)の一種。
3 天井からつるす，かざりの電燈。

(19)ナンセンス
1 ばかげたこと。
2 おもしろいこと。
3 むずかしい意味のことば。

(20)ブローカー
1 仲買人。
2 小売人。
3 暴利をむさぼる人。

(21)メッセージ
1 伝言。
2 電報。
3 配達物。

(以上いずれも実際はタテ書き)

なお，問Dのうち，重々，物色，段取り，去来，こうでい，氷解の6語については，問Iにおいて再び提出して，短文作成法（それぞれの語を使って短文をつくらせる）による検査をも行なった。ただし，問Dと問Iとは離して実施し，Dを先にIは後の時間に行なった。

被験者数は，上記6校の生徒で総計 805名（1年男 143，女 131，計 274・2年男 152，女 129，計 281・3年男 123，女 127，計 250・ 男合計 418，女合計 387）である。

2．検査の結果

検査の結果を通覧するとき，まず目立つものは地域差であり，つぎには学年的発達の傾向である。男女差はほとんど見られないといってよい。

問題ごとに正答率を示すと，つぎのようである。ここで調査校はY，U，Hなどの記号で示したが，Yは大都市校，Uは中都市校，Hは農村校，Fは山村校，Oは漁村校，Nは炭坑地域校を示し，以下これに準ずることとし，Y校，N校のように略称することがある。

表1～3にみられるとおり，大都市・中都市・農村・山村・漁村・炭坑地域の地域差が相当はっきり認められよう。

各校平均を比較するとき，問Dにおいては約14%，問Eにおいては約20%，Fにおいては約30%の開きが，最高と最低との間にみられる。

大都市校が高く，漁村・炭坑地域が低いという傾向は，とくに問Fにはっき

<表1> 〔問D〕学校別正答率（%）

調査校＼検査語	1 狂的	2 私語	3 重々	4 着服	5 物色	6 意表	7 横死	8 去来	9 才色	10 段り取	11 引導	12 家訓	13 こでうい	14 正法攻	15 氷解	平均
Y	59.3	7.1	56.4	25.0	45.0	66.4	62.1	53.6	35.7	87.9	23.6	80.7	38.6	77.9	62.9	52.1
U	54.5	3.5	54.5	30.1	34.3	53.8	58.7	48.3	28.0	83.9	35.0	77.6	55.9	82.5	58.0	48.7
H	44.4	2.1	45.1	23.6	33.3	36.8	55.6	34.0	32.6	57.6	22.2	72.9	34.7	75.0	59.7	46.6
F	43.3	4.7	44.9	23.6	24.4	37.8	39.4	45.7	23.6	81.1	17.3	67.7	54.3	62.2	34.6	40.3
O	26.2	19.7	45.9	46.7	44.8	47.5	27.0	45.9	23.8	54.1	22.1	54.1	48.3	77.9	58.2	42.7
N	33.8	6.2	53.1	21.5	32.3	38.5	43.1	27.7	29.2	47.7	23.1	63.1	43.8	71.5	40.0	38.3
平均	44.2	6.9	50.1	28.2	35.2	47.1	48.4	42.5	29.0	69.1	24.1	70.0	45.8	74.7	52.6	44.5

<調査校の記号については本文参照>

<表2> 【問E】学校別正答率（%）

調査校＼検査語	1 きわだつ	2 まのあたり	3 ときめく	4 のさばる	5 さりげない	6 あらいざらい	7 うごめかす	8 しどろもどろ	9 はがゆい	10 毒づく	11 荒立てる	12 息まく	13 うらはら	14 ごうも	15 見つくろう	平均
Y	72.7	52.5	81.3	79.1	61.2	82.7	20.9	82.0	71.9	32.4	77.0	62.0	19.4	38.8	79.1	60.9
U	63.9	34.0	64.6	50.0	45.8	66.7	27.1	70.1	61.1	27.8	66.0	41.0	9.7	29.1	73.6	48.7
H	58.7	28.0	62.2	50.3	48.3	57.3	21.7	75.5	62.9	25.1	46.2	39.2	19.6	35.7	68.5	46.6
F	50.4	33.1	66.1	62.2	36.2	59.1	28.3	64.6	38.6	22.8	53.5	41.7	17.3	24.4	37.0	42.4
O	55.6	50.8	72.2	48.4	40.5	34.9	23.0	57.1	57.1	23.8	32.5	28.6	18.3	18.3	34.9	39.7
N	54.8	30.2	54.8	41.3	43.7	45.2	21.4	52.4	77.8	31.0	39.7	23.0	14.3	23.8	38.9	39.5
平均	59.6	38.0	67.0	55.4	46.2	58.3	23.7	67.5	59.1	27.2	53.6	39.0	16.4	28.7	56.4	46.4

り認められる。これは検査語の性格を反映していよう。

検査語別にみるとき，各問において平均正答率の低い検査語は，各校とも一様に成績がわるいことが目立っている。たとえば，問Dの2・3・9・11，問Eの7・10・13・14などは，地域差がぐっと接近したり，地域差による上下関係が乱れてきている。できない語は，地域に関係なく成績がよくないわけである。

問題別にみるとき，問Fが平均において問D・Eを約20%離して上位にある。問Dは主として漢語的なものを中心とした検査語であり，問Fは主として和語的なものを中心とした問題であり，問Fは外来語の問題である。大まかにいっ

<表3>【問F】学校別正答率(%)

調査校＼検査語	1 アクセサリー	2 クリスチャン	3 シーン	4 デッサン	5 テーマ	6 マッチする	7 モザイク	8 アマチュア	9 インフレ	10 ソナタ	11 タイピスト	12 デビューする	13 ユーモア	14 ラッシュアワー	15 アトリエ	16 コスト	17 コンサート	18 シャンデリア	19 ナンセンス	20 ブローカー	21 メッセージ	平均
Y	97.8	92.8	89.9	76.3	84.9	87.1	77.0	74.8	56.8	76.3	94.2	79.9	91.4	98.6	77.7	37.4	89.9	79.1	48.9	66.9	85.6	79.2
U	98.6	86.8	86.8	84.0	80.6	86.8	68.1	62.5	56.9	76.4	87.5	85.4	91.7	85.4	68.1	33.3	77.8	56.2	28.5	52.8	75.0	72.8
H	91.6	71.3	70.6	79.0	76.9	76.9	64.3	35.7	42.0	71.3	67.8	62.9	71.3	72.7	62.9	39.9	74.8	45.5	31.5	49.0	66.4	63.1
F	89.0	68.5	65.4	82.7	85.0	72.4	59.1	52.0	52.8	78.7	66.1	55.9	81.1	59.8	55.1	32.3	68.5	44.9	31.5	40.0	67.7	62.3
O	78.6	57.1	46.8	38.9	34.1	36.5	50.0	55.6	36.5	65.1	48.4	49.2	54.8	40.5	49.2	26.2	66.7	45.2	24.6	34.9	52.4	47.2
N	84.1	77.0	57.1	66.7	55.6	75.4	68.3	38.9	48.1	65.9	82.5	50.8	69.0	56.3	47.6	35.7	63.5	41.3	30.2	42.9	69.8	58.7
平均	90.3	76.0	70.5	71.8	70.0	73.2	64.7	53.4	49.1	72.4	74.9	65.4	77.0	69.8	60.7	34.3	74.7	52.4	32.7	48.2	69.8	64.1

て，ここに提出した検査語についていうならば，外来語は比較的理解度が高く（64.1%），漢語的なもの（44.5%），和語的なもの（46.4%）は，理解度がやや低いといえよう。なお，問Fについては，選択肢が三つであるから，その正答率も上回っているという点も考慮して，結果をみる必要がある。

問Ｆの外来語については，すでに指摘したように地域差がとくにはっきり出ているが，なかでも，14ラッシュアワー，18シャンデリアなどは，都会校と農・山・漁・炭坑地校とに対立的な差が認められ，正答率に40～50％という大きい開きがあることは，生活的環境の違いを反映しているものと考えられて興味深い。

つぎに，学年的発達の傾向をみるために，各問ごとに学年別の正答率をまとめたのが＜表４～６＞である。これらの表では各学年の生徒が，１年相当語彙・２年相当語彙・３年相当語彙に対して，それぞれどのくらいの正答率を示しているかをみるために，①②③の各グループごとに平均点を示した。なお，問Ｄと同一検査語によって行なった問Ｉ（短文作成法）の結果も，参考として掲げた。

＜表４＞にみられるとおり，問Ｄにおいては，学年的発達の傾向はあまりみられず，むしろ低学年の方ができている語（３・４・13）もある。平均点においてわずかに１年→２年→３年の発達がみられる程度である。これは，問Ｅ・Ｆに比較して目立った違いである。また，問Ｄと問Ｉとの結果が検査語10を除いては極端に開きがあることは，語の理解力と使用力との差を示すものとして注意される。検査法の違いや，問Ｄに選んだ検査語の適否など，語彙検査の方法について考えさせられる一つの材料である。

＜表５＞にみられるとおり，問Ｅにおいては，全体として各語とも１年対２・３年という対立的な開きがみとめられ，これは，問Ｆとも共通した傾向である。なかで７・10・13・14など，平均点の低いものは，学年的発達がまずみられず，さきに地域差の問題で指摘した傾向，すなわち，同じく平均点の低い語には地域差があまりみられない傾向と軌を同じくしているといえよう。

＜表６＞にみられるとおり，問Ｆにおいては，全体として問Ｅと同じく各語とも１年対２・３年の対立的な開きが認められる。そして，平均点にみる学年的発達も，問Ｄ・Ｅに比べていちばんはっきりしている。中で，検査語９においては，１・２年対３年という対立的な開きがあること，理解度の低い検査語16・19においては他に比して学年的発達が大きくないことなどが注意されよう。たとえば，検査語９「インフレ」は１・２年生が理解度35.4，37.0％であるの

<表4>【問D】学年別正答率（%）

学年＼語彙	1 狂的	2 私語	3 重々	4 着服	5 物色	① 1〜5 小計	6 意表	7 横死	8 去来	9 才色	10 段取り	② 6〜10 小計	11 引導	12 家訓	13 こうでい	14 正攻法	15 氷解	③ 11〜15 小計	平均
1	36.6	10.5	51.4	29.7	29.0	31.2	42.4	34.1	39.5	19.9	59.8	39.1	21.4	61.6	49.3	73.6	50.4	51.3	40.6
2	46.0	5.5	48.2	29.6	31.4	32.1	45.6	52.9	43.4	28.1	71.5	48.3	27.4	68.2	44.9	75.9	54.0	54.1	45.0
3	50.4	4.7	50.8	25.0	46.1	35.4	53.9	59.0	44.9	39.8	76.6	54.8	23.4	80.5	43.0	74.6	53.5	55.0	48.4
平均	44.2	6.9	50.1	28.2	35.2	32.9	47.1	48.4	42.5	29.0	69.1	47.2	24.1	70.0	45.8	74.7	52.6	53.4	44.5

<参考>【問Ｉ】学年別正答率（%）

1			7.0		0.2				0.4		34.0				4.0		2.9		8.1
2			12.1		9.3				2.8		55.5				10.3		11.7		17.0
3			14.8		15.2				0.8		43.6				2.8		5.6		14.0
平均			11.2		8.6				1.4		44.4				5.7		6.8		13.0

注）問Ｉは，問Ｄの 3・5・8・10・13・15 と同一検査語を用いて短文作成法によって行なったもの。

に，３年生は倍以上の77.6％を示しており，これは３学年に進んでから，おそらく他教科による学習によって「インフレ」を習得しているためではないかとも考えられ，語彙習得の要因を考えるためには，検査語の選定，他教科語彙との関係などいろいろ問題点があることを示していよう。

つぎに，各学年の生徒が，それぞれ，１・２・３年相当の語彙に対してどのくらいの正答率を示しているかをわかりやすくみるために，図表で示したのが＜図１＞である。これは＜表４〜６＞のそれぞれの①②③グループの平均点に

<表5>〔問E〕学年別正答率（%）

学年＼語彙	1 きわだつ	2 まのあたり	3 ときめく	4 のさばる	5 さりげない	① 1～5小計	6 あらいざらい	7 うごめかす	8 しどろもどろ	9 はがゆい	10 毒づく	② 6～10小計	11 荒立てる	12 息まく	13 うらはら	14 ごうも	15 見つくろう	③ 11～15小計	平均
1	48.2	28.8	55.1	47.8	42.0	44.4	51.1	21.1	59.5	51.1	23.0	41.2	42.2	29.9	11.7	27.0	49.3	34.5	40.1
2	65.8	42.0	71.5	57.7	41.6	55.7	56.9	22.4	71.2	63.0	30.0	48.7	54.8	38.4	18.7	29.2	54.4	39.1	47.8
3	65.2	43.0	74.8	61.2	56.0	60.2	68.0	28.0	72.0	63.6	28.8	52.2	62.8	51.6	18.8	30.0	66.4	45.9	52.8
平均	59.6	38.0	67.0	55.4	46.2	55.6	58.3	23.7	67.5	59.1	27.2	47.3	53.6	39.0	16.4	28.7	56.4	38.8	46.4

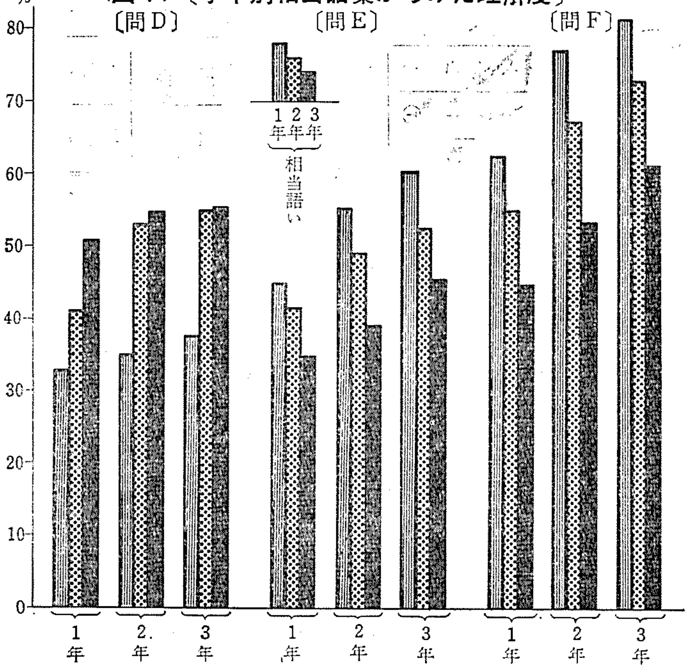
<表6>〔問E〕学年別正答率（%）

学年＼語彙	1 アクセサリー	2 クリスチャン	3 シーン	4 デッサン	5 テーマ	6 マッチする	7 モザイク	① 1～7小計	8 アマチュア	9 インフレ	10 ソナタ	11 タイピスト	12 デビューする	13 ユーモア	14 ラッシュアワー	② 8～14小計	15 アトリエ	16 コスト	17 コンサート	18 シャンデリア	19 ナンセンス	20 ブローカー	21 メッセージ	③ 15～21小計	平均
1	82.1	66.4	54.1	59.5	56.9	61.3	58.4	62.6	44.5	35.4	65.3	65.7	49.3	65.5	62.4	55.4	52.9	32.1	64.6	44.2	23.0	37.5	60.9	45.0	54.4
2	93.6	80.4	74.0	71.5	76.9	76.9	68.7	77.4	54.4	37.0	79.0	76.9	72.6	82.2	68.7	67.3	60.1	33.1	77.9	54.8	32.4	45.6	72.6	53.8	66.2
3	95.6	81.6	83.6	87.6	77.2	82.0	67.2	81.8	63.2	77.6	72.8	82.8	74.4	83.6	79.2	73.1	70.0	38.0	82.0	58.8	43.6	62.8	76.4	61.7	70.5
平均	90.3	76.0	70.5	71.8	70.0	73.2	64.7	74.0	53.4	49.1	72.4	74.9	65.4	77.0	69.8	65.0	60.7	34.3	74.7	52.4	32.7	48.2	69.8	53.3	64.1

よって各学年の理解度を示したものである。

すでに指摘したように，問E・Fが，順当な学年的発達の傾向を示しているのに対して，問Dは逆の傾向を示していることは注意されよう。これは，問Dの検査語の選び方があまり適当でなかったこと（文章語的なものにかたよって，中学生の生活経験にはあまり出てこないと思われるような語であった），問題作成の上でさらに反省すべき点があることなどを示している。

〈図１〉〔学年別相当語彙からみた理解度〕



問E・Fの結果は，上記のような方法・基準によって選んだ検査語であっても，語彙検査の一応の尺度として，そうゆがんだものではないことを示している。

以上，「語彙検査」のうち，問D・E・Fについて，ごく大ざっぱに結果の一部を報告した。これらの細部については，問A～CおよびG～Iについて述べる機会に，あわせて報告したい。　（吉沢）

国語文章の横組みのための印刷条件の研究

A　研究の目的と経過

言語効果研究室では，昭和35・36年度に，国語文章の横組み印刷にはどんな字形が最も適しているかをつきとめるために，いろいろと実験・観察を重ねてきた。これは，横組みに適した印刷条件として問題となるいくつかの事項の中の一つとして取り上げられた研究テーマであって，その研究計画と実施要領とについては，『国立国語研究所年報12』『同13』にあらましを述べた。

平体（横長），正体（真四角），長体（縦長）の三種の字形の優劣に関して，いろいろの結果を得たので，報告書にまとめて刊行することとしたのであるが，今年度，言語効果研究室は，別掲の「国民各層の言語生活の実態調査」の幹事研究室となって仕事をしたため時間的余裕が少なく，原稿の完成が12月になったので，年度内に刊行する運びには至らなかった。

B　研究担当者

報告書は，共同で研究を行なった次の3名の所員が分担して執筆した。

永野　賢　　高橋太郎　　渡辺友左

C　今後の予定

38年度中には，上記の報告書を刊行する予定である。また，字形の優劣などについてのアンケートに回答してくれた一般社会人209名に対し，調査のあらましをパンフレットに印刷してお送りする予定である。（永野）

国民各層の言語生活の実態調査

A　調査の目的・計画

この調査は，国民各層がどのような言語生活を営んでいるか，どのような問題を持ち，どのような意識をもっているかを調べることを目的とするものである。

そのために，調査を大きく二つに分けて計画した。第1は，行政区画としての都市を単位として地方に地点を選び，その住民の中からいろいろの年齢層・職業層・学歴層および男女にわたって被調査者を抽出し，その言語生活（とくに文字生活）の実態と意識とを調査するものである（これを「特定地点の調査」と称する）。第2は，若い世代である大学生（文科系・理科系各専門学科を含む）について，その読み書き上の問題点をさぐり，同時に，ことばや文字に対してかれらがどのような意識や関心をもっているかを調査するものである（これを「大学生の調査」と称する）。

B　特定地点の調査

1.　地点の選定

地点を選定する条件として，

(1)　市域・人口の点で調べやすい広さとまとまりとをもっていること

(2)　いろいろな層の被調査者が得られること

(3)　産業構成が日本の平均に近い都市であること

(4)　東京の経済圏外にあって，しかもあまり遠くないこと

(5)　言語的背景として特殊でないこと

(6)　教育施設・ＰＴＡ活動その他が文化的に一応のレベルに達していること

(7)　昼間人口と夜間人口の差が激しくない(被調査者がとらえやすい)こと

(8)　進歩的または保守的すぎない土地柄であること

(9) 協力が得やすいこと

などを考えあわせ，いくつかの中都市を候補地として検討することとした。最終的には，新潟市・長岡市・長野市・松本市・豊橋市の５都市にしぼって資料を集めた。そして，６月中～下旬に長岡・長野の２都市を実地に検分した結果，長岡市を調査地点と決定した。

2. 調査の実施概要

調査は，現地の市当局とくに教育委員会（教育長＝太刀川浩一郎氏）および公立小・中・高等学校，国立新潟大学長岡分校付属小中学校などの終始変わらぬ好意的な協力を得て，円滑に進行した。

2.1. 面接調査　市民各個人の文字言語生活の実態，国語・国字への関心・態度・意見および知識や情報を得る経路，各個人の言語感覚（方言・類義語・外来語などについて）を調べる。

2.1.1. 基礎抽出調査　長岡市役所市民課の作成による「選挙資格及び住民調査票」（これは資料としては「住民登録票」よりも信頼しうるとのことである）に基づき，旧市域および宮内・栖吉地区の15～69歳の市民を等間隔抽出によるランダム・サンプリングで2012人をぬき出した。抽出比は，旧市域および宮内地区1/29。栖吉地区1/50。

９月13～19日の間に，東・東北・南・北・宮内・栖吉の各中学の２年生に依頼して基礎調査票を配布，1663通を回収した。（回収率 82.6％）

2.1.2. 面接調査（本調査）　基礎調査票に基づき，男女，年齢（６層），学歴（３層）あわせて36の層にわたり，310人を選んだ。10月25～30日の間に，所員11名が調査員となって，戸別訪問し，質問票に記入した。所要時間平均ひとりあたり約34分。（310人の中には，転居・入院・拒否などの理由による調査不能者が19名あったので，基礎調査票によって層ごとに差し換えし，100％面接した。）

2.2. 集合調査

2.2.1. 母親調査　小・中学生をもつ母親各個人の漢字・かなづかい・送りがな等の使用の実態，自分の習った用字法と子どもの習っている用字法との食いちがいについての問題意識とその処理のしかたについて調べる。

・10月23日	長岡市立千手小学校	94名
・〃 26日	〃　東中学校	50名
・〃 30日	新潟大学長岡分校付属小中学校	99名
		計 243名

調査票は，書き取りおよびアンケートの形式で所要時間は約1時間。

2.2.2. 生徒調査　中高校生について漢字習得の地域的要因・経路・方法をさぐるために教育漢字・当用漢字・表外漢字の読み書きを調べる。

・11月19日～21日	県立長岡高等学校	2年生	1学級
	県立長岡第2高等学校	2年生	1学級
	県立長岡工業高等学校	2年生	2学級
	新潟大学長岡分校付属中学校	2年生	2学級
	長岡市立東中学校	2年生	2学級

なお，同一の問題で，後に，その便宜を得て，東京都新宿区立四谷第2中学校，跡見学園高等学校，県立山形西高等学校の3校で対照調査を行なった。

2.2.3. 会社員調査　会社・工場の従業員を対象に，漢字の使用の実態，類義語についての理解度・語感・使い分けについて調べる。

・10月31日｝
・11月1日｝津上製作所および北越製紙工場の従業員198名について，質問紙を配布して調査。

2.2.4. 言語環境調査　長岡市民に刺激として与えられる文字言語環境の実情を調べ，市民の文字言語生活の状況を推知するための資料を集めようとする。

・10月1～2日　街頭における文字の観察を行なった。市内の主要な通りの看板・ポスターの類の文字量の全体の見通しをし，特殊な用字表記を収集した。（記録および写真撮影）　あわせて，市内の看板業誠広堂主に面接し，種々の情報を得た。

・10月3日　市民の消費する筆記用具について調べる。そのため，文房具卸商長井商店主に面接して種々の情報を得た。

・10月23～29日　家庭にはいる文字の記録をとる。そのため，市立東北中学の3年生91名に依頼して，7日間，各自の家庭にはいる手がみ，新聞，ビラ，請求書その他これらに類するあらゆる文字記載物の記録をとって

もらった。

・12月４～６日　長岡市の交通量・通信・読み書き関連産業などの資料を収集する。そのため，長岡駅，西長岡駅および越後交通株式会社において，列車，電車，バスの乗車券の発売状況，長岡郵便局，電報局において，郵便物および電報の引受，配達量，市役所総務課において，産業別就業人口について資料を得た。

C　ことばに関する大学生の意見調査

ことばに関して大学生がどんな意見を持っているか。文科系と理科系と，専攻のちがいによって，ことばの見方，考え方に何か基本的な相違があるかどうか。

この問題を中心に，全国大学の専門課程在学の学生男女782名（男612名，女170名）に，調査票に書きこんでもらった。

調査票には，次の五つの質問事項をふくめた。

質問Ⅰ　ことばに関して，世間でいろいろといわれている。その意見に対する賛成，反対。（世間でいわれている意見を，必要によっては，すこし誇張して，はっきり答えが出るようにしたものもある。）

質問Ⅱ　大学の専門の教養に，国語の学力はじゅうぶんだと思うかどうか。高校，大学の国語学習にどんな反省を持っているか。

質問Ⅲ　当用漢字でないとか，音訓表にないとかで，かな書きが奨励され実施されている日常生活的な用語について，実際にそのどちらを読みやすいとし，書きやすいとするか。

質問Ⅳ　当用漢字の実施以後書きかえられている術語などについて，実際にどれだけ受け入れられているか。

質問Ⅴ　横書きがどれだけ実施されているか。横書きの今後に対して，どんな意見を持っているか。

調査票は，委員会で作り，実施にあたっては，全国の大学の先生がたのご協力を得た。集計には，国語教育研究室の室員，特に根本今朝男があたった。

大学生調査に協力いただいたかた（敬称略）

（東大・文）平井正穂　（東大・法）石井良助　（専大・教養）早坂礼吾　（横浜・学芸）原弘道　（東大・農）桧山義夫　（教大・文）馬淵和夫　（都大・工）宮川松男　（東農工・工）大沢正保　（法大・法）吉川経夫　（商船大）中山正　（岩手大・数）石川栄助（東北大・工）佐藤利三郎　（静岡大・農）伊藤悦夫　（新潟大）伊狩章　（金沢大・理）井田光雄　（岐阜大）渡辺博　（京府大）寿岳章子　・樺島忠夫　（鳥取・学芸）木村万寿夫　（愛媛大・文）和田茂樹　（広島大・理）前川力　（広島大・政経）小谷鶴次（九大・理）松本達郎　（鹿児島・学芸）蓑手重則

調査票は，昭和37年12月中旬から配布，38年２月５日までにほとんど回収された。（配布総数912，回収782）

回収されたものを一覧表にすると，次のようになる。

大学生調査回収状況

岩手大農学部	20	東京大法学部	24	鳥取大学芸学部	16
新潟大人文学部	12	〃　農学部	13	愛媛大文理学部(文)	12
〃　教育学部	2	都立大工学部	17	〃　〃　(理)	8
〃　理学部	16	東京商船大商船学部	19	九州大理学部	15
東北大工学部	26	横浜国大学芸学部	70	鹿児島大教育学部	7
金沢大理学部	47	山梨大学芸学部	32	〃　医学部	2
東京農工大工学部	3	静岡大農学部	27	〃　工学部	2
専修大商経学部	89	岐阜大農学部	30	〃　文理学部(文)	4
法政大法学部	20	京都府立大農学部	51	〃　農学部	2
教育大文学部	21	〃文家政学部(文学科)	35	〃　水産学部	2
〃　体育学部	30	広島大政経学部	23		
〃　教育学部	26	〃　文学部	3		
〃　理学部	14	〃　教育学部	4		
東京大文学部	20	〃　理学部	18	計	782

整理は，各個人についてその回答を吟味したうえ，文科系（男233名，女69名），理科系（男316名，女16名），学芸学部（男36名，女82名），体育学部（男27名，女３名）にまとめて，それぞれの傾向がみられるように集計した。

質問Ⅰの問題と結果のあらまし

（　）内は，全体（文，理，学，体，合わせて）の比率である。

次のことについて，あなたのご意見をきかせてください。あてはまるものを○でかこんでください。

(1)　「ことばは相手に意志を伝えるものだから，なるべく平易にしたほうがいい」と

いう人があります。あなたはこの意見に

賛成	反対	どちらとも言えない
(66.6)	(5.2)	(27.9)

(2) 「漢字はことばを書きあらわすだけのものだから，なるべく平易なほうがいい」という人があります。あなたはこの意見に

賛成	反対	どちらとも言えない
(52.8)	(18.0)	(29.0)

(3) 「文字をやさしくすると，文字を覚えるための努力をおこたり，人間がなまけものになる」という人があります。あなたはこの意見に

賛成	反対	どちらとも言えない
(4.2)	(78.1)	(17.4)

(4) 「『輿論』を世論と書いたり，『叡智』を英知と書いたりすることは，微妙な意味のちがいやニュアンスをこわすことになるからいけない」という人があります。あなたはこの意見に

賛成	反対	どちらとも言えない
(31.1)	(39.6)	(28.4)

(5) 「『善』とか『悪』とか『正』とか『邪』とかいう漢字には，かなやローマ字では，あらわすことのできない何かがある」という人があります。あなたはこの意見に

賛成	反対	どちらとも言えない
(75.4)	(8.3)	(13.8)

(6) 「文学作品の文字は絶対に書きかえてはいけない」という人と「小中学生や一般の人々のためには，当用漢字，現代かなづかいに書きかえてよい」という人とあります。あなたのご意見は

書きかえてはいけない	書きかえてもよい	どちらとも言えない
(21.6)	(57.9)	(19.7)

(7) 「方言まるだしでも話が通じればいい」という人があります。あなたはこの意見に

賛成	反対	どちらとも言えない
(26.3)	(39.3)	(33.9)

(8) 「共通語（標準語）で話すと話の真実味がすくない」という人があります。あなたはこの意見に

賛成	反対	どちらとも言えない
(12,5)	(55.1)	(31.7)

(9) 「やさしい話ややさしい文章は，内容が浅い感じで印象に残らない」という人があります。あなたはこの意見に

賛成	反対	どちらとも言えない
(5.2)	(77.2)	(17.0)

(10) 「ことばは自然に変わるものだから，人為を加えるべきではない」という人があります。あなたはこの意見に

賛成　　反対　　どちらとも言えない

(21.4)　(41.9)　(35.3)

(11) 「漢字を平易にすべきだ。漢字を習うための時間を，他のことを習う時間にまわしたほうがいい」という人があります。あなたはこの意見に

賛　成	反　対	どちらとも言えない
(37.6)	(33.8)	(28.1)

(12) 「もし日本の文字がローマ字だけになってしまったら，日本人の思想まで変わってしまうだろう」という人があります。あなたはこの意見に

賛　成	反　対	どちらとも言えない
(39.0)	(23.5)	(36.3)

(13) 「ことばや文字は習慣だから自由に変えることができる」という人があります。あなたはこの意見に

賛　成	反　対	どちらとも言えない
(12.9)	(56.5)	(29.3)

(14) 「われわれは，漢字の微妙な使いわけで思想をあらわしているから，それを平易にするのは思想を貧困にするものだ」という人があります。あなたはこの意見に

賛　成	反　対	どちらとも言えない
(19.9)	(49.1)	(30.6)

(15) 敬語は　(1) なるべく整理したほうがいい

(2) 廃止の方向に向かうべきだ

(3) なるべく保存すべきだ

(4) もっと洗練して保存したい

という意見についてあなたはどれに賛成ですか

(1)	(2)	(3)	(4)
(41.6)	(3.3)	(5.2)	(43.9)

(16) 外来語は，学術語，専門用語の場合は除き，一般用語としては

(1) これ以上ふやしてはいけない

(2) もっとふやしていい

(3) すこしずつふえていくのは仕方がない

という意見について，あなたはどれに賛成ですか

(1)	(2)	(3)
(13.4)	(14.0)	(65.2)

文科系，理科系，学芸，体育ともほとんど同じ反応の型を示しているが，いくらかちがいの認められるところもある。

(11) 漢字を習う時間を他にまわす (%)

	賛成	反対	どちらとも言えない
文　科　系	33.4	35.8	29.8
理　科　系	41.0	32.8	26.2

(15) 敬　　語

	なるべく整理	廃止	保存	洗練して保存
文　科　系	38.1	4.6	4.6	52.0

理科系	43.4	4.5	6.0	35.2
学芸学部	47.5	4.2	2.5	47.5
体育学部	33.3	0	13.3	43.3

この（11）と（15）に関しては，理科系のほうが，いわゆる合理化の方向に向いているといえるかも知れない。わずかなちがいであるから，そう断定することはできないが，こうした微妙な差は，あとの問題の反応にもあらわれている。

質問II　問題と結果のあらまし

次のことについてあなたのご経験を書いてください。

(1) あなたが専門の教科書や参考書を読む場合，読めない漢字が出てきてこまるということがありますか。（○でかこんでください。）

たびたびある	すこしある	ほとんどない	まったくない
(11.5)	(46.7)	(38.1)	(3.2)

(2) あなたが教科書や参考書を読む場合，漢字の力のほかに，たとえば速く要点をつかむ力が足りないとか，論理を追って読む力が足りないとかいうように感じることがありますか。

たびたびある	すこしある	ほとんどない	まったくない
(23.8)	(47.2)	(25.7)	(1.0)

あればどういう力ですか。書いてください。

書いた者　(48.6)

(3) あなたが文章を書く場合，たとえば書きだしにこまるとか，まとめ方がわからないとか，あるいは送りがなにこまるとか，いうようなことがありますか。

たびたびある	すこしある	ほとんどない	まったくない
(27.2)	(48.1)	(22.0)	(1.5)

あればどの方面ですか。書いてください。

書いた者　(57.5)

(4) 高等学校や大学の国語の勉強で，たとえば現代文学をもっと読んでおけばよかったとか，作文をもっとやってもらいたかった，もっと古典を学習しておけばよかったと思うことがありますか。

ある	ない
(76.0)	(22.6)

あればどの方面ですか。書いてください。

書いた者　(64.7)

(5) 高等学校や大学の国語の勉強で，これはいらなかったと思うものがありますか。

ある	ない
(12.7)	(79.9)

あればどの方面ですか。書いてください。

書いた者　(9.7)

(6) 講義のノートを取る時など，速く正確に書くために自分で符号を作るとか，何か

くふうをしたことがありますか。あれば書いてください。

書いた者 (47.1)

文科系，理科系で，(2)(4)については，ほとんど同傾向であるが，(1)(3)ではいくらかちがっている。

理科系や体育学部では教科書に読めない漢字が出てこまることはほとんどない。文科系や学芸学部ではすこしあるという。

(1)	たびたび	すこし	ほとんどない	ない
文科系	12.9	53.1	31.1	1.0
理科系	8.4	39.8	45.5	6.3
学芸学部	15.3	50.8	33.1	0.8
体育学部	16.7	36.7	46.7	0

また，文章を書く時こまることがすこしあるという点はみんな同一であるが，その程度が，文科系と学芸学部のほうが，理科系と体育学部よりも高い。

(2)	たびたび	すこし	ほとんどない	ない
文科系	23.8	51.0	21.5	1.7
理科系	29.5	44.0	24.7	1.5
学芸学部	33.1	52.5	11.9	0.8
体育学部	13.3	46.7	36.7	3.3

また，(5)については体育学部は「ない」とする者が92.3%ある。

「あれば書いてください」というところに，書かれたものはきわめて多種多様であったが，これを整理した結果，

1 要点をつかむ力の不足は，理科系のほうが反応が多い。

2 送りがなについては，学芸学部の反応が多い。

3 文科系は，古典をもっと勉強しておくべきだったという者が，理科系より多く，理科系では現代文学をとる者のほうが多い。

4 作文をもっと勉強しておくべきだったというのは，学芸学部，文科系に多い。

5 古典一般はいらなかったとする者は，学芸学部に多い。

6 漢文や文語文法はいらないとする者が，理科系に多い。

以上のような小さなちがいはみられるが，全体としては，どの学部も同じような傾向を示していた。もっと勉強しておくべきだったの総計においては，古典と現代文学とがほぼ同率であった。

質問Ⅲの問題と結果のあらまし

次の各組の書き方のうち，あなたはどちらの方が読みやすいと思いますか。下の五つの答のうち，あてはまるものの番号を（　　）の中に書きこんでください。

また，あなたが書くとしたら，どちらの書き方をしますか。下の五つの答のうち，あてはまると思うものの番号を［　　］の中に書きこんでください。

答	
	1.　Aが読みやすい
	2.　Bが読みやすい
	3.　どちらも読みやすい
	4.　どちらも読みにくい
	5.　どちらとも言えない

答	
	1.　Aで書く
	2.　Bで書く
	3.　どちらも書く
	4.　どちらも書かない
	5.　どちらとも言えない

			（　）		［　］	
ア	A	きょうは　よい天気だ	（　）	(19.4)		(11.0)
	B	今日は　よい天気だ		(61.3)		(81.8)
イ	A	おとうさん　おかあさん	（　）	(12.3)		(10.7)
	B	お父さん　お母さん		(70.8)		(78.8)
ウ	A	ふたりで　勉強する	（　）	(10.5)		(8.4)
	B	二人で　勉強する		(71.5)		(82.6)
エ	A	むだを　省く	（　）	(26.9)		(35.9)
	B	無駄を　省く		(52.0)		(47.4)
オ	A	たばこを　買う	（　）	(57.5)		(67.1)
	B	煙草を　買う		(20.6)		(17.6)
カ	A	市長の　あいさつ	（　）	(41.8)		(53.2)
	B	市長の　挨拶		(32.9)		(32.6)
キ	A	明るい　へや	（　）	(11.3)		(6.1)
	B	明るい　部屋		(73.9)		(83.0)
ク	A	電燈　がつく	（　）	(29.8)		(41.9)
	B	電灯　がつく		(32.1)		(39.5)
ケ	A	一分間の黙禱をする	（　）	(23.3)		(9.9)
	B	一分間の黙とうをする		(55.4)		(77.4)
コ	A	ソースと　しょう油	（　）	(38.5)		(72.8)
	B	ソースと　醤油		(37.1)		(15.1)

「今日」，「お父さん，お母さん」，「二人」，「部屋」は，かながきよりも，この形のほうが使われていることになる。

なお，「電燈がつく，電灯がつく」は，どちらが読みやすいともいえない，どちらも書くという反応が多く，「黙禱，黙とう」は，どちらも読みにくいどちらも書かないという者がかなりあった。これは，もうひとつ「もくとう」というのを出しておくべきであった。質問を一対ずつにするためにこうした形になった。

この質問Ⅲに関しては，文科系，理科系等による差違はほとんど見出されない。

質問Ⅳの問題と結果のあらまし

次にあげた一組になっていることばの中には，同じ物あるいは同じ事柄をさしている組と，そうでない組とがあります。同じ物（事柄）をさしている組だけを選んで □ の中に○をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8
□	□	□	□	□	□	□	□
颱台	熔溶	先尖	沈沈	内内	制制	最最	協共
風風	接接	端端	殿澱	攻向	御馭	期後	同同
(95.1)	(29.3)	(27.4)	(51.7)	(17.3)	(24.6)	(38.1)	(44.9)

9	10	11	12	13	14	15
□	□	□	□	□	□	□
押捺	浸浸	精清	乱濫	総創	新振	車車
印印	食蝕	算算	費費	意意	興興	両輛
(75.1)	(62.3)	(17.4)	(75.1)	(0.1)	(2.7)	(92.7)

内攻と内向，精算と清算，総意と創意，新興と振興は，さすがに，○をつけた者がすくない。しかし，最期，最後の区別がはっきりしなくなっている。

「台風」とか「車両」は，ほとんど普及しており，「乱費」「押印」「浸食」はその次であるが，「制御」「先端」「溶接」は普及していない。

文科系，理科系のちがいが感じられるのは，「沈殿」が文科系，40.4，理科系60.8である。また「先端」が文科系31.1，理科系13.2である。理科では「先端」と「尖端」はちがうと考えている者が多いわけである。

質問Ⅴの問題と結果のあらまし

あてはまると思う番号を○でかこんでください。

(1) たて書きとよこ書きと，どちらが書きやすいですか。

1. たて書き (19.7)　　2. よこ書き (49.4)　　3. どちらとも言えない (27.0)

(2) ふだん，よこ書きにしているものがありますか。（○でかこんでください）

手帳 (74.9)　　メモ (67.5)　　ノート 全部 (65.3) 一部 (32.9)　　ハガキ 表書き (4.7) 本　文 (11.9)

その他（書いてください）

書いた者 (1.4)

(3) 現在，理科方面の教科書や学術書は，よこ書きが多いのに，新聞や国語の教科書は，たて書きがおもになっています。このことについてご意見をきかせてください。（○でかこんでください）

1. 国語の教科書も，これからはよこ書きにすべきだ。
(11.4)
2. 新聞も，これからはよこ書きにすべきだ。
(15.5)
3. 理科方面の本も，たて書きがよい。
(1.5)
4. 現状のままでよい。
(75.2)

質問Ｖには，文科系・理科系の差違が，はっきりあらわれている。主なるところは，

(1)の横書き	文	43.4	理	56.9
(2)のノート全部	文	57.3	理	82.5
〃のはがき本文	文	9.3	理	14.8
(3)国語も横書き	文	9.6	理	15.4
〃現状のまま	文	77.2	理	69.6

である。

以上，この調査の調査票の組み立てと，それに対する反応の方向とを報告した。

なお，この反応をくわしく分析して，個人個人について，意見の一貫している者と，ぐらついている者を調べたり，出身地と方言に対する意見との関係を調べたり，質問Ｉの，意見に対する意見と，質問Ⅲ，Ⅳなどの実践的，知識的なものとの関連を調べたりするというようなことが，残されている。

質問Ⅲ，Ⅳ，Ｖは，同時におこなわれた地域調査（長岡市）の「面接調査」および「会社員調査」と共通させてあるから，その結果との比較ということも，残されている。

終わりに，国民各層の言語生活の実態調査の一部として大学生の生活と意見について調査することになって，どのような問題をとらえて，どんな調査をしたらよいかについて，はじめに，下記のかたがたにお集まりをいただいて，いろいろとお話をおうかがいすることができた。（敬称略）

平井正穂（東大）　石井良助（東大）　桧山義夫（東大）　佐藤信衛（法政大）

早坂礼吾（専修大） 馬淵和夫（教育大） 原弘道（横浜国大）宮川松男（都立大）

この会から，いろいろな問題や方法のヒントをいただいたが，今年度の仕事としては，ここに報告しただけで終わつた。大学生の能力の実態と問題点については，今後も資料を集め，研究を続けたい。

D 調査の担当者

この調査は，研究所全体の仕事として企画され，第２研究部言語効果研究室が幹事研究室として，主たる事務処理にあたった。調査が書きことば面を主とすることになったので，その関係の部室からも，委員が出た。委員は下記の通りである。

委員長	岩淵悦太郎			
副委員長	輿水 実			
委 員	永野 賢	高橋太郎	渡辺友左（以上，幹事研究室員）	
	林 大	山田 巌	松尾 拾	
	見坊豪紀	柴田 武	芦沢 節	斎賀秀夫
	出牛清次郎（会計）			
補助員	宮地美保子	菅原茂子	根本今朝男	川又瑠璃子

長岡市における面接調査には幹事研究室員３名のほか，各室から調査員として，飯豊毅一・林四郎・西尾寅弥・水谷静夫・吉沢典男・石綿敏雄・南不二男・松本昭が参加した。

また生徒調査の実施には，国語教育研究室の村石昭三と吉沢典男が出張した。

E 集計整理および今後の予定

大学生調査に関しては，一応の整理を終えたので，ここにその主たる部分を報告した。長岡市調査については，昭和37年度中に単純集計は１部を残してほぼ完了した。引き続き，分析を進めているが，38年度に，言語効果研究室として同種の調査を東京近辺で行なうとともに，長岡市で再度の追求を小規模に実施する予定である。これは，「国語政策が国民の文字生活に及ぼした影響とその経路に関する調査研究」の題目で行なわれるのであるが，長岡市における「国民各層の言語生活の実態調査」の内容と結果とを含めて，あらためて報告する計画である。（輿水，永野）

明治時代語の調査研究

A.　今年度調査の位置づけ

近代語研究室は，昭和30年以降，郵便報知新聞以下の文献の語彙調査によって，延べ17万の語を採集し，この中から異なる語約4万5千を得た。

昭和36年度以後，文献別に作られている語彙表から，全体を総覧する語彙表にまとめる作業を始め，36年度に総合語彙カードを作って，全体語彙表作成の準備を整えるとともに，各種の集計ができるように準備した。

本年度は，まず，全体語彙表を作成した。これによって，各語がどの文献にどのように現われているかが一覧できるようになった。

つぎに，総合語彙カードによって，品詞別・語種別の分布や，文体と用語の語種との関係などを量的に考察した。

このほか，語および文章の表記法の研究の一部として，漢字語のルビの調査を行なった。

B.　全体語彙表の作成

B４版で「明治初期全体語彙表」を作り，所定の事項を記入した。この表の第１ページを縮刷して，次に示す。

度数を調査したものについては，度数を記入したが，われわれが主観法と呼んだ方法で度数にかかわりなく拾った語については，Ｖじるしを記入した。郵便報知総度数，小新聞総度数，学術文献総度数の各欄に記入した度数には，Ｖの数はかぞえられていないが，総出典数の欄では，かぞえられている。

C.　文体と用語についての考察

1.　文体と文献の種類による語彙の区画

学術論説関係の文献は，純粋な漢文直訳体の文章で書かれたものが多く，一読して最もかたい印象を受けるのに対して，小新聞の雑報記事や安愚楽鍋など

は，くだけた俗文体の文章で書かれており，読んで，やわらかい印象を受ける。郵便報知新聞は，われわれがｃ層と呼んだ雑報欄にはくだけた文章が多く，それ以外の層には，かたい文章が多い。

そこで，文献別による区分と文体別による区分とをあわせて区分の基準とし，第１表のように語彙の区画を設けた。この際，郵便報知新聞の物価広告欄は，欄としても特殊であり，調査法も他と違うので，区画の対象からはぶいた。郵便報知新聞の各欄を各１文献とかぞえるのは，書物としてまとまったものを文献と呼ぶ習慣からは奇妙にも思えるが，「文献」を「資料とする書きものの母体」という意味で考えれば，さしつかえのないことである。

第１表　明治初期語彙調査文献区画表

<table>
<tr><td>学術論説関係の文献</td><td colspan="6">郵便報知新聞</td><td colspan="2">小新聞</td><td colspan="2">通俗読み物</td></tr>
<tr><td>「近世事情」以下23種</td><td>a 公布公聞</td><td>b 社説</td><td>d 外電外国</td><td>e 投書雑文</td><td>物価広告</td><td>c 雑報</td><td>読売新聞</td><td>東京絵入新聞</td><td>安愚楽鍋</td><td>交易問答</td></tr>
<tr><td>一</td><td colspan="4">二</td><td></td><td>三</td><td colspan="2">四</td><td colspan="2">五</td></tr>
<tr><td colspan="5">硬文体文献　27</td><td></td><td colspan="5">軟文体文献　5</td></tr>
</table>

2. 語の使われた度合と品詞・語種との関係

語の使われた度合をはかるのに，ふつうは，使用度数や，度数から算出する使用率を第一の尺度とするが，この調査では，いろいろな種類の調査法がまじっており，調査の規模も，郵便報知新聞とそれ以外とではいちじるしく違うので，使用度数で比べることが不可能である。それで，使用度数に代る尺度として出典数を用いることにした。ひとつの語がいくつの出典に出ているか，その数を「出典幅」と称し，つぎにのべる「区画幅」とともに，語の使われた度合をはかる尺度とする。出典幅の最大はこの場合32である。

区画幅とは，第１表の一から五までの区画のうち，ある語がいくつの区画にまたがって現われたかをかぞえたものである。区画幅は最小が１，最大が５である。以下，区画幅の数値をローマ数字Ⅰ～Ⅴで表わす。

明治初期

全体語彙表

近研(62)

番号	語	表記	品詞	語種	学術(日本) キ 近世事情 6~7	コ 国体新論 8	メ 明治文抄 10	ゾ 続明治文抄 10	フ 福沢文集 11	カ 開化小史 11~15	ア 暗射地図 11	メ 明治開化史 13	ミ 民間経済録 10~13	ジ 時事小言 14	ガ 学士会院① 16	ブ 文明東漸史 17	ザ 雑居之準備 19	チ 実地演説 20	学術(翻訳) サ 外国交際 2	エ 英氏経済 4	ヒ 百科商業 7~10	シ 消毒新論 7	ミ 弥児経済 8~15	ロ 娼婦論 10	フ 夫婦衛生論 15	ガ 学士会院② 16	セ 英議院政治 15
ア1	アシ	悪	形	和																	シ 1						
2	アの	彼	連	和																							
3	アア		副	和																							
4	アア	嗚呼	感	和				ソ 1								ブ 1									フ 3		
5	アイ	愛	名	漢																							
6	アイシ.ス	愛	動	混																							
7	アイシイル	愛	動	混																							
8	アイ	藍	名	和																			ミ ✓				
9	アイ	哀	名	漢				ソ ✓																			
10	アイ(オ)	合 会	名	和																							
11	アイ.ウ	合	動	和																							
12	アイ.ウ	逢	動	和												ブ 1		チ 1									
13	アイ.ウ(アイ)	逢(相)	動	和						カ ✓																	
14	アイガタシ	逢難	形	和						カ ✓																	
15	アイタマイ.ウ	逢	動	和																							
16	アイアイ		感	和																							
17	アイイクシ.ス	愛育	動	混						カ ✓																	
18	アイエン	愛淵	名	漢			メ ✓																				
19	アイカタ	合方	名	和																							
20	アイカタ	相方	名	和																							

番号	語	表記	郵便報知 (10~11) a 公布公聞	b 社説	d 外電外国	e 投書雑文	c 雑報	物価広告	小新聞 (11~12) 読売新聞	東京絵入	俗読物 安愚楽鍋 (4~5)	交易問答 (2)	小新聞総度数	郵便報知総度数	学術文献総度数	総出典数	備考
ア1	アシ	悪		1	2	1	8							12	1	5	
2	アの	彼					6		2	4	17		6	6		4	
3	アア						✓				2					2	
4	アア	嗚呼		11	2	14	3		1	2	16		3	30	5	10	
5	アイ	愛		1										1		1	
6	アイシ.ス	愛		4	1	1	2							8		4	
7	アイシイル	愛					✓									1	
8	アイ	藍					1				1			1	1	3	
9	アイ	哀		1										1	1	2	
10	アイ(オ)	合 会								1	3					2	
11	アイ.ウ	合		1		1	7				7			9		4	
12	アイ.ウ	逢		7	3	7	12		3	2			5	29	2	8	
13	アイ.ウ(アイ)	逢(相)														1	
14	アイガタシ	逢難														1	
15	アイタマイ.ウ	逢					1							1		1	
16	アイアイ										1					1	
17	アイイクシ.ス	愛育					✓									2	
18	アイエン	愛淵														1	
19	アイカタ	合方					2							2		1	
20	アイカタ	相方					1		1	1			2	1		3	

会

第 2 表　区画幅と出典幅との関係

出典幅＼区画幅	V	IV	III	II	I	計
32	1					1
31	3					3
30	5					5
29	3					3
28	2					2
27						
26	1	1				2
25	7					7
24	1					1
23	1	1	1			3
22	1					1
21	11	1				12
20	3	1	1			5
19	9	1	1			11
18	7	5	1			13
17	7	5				12
16	12	5	2			19
15	13	5	1			19
14	10	4	3			17
13	22	7	7			36
12	18	16	4			38
11	29	8	13	1		51
10	42	28	18			88
9	45	41	17			103
8	64	67	32	3		166
7	50	94	52	3		199
6	49	162	128	15		354
5	25	238	320	53	1	637
4		208	675	200	3	1,086
3			1,121	1,094	53	2,268
2				5,078	815	5,893
1 { 1					31,804	31,804
1 { 郵物					900	900
計	441	898	2,397	6,447	33,576	43,759
累　計	441	1,339	3,736	10,183	43,759	
出典幅平均	9.00	6.35	4.10	2.48	1.03	

区画幅と出典幅とがどういう関係になっているかを第2表に示す。

第一区画（学術論説関係文献）の文献数が23もあるために，区画幅Iでも出典幅が23にわたることはありうるわけだが，実際には，区画幅Iの中の出典幅の最大は5にとどまっている。区画幅ごとの出典幅平均（最下端の数）は，Vが9.00，Ⅳが4.10，Ⅱが2.48，Iが1.03となっている。区画幅Iは，ほとんどそのまま出典幅1のことと考えていいわけだが，区画幅がⅡ，Ⅲ，Ⅳ，Vとひろがるにつれて，出典幅は2，3，4，5から離れて増大する。

個々の語について見た場合，区画幅Vで出典幅5という語と，区画幅はⅣだが出典幅が26もある語とを比べて，どちらが「よく使われた」と見るべきか，判定に迷うことはあるが，全体として見たときは，区画幅をもって出典幅を代表する尺度として大体間違いがないといえる。それで，全体を通じて，語の使われた度合を分けるのには区画幅による区分を第一の尺度とすることにする。

区画幅VからIまでの各群の中で，品詞・語種の分布がどうなっているかを見たのが第3表であ。

第3表　区画幅別に見た品詞別，語種別の分布

		名	代	動	形	副	感	連	接	計
V	和	109 (24.7)	12 (2.7)	110 (25.0)	10 (2.3)	39 (8.8)	1 (0.2)	8 (1.8)	8 (1.8)	297 (67.4)
	漢	124 (28,1)				7 (1.6)		1 (0.2)		132 (30.0)
	外	1 (0.2)								1 (0.2)
	混	4 (0.7)		4 (0.9)		3 (0.7)				11 (2.5)
	計	238 (54.0)	12 (2,7)	114 (25.8)	10 (2.3)	49 (11.1)	1 (0.2)	9 (2.0)	8 (1.8)	441 (100)
Ⅳ	和	157 (17.5)	6 (0.7)	195 (21.7)	16 (1.8)	50 (5.6)	1 (0.1)	2 (0.2)	8 (0.9)	435 (48.4)
	漢	399 (44.4)				14 (1.6)		1 (0.1)	1 (0.1)	415 (46.2)
	外	4 (0.5)								4 (0.5)
	混	11 (1.2)	1 (0.1)	26 (2.4)		6 (0.7)				44 (4.9)
	計	571 (63.6)	7 (0.8)	221 (24.6)	16 (1.8)	70 (7.8)	1 (0.1)	3 (0.3)	9 (1.0)	898 (100)
	和	332 (13.8)	9 (0.4)	346 (14.4)	46 (1.9)	104 (4.3)	9 (0.4)	2 (0.1)	16 (0.7)	864 (36.0)
	漢	1,204 (50.2)	2 (0.1)			23 (1.0)		3 (0.1)		1,232 (51.4)

Ⅲ	外	9 (0.4)								9 (0.4)
	混	59 (2.5)	3 (0.1)	220 (9.2)	1 (0.0)	9 (0.4)				292 (12.2)
	計	1,604 (66.9)	14 (0.6)	566 (23.6)	47 (2.0)	136 (5.7)	9 (0.4)	5 (0.2)	16 (0.7)	2,397 (100)
Ⅱ	和	815 (12.6)	17 (0.3)	765 (11.9)	118 (1.8)	160 (2.5)	18 (0.3)	3 (0.1)	16 (0.3)	1,912 (29.7)
	漢	3,457 (53.6)	2 (0.0)			22 (0.3)		3 (0.1)		3,484 (54.0)
	外	22 (0.3)								22 (0.3)
	混	292 (4.5)		711 (11.0)	6 (0.1)	20 (0.3)				1,029 (16.0)
	計	4,536 (71.1)	19 (0.3)	1.476 (22.9)	124 (1.9)	202 (3.1)	18 (0.3)	6 (0.1)	16 (0.3)	6.447 (100)
Ⅰ(含物広)	和	3,940 (11.7)	39 (0.1)	3,178 (9.5)	327 (1.0)	407 (1.2)	56 (0.2)	13 (0.0)	48 (0.1)	7,998 (23.8)
	漢	17,976 (53.8)	10 (0.0)			46 (0.1)	1 (0.0)	4 (0.0)		18,037 (53.7)
	外	232 (0.7)							1 (0.0)	233 (0.7)
	混	3,190 (9.5)	9 (0.0)	3,978 (11.9)	78 (0.2)	40 (0.1)		2 (0.0)	1 (0.0)	7,298 (21.9)
	計	25,338 (75.4)	58 (0.2)	7,156 (21.4)	405 (1.2)	493 (1.5)	57 (0.2)	19 (0.1)	50 (0.2)	33,576 (100)
全体	和	5,353 (12.2)	83 (0.2)	4,594 (10.5)	517 (1.2)	760 (1.7)	85 (0.2)	28 (0.1)	96 (0.2)	11,516 (26.3)
	漢	23,160 (53.1)	14 (0.0)			112 (0.3)	1 (0.0)	12 (0.0)	1 (0.0)	23.300 (53.3)
	外	268 (0.6)							1 (0.0)	269 (0.6)
	混	3,556 (8.2)	13 (0.0)	4,939 (11.3)	85 (0.2)	78 (0.2)		2 (0.0)	1 (0.0)	8.674 (19.8)
	計	32,337 (73.9)	110 (0.3)	9,533 (21.8)	602 (1.4)	950 (2.2)	86 (0.2)	42 (0.1)	99 (0.2)	43,759 (100)

まず品詞別にみると，全体として名詞が圧倒的に多い。これは，どういう国語のどうい時代の語彙にも共通した現象であろう。ことにこの調査では，形容動詞の項を立てなかったので，形容動詞の語幹はみな名詞となるので，特に名詞が多くなっているだろう。つぎが動詞で，あとは数のうえではほとんど問題にならないくらい少数であるが，その中でわずかに副詞が目立ち，形容詞よりも多い。

第3表では，着眼をきめて部分的に見るのに見にくいので，この表の中から比べたい部分だけをとり出して第4表以下の考察をしよう。

第4表は，各区画幅ごとの品詞別の比率を比べたものである。

第4表　第3表からのとりたて（1）品詞別

区画幅	名　詞	動　詞	副　詞	語　数	累積語数
V	54.0	25.8	11.1	441	441
IV	63.6	24.6	7.8	898	1,339
III	66.9	23.6	5.7	2,397	3,736
II	71.3	22.9	3.0	6,437	10,183
I	75.4	21.4	1.5	33,576	43,759
全　体	73.9	21.8	2.2	43,749	

名詞だけがひとりで大部分を占める傾向は区画幅のせまい語群においてほどいちじるしく，I群では名詞が全体の75%以上を占める。区画幅が広くなるにつれて名詞の占める率は減少し，V群では54%になる。動詞は名詞と反対の増減傾向をもつが，最大がV群の25.8%，最小がI群の21.4%で，開きは大きくない。開きが大きいのは副詞で，最大がV群の11.1%，最小はI群で1.5%しかない。

語種別の比率を比べると，第5表のとおりである。

第5表　第3表からのとりたて（2）語種別

区画幅	和　語	漢　語	外来語	混種語
V	67.4	30.0	0.23	2.5
VI	48.4	46.2	0.45	4.9
III	36.0	51.4	0.42	12.2
II	29.5	54.2	0.34	16.0
I	23.8	53.7	0.70	21.9
全　体	26.3	53.3	0.62	19.8

和語と漢語の勢力分野がV群とI群とで正反対になっている。I群は語数が多いからI群の傾向がそのまま全体の傾向となり，全体としては，漢語が和語の倍以上を占めているが，区画幅の広いV群とIV群，すなわちよく使われた語の群れの中では，和語のほうが数が多いのである。V群からI群へ移るにつれて和語の占める率が減少の一途をたどる傾向は全く規則的だが，漢語が和語の逆に増減する傾向はII群とI群との間でややくずれている。そのかわり，混種語で漢語と同じ傾向が規則的にたどられるので，結局，漢語の進出は，使われた度合の少ない語の群れの中でほどいちじるしいということがいえる。外来語は

きわめてわずかで，群間に格別の傾向は見られない。

第6表では，名詞の中で語種別の分布状況をたどってみた。

第6表　第3表からのとりたて（3）名詞の中の語種別

区画幅	和　語	漢　語	外来語	混種語
V	24.7	28.1	0.23	0.9
IV	17.5	44.4	0.45	1.2
III	13.8	50.2	0.42	2.5
II	12.7	53.7	0.34	4.5
I	11.3	53.8	0.70	9.5
全　体	11.9	53.1	0.62	8.2

名詞の中では，どの群でも漢語のほうが優勢だが，使われた度合の小さい語群ほど，その中で漢語の占める比率が大きいという傾向は，きわめて規則的である。

第7表では，動詞の中での傾向を見た。

第7表　第3表からのとりたて（4）動詞の中の語種別

区　画　幅	和　　語	混 種 語
V	25.0	0.9
IV	21.7	2.9
III	14.4	9.2
II	11.9	11.1
I	9.4	11.9
全　体	11.0	11.3

漢語に「す」のついた形はみな混種語として扱ったので，漢語の動詞はありえなかった。したがって，混種語の動詞はほとんどそのまま漢語性のものと見ていいので，和語動詞と混種語動詞とを比べると，よく使われた動詞は，ほとんどすべて和語だといえるくらい，V群IV群では和語が優勢である。第5表で，V群IV群で和語のほうが大きい比率を占めたのは，名詞のためではなくて，動詞のためであることがわかる。「あり」「なす」などの動詞がその代表選手である。

以上の状況を現代語と比較してみよう。書きことは研究室の報告書『現代語の語彙調査，総合雑誌の用語　後編』（昭33）の81ページに，語の品詞分布の

表が出ており，名詞の中を語種別に分けた実数と比率とが示してある。これは昭和28年7月以後1年間の『世界』『改造』等13種の総合雑誌本文からのサンプリング調査で得た異なる22,926個の語のうち15,712語について調べたものである。そこでは，使用度数で「30以上」「29から10まで」「9以下」の3階級に分けてある。名詞の中が語種別に分けてあるので，その部分の比率を抜き書きしてみる。第8表である。

第8表　総合雑誌語彙調査，名詞の中の語種別 <参考>　報告 13　81ページより

度　数	和　語	漢　語	外来語	混清語	語　数
30以上	18.0	42.6	0.5	——	572
29～10	11.9	59.0	1.3	0.4	1,199
9以下	14.7	47.0	4.1	2.2	13,941
全　体	14.6	47.8	3.8	2.0	15,712

書きことば研究室の語彙調査は厳密な数量調査であるのに対して，近代語研究室のは，一部は数量調査だが，一部は数量に関係なく語をひろった調査であるし，選んだ文献も，明治初期の文献総体を代表するように企画して選んだわけではない。

このように性格の違う両調査の結果を比較するのは当を得ていないけれども，とにかくひき比べてみたい。

総合雑誌調査では度数による3階級，近代語研究室の調査では区画幅による5階級と，区分法も違っていて，万事ちぐはぐになるのだが，よく使われた度合の階級別としての共通点はあるものと考える。総合雑誌の場合，和語名詞と漢語名詞の比率が階級の移り変りとともに一定の方向に増減するという現象は見られない。上位群の中でも下位群の中でも，大体同じような比率で，漢語の名詞が多く使われている。これだけから断定を下すことはできないが，臆測の範囲でいえば，つぎのようなことになるだろうか。

『明治初期においては，書かれたものの中で，漢語の種類は非常に多かったが，国民がよく使う基礎的語彙の中では，漢語はそう広い範囲を占めてはいなかった。それが現代語では，漢語の数が多少しぼられてきたかわりに，一部の漢語は国語の中に十分消化されて，基礎的語彙の中でも，漢語がかなり

広い範囲を占めるようになった。』と。

3. 硬軟各文体と用語の語種との関係

「よく使われる」ということを，硬文体の中での使われかたと軟文体の中での使われかたとに分けて観察してみると，どうなるだろう。4万5千の全語彙による調べが間に合わなかったので，ごく一部であるが，ア行に属する約5千語について調べた結果をしるしておこう。

硬文体で書かれている文献の数は，第1表に示したとおり，27であり，軟文体の文献数は5である。だから，各文体の中での出典幅は，硬文体では最大が27，軟文体では最大が5になる。1から27までと，1から5までのおのおのを4階級に分け，つぎのように区分した。0の階級が加わるので5階級となる。

	(硬文体出典幅による区分)	(軟文体出典幅による区分)	
A	27～8	5～4	a
B	7～4	3	b
C	3，2	2	c
D	1	1	d
E	0	0	e

ア行所属の語は郵便報知物価広告欄出次の語を除いて4928語ある。これを，硬軟各文体内での出典幅区分の5階級ずつによって相関表を作り，各欄内を和・漢・外・混の順で語種別に仕分けしたのが第9表である。この表は欄が多すぎてごちゃごちゃし，大きな傾向がつかみにくいので，この表の仕切り線を太い線の仕切りのようにくくりなおして，6種の群を作った。6群の名称を第10表に示したが，なぜこのように名づけたか，説明しよう。

①	Aa＋Ab＋Ac＋Ba＋Bb＋Bc＋Ca＋Cb	両性群
②	Ad＋Ae＋Bd＋Be＋Cd＋Ce	硬性群
③	Da＋Db＋Dc＋Ea＋Eb＋Ec	軟性群
④	Cc＋Dd	中性群
⑤	De	硬１群
⑥	Ed	軟１群

①は両文体の文献に各2以上の出典幅をもつもの。両方の文体で比較的よく使われたものだから，両性群と名づけた。②は硬文体での出典幅が2以上で，軟文体での出典幅が1または0のもの。硬文体に片寄った使われかたなので，硬性群と名づけた。③はその逆で，軟性群と名づけた。④は両文体の文献に，あ

第9表　硬軟各文体内での出典幅階級別による相関，兼語種別分布（ア行の語4928について）

硬幅＼軟幅	a 5～4				b 3				c 2				d 1				e 0				計			
A 27～8	22				14				10				10				0				56			
	20	2	—	—	11	3	—	—	8	2	—	—	10	—	—	—	—	—	—	—	49	7	—	—
B 7～4	18				26				24				55				12				135			
	17	1	—	—	20	6	—	—	18	6	—	—	28	21	—	6	5	6	—	1	88	40	—	7
C 3～2	14				36				47				108				177				382			
	13	1	—	—	30	5	—	1	27	20	—	—	39	53	1	15	31	111	1	34	140	190	2	50
D 1	20				46				136				251				1475				1928			
	19	1	—	—	39	7	—	—	105	24	1	6	123	97	2	29	338	809	33	295	624	938	36	330
E 0	27				99				256				2045								2427			
	24	1	—	2	81	16	—	2	193	39	—	24	1214	435	8	388					1512	491	8	416
計	101				221				473				2469				1664				4928			
	93	6	—	2	181	37	—	3	351	91	1	30	1414	606	11	438	374	926	34	330	2413	1666	46	803

第10表　第9表の群別区分

軟＼硬	a	b	c	d	e
A	両性群			硬性群	
B					
C			中性群		
D	軟性群				硬1群
E				軟1群	

まり広くない幅で同じように現われたもので，中性群と名づけた。⑤は硬文体の出典幅1で，軟文体には無いもの。硬1群と名づけた。⑥はその逆で，軟1群と名づけた。

以上6群に分けてみると，群ごとの語数は，硬1群と軟1群とに大きく集中し，中でも軟1群が多い。これは，文献に含まれていた語数が郵便報知のc層が圧倒的に大きかったためである。

第11表で，各群内での語種別の分布を比べてみる。

第11表　6群別に見た語種別分布（和語率の順）

順位	群名	語数	和語	漢語	外来語	混種語
1	両性群	164	137 83.5	26 15.8	— —	1 0.6
2	軟性群	584	461 78.9	88 15.1	1 0.2	34 5.8
3	軟1群	2045	1214 59.4	435 21.3	8 0.4	388 19.9
4	中性群	298	150 50.3	117 39.3	2 0.7	29 9.7
5	硬性群	362	113 31.2	191 52.8	2 0.6	56 15.5
6	硬1群	1475	338 22.9	809 54.8	33 2.2	295 20.0
	全体	4928	2413 48.9	1666 33.8	46 9.3	803 16.3

この表は，和語の比率（以下これを和語率と呼ぶ）の大きさの順に並べたものである。両性群では和語率が非常に高く，83.5%に達している。つづいて軟性群では78.9%，軟1群では59.4%になっている。硬性群，硬1群では和語率は

ぐんと下り，31.2%，22.9%である。中性群での分布は全体での分布に近く，和語率がほぼ50%である。

この数値は，あくまでもア行の語についてのもので，カ行，サ行などでみれば全体に漢語の率がずっと高くなるわけだ。ここで見たいのはこれらの数値ではなく，群の順位である。

両性群とは硬軟どちらの文体でも欠くことのできない語で，区画幅ⅤとⅣの群が大体これに当たると見られる。硬性群で漢語が多く，軟性群で和語が多いのは，硬文体の用語では漢語が基調をなし，軟文体の用語では和語が基調をなすことを意味しており，当然のことながら，おもしろい。硬1群，軟1群は，ともに出典幅が1しかないので，確実性のあることはいえないが，これらは結局，語彙の総量を表わしているわけだろうから，つまり，硬文体に属する語彙には漢語が多く，軟文体に属する語には和語が多いということである。

ア行だけの結果だから，これで全体のことはいえないが，ア行の中で，ア，イ，ウ、エ，オの各項ごとに同じ方法でくくってみると，どこでも同じ傾向が見られる。各項ごとの和語率だけを，第12表にまとめてみた。エとオの軟1群と中性群との間で順位の逆転が見られるが，あとはすべて同じ傾向をたどっている。多いは多いなり，少ないは少ないなりに，傾向が一定していることからみて，ア行以外でも全般に，このような傾向があると見てよさそうである。

第12表　ア行各項，6群別の和語率

群　名	ア	イ	ウ	エ	オ
両性	97.0	64.2	95.6	40.0	93.9
軟性	83.5	60.5	91.6	38.9	89.0
軟1	68.6	44.6	76.5	17.4	70.8
中性	63.8	29.1	75.5	18.8	75.0
硬性	50.9	16.8	56.2	9.8	52.3
硬1	37.3	11.5	45.9	4.4	41.1
全体	61.7	31.6	72.5	11.3	67.2
	(931)	(1,702)	(703)	(496)	(1,096)

4.　五十音各項所属語の語種別分布

前項までに，明治初期語彙調査の結果につい，今年度の作業で考察しえた範

囲内で，語彙の構造の一端を記述した。この考察のつづきは，さらに昭和38年度に行なうが，ここでいまひとつ，五十音の各項ごとに語種別の分布がどうなっているかをしるしておこう。語を第１音節の音韻によって五十音順に分けることが，辞書その他における検索の便以外にどれだけの意味があるか知らないが，現代の国語辞書のすべてが五十音順の排列をとっている以上，その項目別に語種の分布がどうなっているか見ておくことも，意味のないことではなかろう。

第13表　五十音各項所属語の語種別分布

	語　数	和	漢	外	混	和%	漢%	外%	混%
ア	924	583	136	24	181	63.3	14.7	2.5	19.5
イ	1,723	537	904	8	274	31.1	52.5	0.5	15.9
ウ	736	525	92	1	118	71.3	12.5	0.1	16.1
エ	504	56	312	11	125	11.2	61.9	2.1	24.8
オ	1,131	761	227	1	142	67.1	20.3	0.9	12.5
カ	3,240	847	1,709	20	664	26.1	52.8	0.6	20.5
キ	2,337	263	1,544	4	526	11.3	66.2	0.1	22.1
ク	783	341	313	4	125	43.6	40.0	0.5	15.9
ケ	1,144	38	838	2	266	3.3	73.3	0.1	23.7
コ	2,491	442	1,535	21	493	15.3	60.4	0.8	15.9
サ	1,481	378	813	5	285	25.5	54.9	0.4	19.5
シ	5,535	454	3,784	13	1,284	8.2	68.3	0.2	23.2
ス	575	221	245	14	95	38.4	42.6	2.4	16.5
セ	1,656	59	1,247	6	344	3.6	75.3	0.3	20.8
ソ	958	162	555	3	238	16.8	57.9	0.3	24.8
タ	1,608	483	818	5	302	30.1	50.8	0.3	18.7
チ	1,064	97	683	7	277	9.2	64.1	0.7	26.0
ツ	635	417	109	—	109	65.6	17.2	—	17.2
テ	731	204	327	11	189	27.9	44.7	1.6	25.8
ト	1,659	500	845	10	304	30.1	50.9	0.6	18.6
ナ	676	417	163	1	95	61.6	25.9	0.1	14.0
ニ	540	121	306	3	110	22.5	66.6	0.5	20.4
ヌ	70	64	1	1	4	91.4	1.4	1.4	5.7
ネ	202	99	73	2	28	49.1	36.1	0.9	13.9
ノ	227	138	68	—	21	60.8	29.9	—	9.3
ハ	1,579	469	711	20	379	29.7	45.0	1.3	24.0
ヒ	1,206	482	519	13	192	40.0	43.1	1.1	15.9
フ	1,293	246	783	13	251	19.1	56.1	0.9	19.4
ヘ	551	43	353	5	150	7.8	64.1	1.0	26.2
ホ	1,133	130	737	2	264	11.5	65.1	1.7	23.3
マ	503	325	101	10	67	64.7	20.1	1.9	13.3
ミ	541	319	149	3	70	58.9	27.6	0.5	12.9
ム	247	110	109	—	28	44.6	44.2	—	11.3
メ	365	111	181	3	70	30.4	49.6	0.8	19.2
モ	519	307	130	5	77	59.3	25.0	0.9	14.8

ヤ	428	224	104	1	99	54.4	24.2	0.2	23.1
ユ	423	112	229	1	81	26.2	54.2	0.2	19.1
ヨ	677	220	332	—	125	32.5	49.1	—	18.4
ラ	163	2	109	6	46	1.2	66.8	3.6	28.1
リ	709	—	671	1	37	—	94.6	0.1	5.2
ル	41	—	27	1	13	—	65.9	2.4	31.7
レ	199	—	156	1	42	—	78.3	0.5	21.1
ロ	283	1	210	6	66	0.4	74.3	2.1	21.2
ワ	269	208	41	1	19	77.4	15.2	0.3	7.1
計	43,759	11,516	23,300	269	8,674	26.3	53.3	0.6	19.8

（注） パーセントは，各項所属語の語数を100とするもの。

D. その他の調査

漢字語のルビの調査については，その一端を，昭和36年度の年報に報告しておいた。その後の調査結果は，つぎの機会にまとめて報告する。

E. 担　当　者

全体語彙表の作成および，語彙の構造の量的調査は林四郎が担当し，漢字語のルビの調査は進藤咲子が担当した。研究補助員，宮島秋子（昭和37年6月をもって退職）と同じく中曾根仁が以上の調査の作業に参加したほか，数名の臨時補助者が作業をたすけた。（林四）

『色葉字類抄』の索引作成

A　仕事のあらまし

1.　『色葉字類抄』の索引作成　前年度に，補充採集をし，検査も終えた語彙カードを，五十音順に配列し，一覧表に記入した。

2.　古辞書の複製　複製した資料は，内閣文庫蔵の『色葉字類抄巻上』（花山院本）で，イからネまでの零本である。

B　注文のアクセント

『色葉字類抄』には，親字や注文に声点をさして，アクセントを示してあるものがある。12世紀の日本語のアクセントを記録したものとして，『類聚名義抄』が，量，質ともにすぐれているものとされている。この字類抄は，それより少し遅れて編まれたものである。こころみに，<ア>部だけを比較してみると，これにあるもの53語で，その中共通しているのは30語あった。清濁については大分異なっているが，声点はただ１つの例外を除いて総て一致している。その例外は，トキ〔[illegible]〕トキ〔[illegible]〕である。

この朱点について，編者橘忠兼は，跋に「更加星点紕繆雖多愚昧難直学者毎見可摺改之　抑誂貢士有成入道詞字少ゝ加朱点爲要文不迷也」と述べている。

つぎに，声点をさしてある注文の全てを掲げる。ただ，複製されたものによって採集したので，見落しなどがあるかもしれない。

なお，印刷の為の便宜を考えて，体装を改めてある。

[illegible]は，「上上」に，[illegible]は，「ギ」，「去」に，[illegible]は，「ガク」，「上上」として処理してある。

1音節語

上	カ（香）	カ（敢）	チ（血）	テ（貂）	ヘ（舳）	ホ（帆）
	ロ（艫）					
平	イ（移）	ガ（衙）	ガ（賀）	キ（碕）	キ（牙）	ゴ（許）

ゴ（期）　シ（詩）　ド（度）　バ（庭）　バ（場）　ヘ（綜）
ヘ（繳）　ヘ（鎐）　モ（藻）　ロ（爐）

去　ギ（儀）　ゴ（糊）　セ（尤蹄子）　ル（漏）

2 音節語

上上　アテ（磧）　エビ（鰕）　エン（縁）　カク（閣）
ガク（額）　カビ（穎）　カフ（閤）　カモ（毯）
ココ（戸ゝ）　コテ（射韝）　コモ（菰）　サデ（灑）
シチ（瑟）　シバ（莱草）　スケ（椿柱）　セツ（節）
セム（為）　テイ（軆）　ヌカ（額）　ハク（吐）
ハシ（測）　ハタ（耳）　ハタ（泮）　ハタ（将）
ハニ（埴）　ハル（晴）　ヒレ（領布）　ヘウ（表）
モチ（犄）　モハ（藻）　ヨシ（由）　ヨメ（嫂）
ルイ（誄）　ロク（簶）　エヌ（狗）

上平　アグ（揚）　アザ（疵）　アベ（阿拝）　アラ（骨）
イカ（衣架）　イル（入）　イル（湲）　イル（射）
イル（鑄）　エイ（纓）　ヲシ（遠志）　カウ（郊）
カク（闕）　カグ（臭）　カス（滓）　カフ（殕）
カム（醸）　カラ（幹）　カル（斬）　カル（借）
カル（枯）　キサ（象）　キル（着）　コウ（功）
ココ（五鈷）　コソ（祐）　コブ（媚）　サク（去）
サシ（狭）　サタ（貞）　サヰ（佐為）　シム（令）
シム（染）　セヒ（觬）　セン（餞）　テン（篆）
ドウ（筒）　ヌク（抜）　ハク（吐）　ハク（帯）
ハク（篝）　ハグ（殼）　ハグ（羽）　ハグ（剥）
バク（媚）　ハム（入）　ハル（張）　ヘイ（聘）
ヘス（謙）　ヘス（壓）　ヘル（謙）　ミヘ（三重）
ヨヅ（攀）

平上　アイ（愛）　アク（飽）　イン（印）　エイ（叡）
カウ（号）　カガ（利）　カク（繋）　カコ（鮫貝）

	カチ（陸）	カツ（和）	カド（廉）	カマ（鎌）
	カム（咋）	カヤ（萱）	コク（极）	コジ（巾子）
	コツ（剥）	コト（琴）	コヒ（臚）	コム（仄）
	コユ（肥）	コユ（汲）	コル（枅）	サイ（犀）
	サク（僻）	サク（折）	サシ（纓子）	サン（笇）
	サニ（産）	シバ（柴）	シム（涑）	シヤ（紗）
	スジ（蓯燕）	セキ（塞）	セム（逼）	チム（賃）
	テイ（弟）	テム（鐔）	ドウ（筒）	トク（説）
	トグ（遂）	トグ（礪）	トム（認）	ヌグ（脱）
	ハイ（拝）	バウ（房）	バウ（坊）	バカ（薄訶）
	ハク（箒）	バク（媚）	ハタ（瞟）	バフ（棄）
	ハル（睛）	ヒヒ（朘）	ヘイ（幣）	ヘグ（耗）
	ベニ（䞓粉）	ホウ（俸）	ボク（耄）	ユギ（靫）
	エス（穢）			
平平	アマ（泉郎）	アマ（尼）	アレ（餅粉）	アワ（粟）
	アン（案）	イカ（五十日）	イル（煎）	エン（縁）
	エン（宴）	ガク（樂）	カゴ（籭）	カヒ（稃）
	コウ（槽）	コガ（榼）	コグ（漕）	コヒ（喉痺）
	コン（斤）	サヘ（陸）	ジユ（誦）	ズス（念珠）
	チツ（秩）	テイ（亭）	テウ（兆）	デウ（條）
	デウ（帖）	デシ（弟子）	デン（傳）	ドク（毒）
	トモ（艫）	ハカ（墓）	ハコ（鮬）	ハソ（鰙）
	ハチ（枹）	バツ（罰）	ハミ（續断）	ヒダ（穊）
	ヒダ（襞積）	ヒミ（瘃）	ヒビ（瘃）	ヒル（箕）
	ヒル（脪）	ヘス（滅）	ホス（酺）	ホフ（法）
	モヂ（屯）	モミ（樅）	ヨク（慾）	ロウ（樓）
	カチ（褐衣）			
平去	ヘウ（豹）			
去上	イシ（倚子）	エビ（纓）	クコ（枸杞）	スロ（椶櫚）

	チサ（苣）	ヒス（秘）	ユリ（百合）	
去平	ジミ（任意）	ヂス（持）	チミ（魑魅）	ヒメ（鴲）

3音節語

上平平	アハヅ（澆）	カザミ（汗衫）	カシコ（彼）	キヂン（麹塵）
	サラケ（浅甕）	テンズ（轉）	ヒバル（炘）	エメル（媽発
上平上	コボル（泛）	ホウズ（崩）		
上上平	アガル（軒）	アクカ（秋鹿）	アクタ（秋田）	アハツ（繞）
	アハツ（周章）	アフグ（仰）	アブル（溢）	イサム（勇）
	イラフ（俄）	イロフ（光彩）	ヲカチ（雄勝）	ヲケラ（朮）
	ヲゴル（慠）	カヅラ（芎藭）	カシク（老）	カタス（淬）
	カタム（結）	コバム（拒）	コブル（催）	コラス（凝）
	サガス（涼）	サカフ（逆）	サグル（探）	ザムス（讒）
	スサブ（荒）	スモリ（孵）	セフス（摂）	セミネ（脊梁）
	チガフ（違）	ニカム（断）	ニコゲ（毳）	ニコゲ（胈）
	ハバム（沮）	ヒサグ（拉）	ヒシグ（拉）	ヒツフ（疋夫）
	ヒバル（折）	ヒヒル（沖）	ホダス（絆）	モダエ（悶）
	ヤマシ（知母）	ワガヌ（宛）	ヰナベ（員弁）	
上上上	アサザ（荇）	アシヰ（藎草）	アツシ（厚）	アヅシ（支離）
	アバラ（場）	アマナ（麻黄）	アマニ（女萎）	イカダ（筏）
	イキシ（壹志）	エツス（謁）	ヲムナ（芎藭）	ガウシ（合子）
	カハワ（河曲）	コツシ（兀子）	コホリ（氷）	サカル（避）
	シフキ（蔽）	ショク（職）	シルシ（徽）	テテレ（囮）
	トツギ（嫁）	ニハソ（甘遂）	ニヒソ（甘遂）	ヒカケ（蘿）
	ヒラカ（平鹿）	ムラジ（連）	モカミ（最上）	ユハタ（纈）
	ロウジ（簏子）			
平上上	アヘス（饗）	カタエ（諸）	カナギ（莛）	サイデ（割出）
	サガル（下）	セナカ（龜）	テウシ（銚子）	トゲヌ（遂）
	ホノギ（風聞）	モヌク（嬗）	ヨロツ（針魚）	
平上平	アハイ（交）	イキス（嘘）	イチビ（莔）	カイナ（藎草）

	キウタ（相）	シカイ（絲鞋）	セイス（制）	セイス（製）
	セツカ（脊梁）	テゴヒ（綴牛皮）	ハイス（配）	ハカリ（秦艽）
	ホクシ（火撅）	ホブル（屠）		
平平上	アサケ（朝明）	アバク（撥）	イクハ（的）	イサム（諫）
	イソフ（争）	エンジ（燕脂）	エンビ（鷰尾）	カシク（炊）
	カダム（姧）	カツグ（潜）	カヘル（殍）	コニシ（胡荽）
	コラス（懲）	コラス（罪）	コロス（懲）	サイシ（笄子）
	サガシ（阻）	サクル（决）	サバク（捋）	サムゴ（三鈷）
	サンゴ（珊瑚）	サンバ（散飯）	シトム（編）	シホル（私）
	セメグ（鬩）	デウギ（鐐木）	トヅク（屆）	ドヨム（動）
	ニラグ（菹）	ハシハ（圭）	ハダク（歾）	ホウズ（報）
	ホウス（封）	ホトキ（疋）	ホホク（潦倒）	モドク（嫌）
	モドル（戻）	ユビク（臑）	ヨバフ（娉）	エグシ（醶）
平平平	アクミ（飽海）	アムギ（奄藝）	アンス（案・按）	イチキ（櫟）
	イナギ（稲機）	イフス（揖）	イモジ（菆）	カカミ（蘞）
	ゴザウ（五蔵）	コトリ（一手）	コハシ（鵌・鶚）	コムグ（金鼓）
	サスエ（捲）	サミス（褊）	ザムス（讒）	シユビ（麈尾）
	チンズ（鎮）	テウズ（捸）	テダテ（行）	テツス（撤）
	デツス（怗）	テムス（點）	トノキ（直）	ハクヒ（齕）
	ハツリ（劙）	ハツル（劙）	ハンズ（判）	ヒダメ（會）
	ホクソ（火糞）	ヨハヒ（歯）		
去上平	サヒツ（作皮）			
去上上	エセジ（否）	ゴフン（胡粉）	ザムス（懺）	ルバン（露盤）
去平上	サンズ（散）			
去平平	モダス（黙）			

4 音節語

上平平上	カタギニ（印）	ホロノハ（倍羅　）	ワゲタリ（曲）
上上平上	イチナリ（逸）	ホソツク（薵）	ミヤツコ（造）
上上平平	カツカツ（綿慠）	サウドン（草墪）	サンガク（散樂）

	シナジナ（磯）		
上上上平	アグナフ（趍）	ヲイタミ（置賜）	ガラメク（鏘）
	コボメク（轜）	サウカイ（鞁鞋）	サキクサ（薺苨）
	シギリハ（蕭慎羽）	シバヤク（柴）	シモフト（下）
	スムノリ（紫苔）	ハハクリ（貝母）	ホトボス（浸）
	ホホテウ（鳳蝶）	モトホル（潦）	
上上上上	アサツキ（嶋蒜）	アタラシ（可惜）	カラクサ（萱）
	テウトウ（刁斗）	ニハクサ（地膚）	ハニワリ（埴破）
	ホクトウ（北斗）	ユサハリ（鞦韆）	ヨリカク（搔純）
平上上上	センサイ（前栽）	トリバミ（執昨）	モロモロ（衆）
平上平上	アガラシ（悠）	カミハム（咀嚼）	サシグシ（枇）
	ハネウツ（運）		
平上平平	サイバラ（催馬樂）		
平上上平	イナグキ（稱）	イナクヒ（稂）	イフカル（訝）
	ショウリ（縦理）		
平平上上	アヂマメ（稨豆）		
平平上平	アナグル（嵒）	イザナフ（誘）	カスドル（滓）
	サバラカ（正）	シフクサ（羊蹄菜）	チカヅク（促）
	ハユガム（嬶）	ホトヲル（熱）	
平平平上	アタラシ（新）	エダツス（傜）	
	シケイト（絓絲）	センヘイ（煎餅）	ハマニレ（蕘華）
	ヒヒオウ（賤）	ホソクツ（爀）	
平平平平	アエモノ（肖與）	イヲノヰ（五百井）	カサモチ（白芷）
	ギムメン（金綫）	クルクサ（大青）	コジヤク（戸籍）
	コムヘイ（金錕）	コンドン（餛飩）	シタタル（詷談）
	タンノキ（石檀）	ハトクサ（大青）	モクラン（木蘭）
	ヤマクサ（狼毒）		
平去上上	シミサウ（浸淫瘡）		

5 音節語

上平平平平　ウタカクサ(升麻)　ナンシヤウ（軟障）

上平上上平　ツキホロフ（弥滅）

上上平平上　サクエタリ（慘裂）　ハナキラル（天）

上上上平平　アナタムト（蘭閣）

上上上上平　アカマクサ（澤蘭）　イハクスリ（石斛）　ヲスメトリ（鶺鴒）

サハタガハ（狭鰭河）　ニヒマクサ（蘭茹）　ヒキサクラ（蕪夷）

ヒキヨモギ（馬先蒿）

モトロカス（文）　ヤハラクサ（黄耆）

平上平上平　カツネクサ（麻黄）　カミクラフ（咀嚙）

平上上上上　テツシヤウ（鐵精）

平平上平上　テウカハカ（蔵鈎）

平平上上平　シヤウガン（象眼）

平平上上上　アサハヤカ（漸澡）　ハマスカナ（防風）

平平平上平　イタチクサ（連翹）　イタチハセ（連翹）

カヘンナナ（帰歟）

平平平上上　ハマニカナ（防風）　ハマタカナ（天名精）

ハマフクラ（天名精）　ヤマナスヒ（防葵）

6 音節語

上上上平平平　ヒタヒキラル（天）

上上上平平上　シルシカアル（補）

上上上上平平　カハチサノキ（賣子木）カヒルテノキ（鶏頭樹）

上上上上上平　エヒスクスリ（芍藥）　サワアララキ（澤蘭）

平上平上上平　チチノハクサ（紫参）

平上去去平平　モクグエンジ（木槵子）

平上上平上平　サシシリゾク（蠶）

平上上上上上　コムセンクエ（金錢花）

平平上平上平　バタタカナリ（灼）

平平上上上上　シヤウシヤウ（象常）

平平平上上平　アシトテヒク（留く）

平平平平上平　ホシジシウリ（濁）

平平平平平上　イタヅカハシ（劳）

平平平平平平　カノニケクサ（人叅）　　ニコニコンズ（輾然）

9 音節語

平平平上上上平上上　スクナヒコノクスネ（石斛）

一部分にだけ点をさしてある語。

サス（坐）
コントク（懇篤）
コムカウサ（金剛砂）
キス（記）
ギ（義）
カラスヘミ（蚖虵）
カムス（感）
カヘンス（肻）
エムス（豔）
エッス（謁）
イウナリ（優）
アハケタリ（稀）
アテナリ（貴）
アタナリ（寇）

ヱス（穢）
ヱイス（詠）
ハキアケ（辷）
ハイロ（陪廬）
テウタウセス（不相）
チヌル（疊）
チウ（誅）
タヽソフ（楯　縫）
シヤス（謝）
シス（辭）
サカタヒ（逆旅）
サムエハコ（三衣匣）
サハソラシ（槀木）
サツス（察）

C 担　当　者

この仕事は，古代研究室開設準備室の山田巌と広浜文雄が担当し，所外の臨時補助者が年間30日程浄書を手伝った。

D 次年度の計画

複合した形で掲げられている語の，後の要素を検索できる索引を作ることを予定している。（山田・広浜）

類義語の調査研究

A. 研究の目的

第一資料研究室は，昭和36年度から３年計画で類義語の調査研究を行なっている。この研究は，現代語において，和語・漢語・外来語にわたる類義語の多様性が，社会生活の能率を妨げているという事実があるのではないか，そのような現象は，類義語の中でもどういう部面に著しいか，その問題点をさぐることを目的としている。

B. 研究の経過

第２年度にあたる本年度は，前年度収集した資料を中心にしてその分析を実施した。

類義語というものを原理的に考察するのではなく，現象面に即して考えてゆく立場をとったこの研究は，類義語の範囲を，一群の語がさしているもの，および，さし方・とらえ方の同一性あるいは近似性をめやすとしてくぎり，これに該当する語を選び取り，その種々相を観察することから出発している。観察の観点として，(イ)語の意味内容　(ロ)語の形態　(ハ)語の文法機能・品詞性など(ニ)語の存在様式を考えることができる（詳しくは昭和36年度年報56～57ページ参照）が，(ロ)以下の観点は，作業上(イ)に伴って考察すべきものであるから，考察の主眼は，語の意味内容にむけられる。

意味内容の分析を，次の二つの面から行なった。

(A)　語の中核をなす意味内容が多少のずれを示す類義語

これについて研究を要すると思われるのは次の点である。

1）　個人差による意味用法の違い

類義関係にあることばの概念内容は，個々人によってずれている場合がある。たとえば，都市と都会，批判と批評など。このようなずれは，社会生活の能率を妨げる原因になると考えられるが，そのずれの程度はどのくらいのものであ

るか。ことに，それが社会生活に密接な交渉をもつ専門語（大雨警報と大雨注意報との関係など）の類義語に見られるならば，その支障は無視できないであろう。また概念内容が定着していない新語（逆コースとリバイバルとの関係など）には，考察すべき問題が多いであろう。

2） 同音類義語の使い分け

同音類義語の細かい使い分けがあいまいであるために起こる疑問もまた，社会生活の能率に支障を与えていることは，あらためて指摘するまでもない。このような使い分けが社会的にどの程度定着しているものかを検討する必要がある。たとえば，機械と器械，平行と並行など。

(B) 語の中核をなす意味内容はほとんど同じであるが，周辺的な意味等における違いのある類義語。

ここに周辺的な意味というのは，語の意味の中核をなすものが知的な側面であるとすれば，これに対して語の意味の情意的側面をさす。こういう部分は，主観的要因が著しくはたらくので，分析するのがむずかしいが，その中にもおのずから，その語のもつ情意性が著しく個々人の主観にゆだねられるものと，ある程度社会的な通念として一定の情意性がそこに認められているものとがある。類義語というものを原理的に考察する場合には，このような主観的な情意性をもつ語について深く細かく観察すべきであろうが，この研究の目的に照らせば，社会的通念としての情意性が認められる語を重視するのが至当であろうと思う。そのような情意性を次のような面から観察することができよう。

(1) 新古の感じ（財産と身代，未亡人と後家，台所とキッチン）

(2) よいことば，わるいことばという感じ（ごはんとめし）

(3) いやしめの感じ（男と野郎，死ぬとくたばる）

(4) 当事者がきらう感じ（かたわと身体障害者，女中とお手伝いさん）

(5) 忌まれる感じ（便所・手洗い・洗面所・はばかり・トイレ）

(6) 改まった感じ（いますぐ と ただいま，掃除と清掃）

そして，このような情意性を語に与える原因となるものとして，その語の音のひびきなどの形態面，その語の使用される表現様式・文体・文脈または使用分野など，その語の存在様式，その語を使う言語主体の性別・年齢などがあげ

られるばかりでなく，語の中核的な意味も，このような情意性とわかちがたく結びついているというのが類義語の実態であろう。

C. 分 析 の 方 法

われわれの主観によって類義語の種々相をひとわたり見渡し，その中から主として研究すべき項目として切り取った，上述の二つの面につき，われわれの試みた分析が，どの程度客観的にも認められるかを検討する必要がある。そのために，小規模なテストをくりかえし実施した。

I　準備テスト

テスト問題作成の資料を得るために，研究所員および研究補助員にアンケートを行なった。調査事項は，

(1)　中核的意味および周辺的意味についての個人差の調査

一組みの類義語，たとえば，クラス・クラブ・サークル・グループ・チーム・パーティー，きり・もや等々につき，その人の区別する意識内容をできるだけ細かく答えてもらった。被調査者1名ごとに課題の語をかえたので，31組の類義語群についての資料を得た。

(2)　周辺的意味等についての社会的通念の調査

いくつかの類義語の組，たとえば，つやと光沢，なおすと修理する，誕生と生誕等々につき，各組に数名を配当して，その答えから共通に意識されている部分を抽出し，社会的通念につきテストする資料を得た。

II　テスト

(1)　中核をなす意味内容に関するテスト

(a)　個人差・使い分けの実態を調べる。

大学生　258名（男123，女135）に実施

日本大学文理学部	72名
千葉大学文理学部	18名
上智大学外国語学部	89名
早稲田大学教育学部	79名

(b)　同音類義語の使い分けの実態を調べる。

高校生　143名（男68，女75）に実施

都立白鷗高校第３学年　48名

都立北高校　第３学年　　45名

都立城南高校第３学年　50名

(2)　周辺的意味等に関するテスト

(a)　同義的な類義語の一対において，いずれを使用するかについての世代等による変化を調べる。

日本大学文理学部学生　　77名（男44，女33）

老人ホーム浴風園在籍者 100名（男26，女74）

(b)　類義語間に選択の自由が存在する表現において，いずれを選ぶか，それはどういう要因によるかについて調べる。

武蔵大学経済学部学生　　　　　　　70名（男）

東京女子大学英文学科・国文学科学生　91名（女）

(c)　イ）　外来語がどんな語と類義関係になると意識されているかを調べる。

ロ）　類義関係にある単語二つ（例　季節・シーズン）の各々を使って，短文を作らせ，その結果に現われる傾向の違いを調べる。

武蔵大学経済学部学生　　　75名（男）

相模女子大学国文学科学生 122名（女）

(d)　イ）　自由記述法によって類義語間のさまざまな異同を書かせて，調べる。

ロ）　外来語を一方に持つ類義語の対（例　おおい・カバー）において，その単語から思い浮かべる事物に，どんな傾向の違いがあるかを調べる。

千葉大学文理学部学生　18名（男５，女13）

テストを実施している間に，たまたま研究所が本年度長岡市で実施する『国民各層の言語生活の実態調査』に参加することになったので，類義語の細かい差異が，社会一般の人々にどのように受けとめられているかを推察する機会を得た。

(1)　面接調査　調査日数・人員・時間の制約によって問題の量が制限されるので，類義語については次の３問しか入れられなかった。

(イ) インスタントと即席……外来語の滲透度・理解度をはかる。

(ロ) 南京豆と落花生……意味の個人差をはかる。

(ハ) 弱震と軽震と微震……専門語の理解度をはかる。

(2) 集合調査　工場従事者に対し，アンケートにより調査した。

(イ) エチケットと礼儀作法……外来語の新古・好悪の感じ等をはかる。

(ロ) うちといえ
(ハ) カップとコップ
(ニ) 貯金と預金
……意味の個人差・使い分けの存否をはかる。

(ホ) 平行と並行，半面と反面
製作と制作，異状と異常
……同音類義語につき，その使い分けの存否をはかる。

この2調査により，年齢差による理解度・感じ方の違いが，ある程度認められるものがあった。

以上が本年度実施した分析の概要である。これらの結果を総合して来年度に記述し報告する予定である。

D. 担　当　者

本年度の作業は次のように分担した。

類義語の種々相の概観	共同
長岡市における類義語の調査および全般の調整	松尾　拾
語の周辺的意味等に関する類義語の分析	西尾寅弥
語の中核的意味に関する類義語の分析	田中章夫

研究補助員露峰裕子・河東はるみは，調査の全般にわたり，その作業を助けた。テスト結果の集計の一部は臨時作業員がこれを行なった。　（松尾）

中国の言語・文字問題に関する調査

標記の調査のため，37年度中に集めることのできた雑誌新聞を表示すると，次の通りである。（未収集の部分は〔欠〕として表示する。）

種目 ＼ 年次			35	36	37
雑誌	中国語文	（月刊）	91号 ～ 99号	100号～110号	111号～121号
	文字改革		（半月刊） 6月以降〔欠〕	〔欠〕	（月刊） 74号 ～ 85号
新聞	光明日報	（日刊）	〔欠〕	6月まで〔欠〕	3.4.5月分〔欠〕

○ 雑誌「中国語文」は，日本の「言語研究」あるいは「国語学」などに相当する学術誌であって，文字改革をふくむ，言語・文字問題に関する論議や記事は，むしろ雑誌「文字改革」や新聞「光明日報」の特集欄などに多く見られる。

○ 35年・36年の二年間は，中国から雑誌・図書などの輸入がほとんどとだえていた時期である。

未収集の部分に存在するであろう関係記事については，該当部分を所有していそうな他の機関および個人に依頼して，マイクロフィルムその他によって，38年度以降逐次補充をはかってゆく予定である。

したがって，現在のところ，年報11（昭34年度）に記された時期以後の中国の言語・文字問題について概観するには，資料的にかなりの不足を感ぜざるをえない。そこで，ここでは収集しえたかぎりの関係論文・記事について，問題ごとに分類して，その点数を示し，さらに一・二の点について解説を加えておくにとどめる。

一般言語学・応用言語学	**100**
言語研究	**506**
漢語研究	
音声・音韻	60
語法	128
語彙	150
文字	54
語史	21
方言	17

文体・表現	56
少数民族語研究	11
外国語研究	9
言語教育	**155**
漢語教育	59
古典教育	10
外国語教育	47
少数民族語教育	39
言語・文字問題	**317**
文字改革一般	8
文字改革関係史料	10
簡（略）字関係	29
文語文と簡（略）字	20
異体字整理	2
ローマ字方案に関するもの	10
ローマ字教育に関するもの	40
ローマ字の応用に関するもの	43
注音識字に関するもの[1]	21
音訳の人名・地名の表記に関するもの[2]	37
難字注音に関するもの[3]	16
字典・索引などにおける漢字の排列・分類法に関するもの	23
共通語普及に関するもの	38
規範化（標準語・正書法など確定のうごき）	20
書　評	**43**
動態紹介	**63**

簡（略）字について

年報11までに述べられているように，1956年2月から，1959年7月まで，前後四回にわたって，簡字517と簡化偏旁54とが公布されているが，それ以後，今日（昭和38年3月現在）にいたるまで，簡字の数の増減や字体の変更などのことは行なわれていない。もちろん，すでに伝えられているように，中国共産党中央委員会は，「注音識字を推しひろめることについての指示」（1960年4月22日発表）の中で，

〝すみやかに文盲をなくし，児童の学習上の負担を軽減するため，現在の漢字はもっと簡略化される必要がある。あらゆる文字を10画以内の，簡単明瞭な法則をもつものとし，書きにくい・読みにくい・おぼえにくい・書きあやまりやすい・読みあやまりやすい・まちがっておぼえやすい種類の字を逐次淘汰してしまわなければならない。この任務を果たすには，広汎な大衆の力にたよる必要がある。大衆はこの

1) 漢字に常にローマ字のルビをつけておこなう識字教育の方法。1960年以来全国的に実施され大きな効果をあげている。

2) 中国の人名・地名を外国文中に表記する場合の音訳法。外国の人名〔とくに科学・技術関係の論文・記事中に頻発する〕や地名を中国文中に表記する場合　漢字による音訳をすべきか　原文の表記をそのまま使うか　中国式ローマ字による音訳その他の表音主義的方法をとるか　などに関する論議。

3) 1961年から新聞その他において読みあやまりやすい　または　二つの読み方のある漢字などに対してローマ字で読み方を注することがおこなわれるようになつた　そのことに関するもの。

問題にきわめて熱心で，よい方法を知っている。各省・市・区の党委員会は，その地域の関係部門に新しい簡字についての建議を最近のうちに提出させ，中央の文字改革委員会に報告し，そこで総合整理してから中央と国務院に送って審議決定されるようにされたい。》

と述べているし，教育部・文化部・文字改革委員会も，「新しい簡化漢字の募集に関する通知」（1960年6月4日発表）を出しているのであるから，一層徹底した形の簡化漢字の方案を作るための努力が，全国的な規模で進められたであろうことは想像に難くない。

また光明日報の文字改革欄は，1962年10月から約3ヶ月にわたって「文言能不能用簡化漢字」（古典など文語文で書かれたものを出版する場合などに，簡化漢字を使えるかどうか）をテーマに，紙上討論を展開した。その目的は，新しい簡化漢字方案を決定するうえで，文語文を表記する場合のことも考慮に入れる必要があるか否かを明らかにしようというのである。こういった一連の動きから見ても，新しい簡化漢字方案が決定発表されるのは，そう遠い将来のことではないように思われる。

普通話異読詞審音表について

共通語普及運動および規範化に関する重要文献としてあげなければならないものに，普通話審音委員会の発表した「普通話異読詞審音表初稿(第三編)」(1962年12月発表）がある。これは，現代北京語や北方方言の語彙中で，実際に使われている語形にゆれのあるもの，たとえば「うみ」（膿）を意味する単語を，nong / nwəŋ/ 〔nʊŋ〕というか，neng / nəŋ/ 〔nʌŋ〕というかというような問題に対して，統一的な標準語形を与えようとするものである。1957年10月に発表された第一編が666語と170の地名，1959年7月に発表された第二編が569語をそれぞれ含んでいるのに対し，第三編は，600語あまりを追加すると同時に前二編に対して部分的な訂正をも加えている。今後，辞典の発音表示や，各種のローマ字表記において，また，共通語普及運動や学校教育において，規準になるものとして重視する必要があるだろう。（斎賀・松本）

国語関係文献の調査

国語に関する学問の一般を知り，あわせて学界の動向や世論の動きをとらえるために，前年度に引き続き，本年度も，昭和37年1月—12月の刊行の図書・雑誌・新聞についての文献調査を行なった。これらの文献目録はその他の資料・情報とともに，当研究所編『国語年鑑』（昭和38年版）に掲載されている。（ただし，新聞記事目録は紙数の都合で本書には掲載していない）

以下，その各々について分類し，冊数および点数により，大まかな傾向を示すことにする。

A. 刊行書の調査

国語関係の刊行書について，書名・著（編）者名・発行所，発行年月・型・ページ数，ならびに内容を調べ，カード化し，総数357冊の分類目録を作成した。

1. 刊行書の分類とその冊数

国語一般	15
ことばと機械	2
国語史	4
音声・音韻	1
文字・表記	14
文法	7
文章・文体	17
語彙・用語	14
方言・民俗	28
マス・コミュニケーション	8
広告	6
国語国字問題	13
国語教育	
国語教育一般(国語教育史)	12
学習指導一般	25
聞く・話す	1
読む・読書指導	16
書く・作文指導	11
文字教育	3
古典・漢文教育	3
その他学習指導	4
テスト	6
日本語教育	2
言語技術	57
言語学その他	16

外国語教育	4		合計	357冊
辞典・用語集	35	追補	（前年度以前に出版されたもの）	29
資料	33			

昨年に比し，国語教育や話し方，文章の書き方等の言語技術に関するものの多いことがやや目だつと言える。

B．雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者・誌名・発行年月・巻号数およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。採録した論文・記事の総数は2,453点に達した。

1.　一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告書類の種別数

a　一般刊行雑誌（学会誌も含む）………183種

国語・国文・言語ほか	76	週刊誌	1
方言・民俗	9	総合誌	3
国語問題	13	詩歌・芸能	7
国語教育	41	出版・PR	10
マス・コミ関係	9	本年度臨時に入ったもの	10
外国語	4		

b　大学・研究所等の紀要・報告類………101種

なお，調査した刊行物は，研究所に寄贈された分（後記，「昭和37年度に寄贈された図書」の一覧(2)「逐次刊行物の部」参照）と，当所購入による下記の諸雑誌である。

計量国語学（計量国語学会）	教育（国土社）
国文学 解釈と鑑賞（至文堂）	教育心理（日本文化科学社）
文学（岩波書店）	児童心理（金子書房）
国語と国文学（東大国語国文学会）	社会学評論（日本社会学会）
放送文化（日本放送協会）	沖縄文化（沖縄文化協会）
国文学 言語と文芸（大修館書店）	週刊朝日（朝日新聞社）３月まで
文学・語学（三省堂）	学術月報（日本学術振興会）
英語青年（研究社）	その他国語関係論文の載った諸誌（略）

2. 論文・記事の分類とその点数

分類	点数
国語学	
国語一般	48
意味	4
言語生活	37
言語活動	6
話しことば	10
ことばと機械	5
ことばに関する随筆	86
国語史	
国語史一般	24
訓点と訓読語	25
音声・音韻	
音声・音韻一般	30
史的研究	31
文字	
文字・活字	18
表記	12
速記	11
文法	
文法上の諸問題（現代語法）	40
文法の史的研究	42
敬語	7
文体	
文体・表現	24
江戸時代以前	31
明治以後	21
翻訳の問題	10
語彙	
語彙一般	12
古語	31
現代語	3
各種用語	11
流行語・新語	4
外来語	15
地名・人名	3
辞書・索引	23
古典の注釈	
万葉集	20
大和物語	9
かげろう日記	9
源氏物語	18
枕草子	10
和泉式部日記	8
新古今集	10
平家物語	4
大鏡	9
近松	6
その他	18
方言	
方言と標準語	33
各地の方言	
東部	21
西部	46
九州・琉球	19
マス・コミュニケーション	
マス・コミの問題	52
新聞	17
ラジオ	22
テレビ	11
宣伝	15
国語問題	
国語問題一般	52
表記の問題	
表記法一般	35
当用漢字など	14
かなづかい	3
送りがな	3
わかち書き	4
かな書き	13

ローマ字	7
地名・人名の表記	2
国語教育	
国語教育一般	85
国語教育史	38
学習指導	
学習指導一般	149
ドリル学習	3
学習ノート	10
ことばの指導	13
聞く・話す	27
聞く	4
話す	35
読む・書く	3
読む	124
読書指導	20
書く	
作文教育	229
文字指導	30
表記の指導	5
語彙指導	19
文法教育	20
文学教育	56
古典教育	38
漢文教育	6
学力評価	52
国語教科書・教材研究	82
特殊教育	14
幼児教育	10
ローマ字教育	10
視聴覚教育	4
日本語教育	7
言語学	
言語一般	63
外国語研究	18
外国語教育	24
外人の日本語研究	2
問題の紹介	37
国語資料	10
書評・紹介	92
合計	2,453点
追補	97

昨年に比し，国語問題に関するものの少なかったこと，作文教育に関するものの多かったことなどが注目される。

C. 新聞記事の調査

下記の諸新聞から，関係記事を切り抜き，それを整理し各月ごとに製本し，資料として保存し，閲覧に供するとともに，分類別のカード目録を作った。カードの記載形式は，見出し語（欄名だけで，見出し語のないものは，その内容によって，適宜題名をつけた。）・紙名・筆者名・年月日・欄名・行数・内容の順序によった。切り抜き総数は1,700点である。調査した紙名，切り抜き数，および月別の切り抜き数は次のようである。

1. 新聞の種類と切り抜き数

日・夕刊紙	
朝日	284
（大阪その他）※	10
毎日	281
（大阪）	10
読売	245
（大阪）	18
東京	188
東京タイムズ	56
産経	183
（大阪）	2
日本経済	80
中部日本	145

特殊新聞	
読書	38
読書人	57
図書	33
新聞協会報	39
その他	31

※かっこの中は地方出版のもの。これは，大阪の山田房一氏，名古屋の平岡伴一氏などの地方在住のかたがたから，関係記事のあるごとに恵送されたもの。

2. 月別の切り抜き数

1月（130）　2月（126）　3月（146）　4月（153）　5月（137）
6月（190）　7月（117）　8月（140）　9月（115）　10月（179）
11月（162）　12月（105）

3. 記事の分類とその点数

分類	点数
国語（学）	16
国語史	5
音声・音韻	18
文字	
文字・表記	7
活字	5
語彙	
語彙一般	32
各種用語	142
新語・流行語・隠語	85
外国語・外来語	57
辞書	8
名づけ・問題語	81
文法	
文体	
文体・表現	37
翻訳の問題	47
方言	
方言一般	12
各地の方言	16
標準語と方言	14
言語生活	
言語生活一般	92
話しことば	65
ことばづかいの問題	77
敬語の問題	14
ことばと機械	31

国語問題	
国語問題一般	53
表記の問題	
表記一般	26
当用漢字など	53
かなづかい	11
送りがな	16
わかち書き	1
よこ書きたて書き	6
略語・略称	7
地名・人名の表記	39
外来語表記	16
ローマ字	2
国語教育	
国語教育一般	10
学習指導の問題	
学習指導一般	15
話す（聞く）	3
読む（読書指導）	23
書く（作文指導）	15
国語の学力テスト	26
国語の教科書	13
文学・古典教育	8
特殊教育	52
幼児語教育	21
ローマ字教育	4
言語学	
言語一般	34
外国語一般	70
外国語教育	41
外国人の日本語学習	19
外国語に関する紹介ほか	11
マス・コミュニケーション	
マス・コミ一般	11
新聞	20
ラジオ	17
テレビ	6
宣伝・広告	31
出版	4
書評・紹介その他	155
合計	1,700点

昨年に比し，外国語関係の記事がやや多かったことと，国語問題関係の記事が激減したこととが注目される。これについては，昨年ジャーナリズムを賑わした国語審議会関係の問題が本年においてはあまり取り上げられなかったことに思いをいたさねばならないだろう。

さて，これらの国語関係文献目録の詳細は，（新聞記事目録を除き）他の資料とともに，これを「国語年鑑」（昭和38年版）に掲載したので，ここではふれない。

D．担　　当　　者

この調査および国語年鑑編集の作業は主として次のものが担当した。

飯豊　毅一　　　大久保　愛

なお，研究補助員，塚田菊子，小山孝子が作業を助けた。（飯豊，大久保）

図書の収集と整理

前年度にひきつづき，研究所の研究活動に必要な研究文献・言語資料を収集し，管理した。また，例年のとおり，各方面から寄贈されたものが少なくない。（下に示す。）

昭和37年度に新しく加えた図書の数は，次とのおりである。

単行本	購入	464冊
	寄贈	174冊
雑　誌	購入	1,106冊
	寄贈	835冊
新　聞	購入	10種
	寄贈	2種

年度末の蔵書数（単行本だけ）は，27,802冊である。　（大石）

昭和37年度に寄贈された図書の一覧

寄贈者名（敬称略）　図　書　名

1　**単行本**（　）内は編著者が寄贈者と異なる場合の編著者名。＊は抜刷。

朝日新聞東京本社広告部　「第６回読書社会調査報告総括」

石丸久　「わるいカンジ・いいカンジ」

今井文男　「芸の領域」

楳垣実　「近畿方言の総合的研究」「隠語」「舶来語・古典語典」「方言通信調査の方法と効用」＊

大分県南海部郡切畑小学校　「『国語科指導』各県の傾向と今後の問題」

大阪女子大学　「大阪女子大学蔵 日本英学資料解題」

大阪大学　「博士学位論文」1，2「大阪大学図書目録」昭和35年版

奥村三雄　「西濃揖斐郡北部のアクセント」＊

香川県教育研究所　「作文・日記による人間形成の研究」

賀集寛　「三音節動詞の連想価表」続報，３報

鎌田良二　「西鶴『世間胸算用』助詞・助動詞索引(一)「の」「が」の部」

神鳥武彦　「広島市方言における〔ai〕連母音」＊

木村万寿夫　「ローマ字指導の問題点」＊

京都大学国文学会　「新訳華厳経音義私記倭訓攷」（岡田希雄）

京都大学文学部国語学国文学研究室　「慶長三年耶蘇会版落葉集」

宮内庁書陵部　「古今和歌集」「漂到流球国記」「比良山古人霊託」「政基公旅引付」

「桂宮本叢書」1，20、21

熊谷直孝　「国語演習」（田中順二・塚原鉄雄）

蔵国晴　「漢字改造按」

倉田正邦　「志摩郡志摩町（越賀・和具の会話)」（鈴木敏雄）

慶応義塾大学国文学研究会　「近代文学」

国立教育研究所　「国立教育研究所十年の歩み」「増加図書目録」6

佐伯梅友　「ことばのきまりと働き」

史料館　「史料目録」9

史料編纂所　「大日本古記録　言経卿記」3,「同　梅津政景日記」8,「大日本史料」2—13，3—18，7—18，8—25，10—11，12—43,「大日本古文書　家わけ」18，20,「同　幕末外国関係文書」32,「大日本近世史料　唐通事会所日録」4,「同　市中取締類集」4,「図書目録第2部和漢書写本編」1

神宮文庫　「神宮文庫増加図書目録」4

聖心女子大学　「北方探検記」（H・チースリク）

全国教育図書ＫＫ　「国語国文学資料図解大事典」上

総理府統計局　「昭和36年科学技術研究調査報告」

大東急記念文庫　「滑稽本について」（興津要）

武石彰夫　「天台大師和讃法話」「『三帖和讃』本文研究への一考察」＊

田島郷土史研究会　「福島県南会津郡田島町方言訛語集」（樋口弘次郎）

蓼沼良一　「翻訳機ヤマトの使い方」

秩父市教育委員会　「秩父の伝説と方言」

中元汞英　「略字の研究」

寺井義弘　「青森県南部方言考」

天理図書館　「インキュナビュラ」「宋版」「エジプト文化資料」（東京天理教館）

東京堂　「話しあいと説得の技術」（塩田紀和），「悪いことば・下品なことば」（前田勇）

東京都立日比谷図書館　「雑誌新聞目録和文編（昭和36年4月現在）」

東北大学文学部　「東北方言音韻調査表」

東洋文化研究所　「アジア地域文献速報」12，13，「新収和漢図書目録」13

内閣文庫　「内閣文庫国書分類目録」下，索引

長沢ハルミ　「日本美術辞典」（野間清六）

奈良国立文化財研究所　「平城宮発掘調査報告」2,「巧匠安阿弥陀仏快慶」（小林剛）「唐招提寺蔵『レース』と『金亀舎利塔』に関する研究」（守田公夫），「寝殿造系庭園の立地的考察」（森蘊），「院の御所と御堂」（杉山信三）

奈良女子大学図書館　「明治教育文庫目録補遺」

奈良女子大学文学部付属小学校　「わが校五十年の教育」

西村絅子　「電報文のエントロピーについて」＊

日仏会館　“BIBLIOGRAPHIE DE L'ORIENTALISME JAPONAIS 1955—1956”

日本学術会議　「長期研究計画シンポジウムプロジエクト研究のありかた」「文科系文献目録」13

日本学術振興会　「研究報告集録（人文編）」昭和36年版

日本国有鉄道総裁室修史課　「工部省記録，鉄道之部」

日本書院　「現代国語一」（岡崎義恵）

日本新聞協会　「新聞用語集」昭和38年版

日本放送協会　「国民生活時間調査」資料編1，2，3，4,「全国方言資料」4—近畿編一，5—中国・四国編一，「全国主要地名資料」「スポーツ辞典」12，体操競技，「新・外国楽曲の呼び方」

野地潤家　“COURSE OF STUDY FOR SENIOR HIGH SCHOOL（JAPANESE LANGUAGE）”（奥田邦男訳）「明治30年代の話しことばの教育」＊「この子をどう導くか」（広島県文集編委員会）

馬場宏　「能登木郎方言考」5

日野資純　「神奈川県の方言（「神奈川県の歴史」より）」

美術研究所　「日本美術年鑑」昭和36年版

広島大学教育学部付属小学校国語部　「『学校教育』国語教育関係論文目録 一大正の

部一」

広島大学国語教育研究室　「高等学校国語教育参考文献目録」

広島大学国語国文学会　「徒然草学習指導の研究」（土井忠生）

福岡市立教育研究所　「教育図書目録」1962

福島県教育調査研究所　「高等学校選抜学力検査結果の調査報告書」（昭和36年）

馬瀬良雄　「新しいアクセント論と長野県方言アクセントの体系」＊

松下秀男　「ローマ字指導法入門」

松村明　「『日本風俗備考』蘭日会話の部に見られる錯簡について」＊「丹波修治旧蔵『和蘭文典』の訳語」＊

三宅武郎　「おくりがな法資料集」

明治大学図書館　「増加図書目録（昭和36年度）」

文部省　「国語審議会報告書」「国語シリーズ」49，50，51，52，54，「新収図書目録」7，「学術雑誌総合目録人文科学欧文編」1962年版

柳田家　「先祖の話」（柳田国男）

矢野文博　「『まし』の意義とその用法」＊「続長恨歌訓読考異」＊

山形県方言研究会　「山形県方言研究文献目録（昭和37年）」

山口堯二　「複合語の形式について」＊

山口大学教育学部図書館　「日田文庫目録」

山口大学図書館　「若月紫蘭文庫目録」

ユネスコ東アジア文化研究センター　"THE FORMATION OF MODERN JAPAN" (K. NAKAMURA), "EAST ASIA IN OLD MAPS" (K. NAKAMURA), "RECENT TRENDS OF EAST ASIAN STUDIES IN JAPAN WITH BIBLIOGRAPHY" (K. ENOKI)

横山吉男　「戦後版漢和辞典についての一考察」

吉野忠　「近世の土佐の文献にあらわれたジ・ヂ，ズ・ヅのかなちがいについて」＊

琉球大学　「琉球文献目録」（比嘉春潮）

ＡＤ懇談会　「広告関係定期刊行資料調査報告」

2.　逐次刊行物（おもなもの）

愛知学芸大学国語国文学会　「国語国文学報」15

愛知県教育文化研究所　「研究紀要」19，20，「研究報告」37～41

愛知県立女子大学　「紀要」12，「説林」9，10

青山学院大学文学部　「紀要」6

秋田大学学芸学部　「研究紀要」12

朝日新聞社広告部「日本読書学会第6回調査による問題別リポート」3～8，10～15

明日香社　「明日香」275～286

あたらしい文字の会　「あたらしい文字」3—2～10，4—1

跡見学園　「国語科紀要」10，「短期大学紀要」1

いずみ会　「IZUMI」53～58

茨城大学文理学部　「紀要」13

宇都宮大学学芸学部　「研究論集」11

愛媛県立教育研究所　「紀要」33～35

愛媛国語国文学会　「愛媛国文研究」11，12

大分県立芸術短期大学　「研究紀要」1

大分大学学芸学部　「研究紀要」2—1

大阪学芸大学　「紀要」A—10

大阪樟蔭女子大学　「樟蔭文学」14

大阪女子大学文学会　「女子大文学」13

大阪市教育研究所　「教育研究紀要」57～61

大阪市立大学文学会　「人文研究」13—2～11，14—1

大阪大学文学部　「紀要」8，9

大阪府教育研究所　「研究報告集」55～59，61

大阪府立大学　「紀要」10

大下学園国語科教育研究会　「研究紀要」5

王朝文学研究会　「王朝文学」7

お茶の水女子大学　「人文科学紀要」15

お茶の水女子大学国語国文学会　「国文」17，18

お茶の水女子大学付属高等学校教育研究会　「紀要」7

尾道短期大学　「研究紀要」12

音の文化研究会　「音」10

香川大学学芸学部　「研究報告」1—15

学習院大学　「国語国文学会誌」6

学燈社　「国文学」7―6～15，8―3～5

鹿児島大学教育研究所　「研究紀要」13，14

鹿児島大学文理学部　「文科報告」11

カナモジカイ　「カナノヒカリ」447～488，「モジトコトバ」229～238

関西学院大学人文学会　「人文論究」12―4，13―2，3

関西学院大学日本文学会　「日本文芸研究」13―3，4，14―1，2

関西大学国文学会　「国文学」33

関東短期大学　「紀要」7，8

北見ローマ字会　「KITAMI RÔMAZI」22～24

岐阜大学学芸学部　「ことばと文学」1，「研究報告」10，11

岐阜大学学芸学部国語国文学会　「国語国文学」1

九州大学国文学会　「語文研究」14，15

九州大学文学研究会　「文学論輯」9

京都学芸大学　「紀要」20，21

京都学芸大学国文学会　「会報」8

京都女子大学国文学会　「女子大国文」24～28

京都市教育研究所　「報告」95～97

京都大学教育学部　「紀要」8

京都大学教養部　「人文」9

京都大学国文学会　「国語国文」331～342

京都大学人文科学研究所　「紀要」30～33，「ZINBUN」6

京都大学文学部心理学教室　「心理学評論」6―1

京都府立大学　「人文」14

京都府立大学国語国文学会　「会誌」3

宮内庁書陵部　「紀要」13

熊本女子大学　「学術紀要」14―1

熊本大学教育学部　「紀要」10―1，2

熊本大学教育学部国文学会　「不知火」14

熊本大学法文学会　「法文論叢」14

倉田正邦　「三重県方言」14，15

訓点語学会　「訓点語と訓点資料」21～24

群馬県教育研究所　「研究紀要」14～16

群馬大学学芸学部　「紀要」11

慶応義塾大学斯道文庫　「論集」1

言潮社　「速記学習」1－4～8，2－1，2

高知大学　「学術研究報告」10－9

高知大学国語教育学会　「国語教育」10

甲南女子短期大学　「論叢」6

甲南大学文学会　「文学会論集」18

神戸市外国語大学研究所　「神戸外大論叢」59～64

神戸女学院大学　「論集」25～27

神戸大学教育学部　「研究集録」27

神戸大学文学会　「研究」26～28，30

語学教育研究所　「語学教育」255～260

語学ラボラトリー協会　"LANGUAGE　LABORATORY" 1－1，2，「L・L・A通信」2

国学院大学　「国学院雑誌」63－4～12

国学院大学国語研究会　「国語研究」14

国語学会　「国語学」48～51

国立教育研究所　「紀要」30～33，35～37

国語問題協議会　「会報」9～14

国際基督教大学　「アジア文化研究」3

国立国会図書館　「国際交換通信」58～68（終刊号），「洋書速報」130～150

「古典と現代」の会　「古典と現代」17

ことばの会・なごや　「ことば」27～29

小林理学研究所　「報告」11－4，12－1，2

駒沢大学　「文学部研究紀要」21

埼玉大学　「紀要」（教育学部篇）10

相模女子大学学術研究会　「紀要」12～14

佐藤喜代治　「文化」26－3

滋賀県教育研究所　「研究紀要」4

滋賀県立短期大学　「学術雑誌」3

滋賀コトバの会　「みんなのコトバ」8

滋賀大学学芸学部　「紀要」11

静岡県立教育研修所　「教育研究」21，22

静岡大学教育学部　「研究報告」12

静岡大学文理学部　「人文論集」12

実践女子学園　「実践文学」14～18，「紀要」7

実務用字研究協会　「実務と用字」1－2，3，7

信濃教育会　「信濃教育」904～916

島根大学　「論集」11，12，「山陰文化研究所紀要」2，3

小学館　「総合教育技術」17－1～5，7～13，「教育技術学習心理」3－1，2，
5～12

上智大学　「SOPHIA」11－1～4

昭和女子大学光葉会　「学苑」268～276，278

初等教育研究会　「教育研究」17－4～6，8～13，18－2，3

信州大学教育学部　「研究論集」13，「紀要」11

信州大学文理学部　「紀要」11

新文芸協会　「ECRIBISTO」8，9

鈴木博　「研究紀要」（京都市立西京高等学校）9

成城大学文芸学部　「成城文芸」29～31

成城大学民俗学研究室　「伝承文化」2

聖心女子大学　「論叢」18～20

清泉女子大学　「紀要」9

全国大学国語教育学会　「国語科教育」9

禅文化研究所（花園大学）「禅学研究」52

大修館　「英語教育」11－2～12，「国語教室」111～113

大東急記念文庫　「かがみ」7

大東文化大学日本文学会　「日本文学研究」2

田唄研究会（広島大学文学部）　「田唄研究」2，3

千葉大学文理学部　「文化科学紀要」4

6

中央大学文学部　「紀要」11，12

津田塾大学　「TSUDA　REVIEW」1～7
鶴見女子短期大学　「紀要」2
天理大学　「中文研究」3，「学報」37～39，「ビブリア」21～23，「山辺道」9
東京外国語大学　「論集」9，「語学研究所所報」3
東京教育大学教育学部　「紀要」8
東京教育大学言語学研究会　「言語学論叢」2～4
東京教育大学大学院教育学研究科　「研究発表要録」1
東京教育大学文学部　「紀要」35，37，39
東京女子大学比較文化研究所　「紀要」13，14，「比較文化」7，9
東京大学国語研究室　「国語研究室」1
東京大学新聞研究所　「紀要」10，10－2
東京天文台　「暦象年表」1963
東京都立大学　「都大論究」2
東京都立大学人文学部　「人文学報」27～29
東京放送　「ラジオＣＭメモ」3，4，6～27
統計数理研究所　「彙報」17，「通信」9
同志社女子大学　「学術研究年報」13
同志社大学人文学会　「人文学」62
東北大学教育学部　「研究年報」10
東北大学教養部　「文科紀要」6～8
東北大学文学部　「研究年報」12，13上
東北大学文学部「国語学研究」刊行会　「国語学研究」2
東洋大学　「近代文芸研究」7，「文学論藻」22
東洋文化研究所　「紀要」25～28
徳島県教育委員会　「教育月報」146～158
徳島大学学芸学部　「学芸紀要」11
富山大学文理学部　「文学紀要」11
永江秀雄　「若越郷土研究」7－2（福井県郷土誌懇談会）
長崎大学学芸学部　「研究報告」臨時増刊号
中沢政雄　「国語教育科学」14～25
仲田庸幸　「国語研究」40～42（愛媛国語研究会）

名古屋大学　「教育学部紀要」9，「国語国文学」11，「文学部研究論集」28

名古屋大学教養部　「紀要」6，別冊1

奈良学芸大学　「紀要」10―2

奈良女子大学文学会　「研究年報」5

南山学会　「アカデミア」33～35

新潟大学教育学部　「紀要」3―1，2

新潟大学教育学部高田分校　「研究紀要」6，7

日仏会館　「学報」1962

日本音声学会　「会報」109～111

日本言語学会　「言語研究」41～43

日本教育協議会　「教育日本」1―7～11

日本国語教育学会　「会誌」20，21

日本コトバの会　「日本のコトバ」9

日本女子大学国語国文学会　「国文目白」1

日本新聞学会　「新聞学評論」12

日本大学国文学会　「語文」12―14

日本大学人文科学研究所　「研究紀要」3

日本大学精神文化・教育制度研究所　「紀要」1，2

日本大学文理学部　「研究年報」11

日本文芸研究会　「文芸研究」　40～42

日本放送文化研究所　「放送学研究」2～4，「文研月報」131～142，「年報」7

日本民俗学会　「会報」23～26

日本民族学協会　「民族学研究」26―2～4，「民協通信」2

日本リサーチセンター　「研究紀要」1―1，2

日本ローマ字会　「RÔMAZI　SEKAI」539～551

能楽思潮　「能楽思潮」20～23

野地潤家　「教育学研究紀要」3～7（日本教育学会中国四国支部会）

野間教育研究所　「紀要」21

函館人文学会　「人文論究」22

浜田数義　「土佐方言」3、4（方言研究同好会）

兵庫県立教育研究所　「研究報告」72

広島近世文芸研究会　「近世文芸稿」6

広島大学光葉会　「国語教育研究」4～6

広島大学国語国文学会　「国文学攷」27～29

広島中世文芸研究会　「中世文芸」24，25

福井漢文学会　「漢文学」10

福井大学学芸学部　「紀要」11

福井大学国語国文学会　「国語国文学」10

福岡学芸大学　「紀要」11

福岡学芸大学久留米分校教育研究所　「研究紀要」12

福岡市立教育研究所　「研究所報」44

福岡県教育調査研究所　「紀要」39，40，42

福島大学学芸学部　「論集」13

藤女子大学　「紀要」1

藤原与一　「方言研究年報」1962

仏教大学　「研究紀要」42・43

「文化と教育」研究会　「文化と教育」141，143～147，149，151，152

文化放送ＫＫ　「ラジオコマーシャル」7～10

米国大使館文化交換局　「日米フォーラム」（アメリカーナ，改題）8—3～11，9—1～3

防府市教育委員会　「研究要覧」1961年度

北海道学芸大学　「紀要」12—1，2，「学術文献収報」23，24

北海道教育研究所　「研究紀要」36

北海道大学　「外国語・外国文学研究」9，「教育学部紀要」8

北海道大学国文学会　「国語・国文研究」21～23

穂波出版社　「実践国語教育」264～275

松野豊　「ろう教育科学モノグラフ」2・3

万葉学会　「万葉」43～46

三重県立大学　「研究年報」（第1部）4—2

未定稿の会　「未定稿」10，11

宮城学院女子大学　「研究論文集」19～21

武庫川女子大学　」紀要」9

明治図書出版ＫＫ　「教育科学国語教育」39～52

桃山中学校　「研究論集」1962

文部省　「教育統計」75～79,「初等教育資料」144～155,「中等教育資料」130～143,
「文部統計速報」97,「文部省年報」88

山形県教育研究所　「山形教育」91～96

山形県方言研究会　「山形方言」７

山形大学　「紀要」人文科学５－１，社会科学１－３

山口女子短期大学　「研究報告」16

山口大学　「文学会誌」13－１，２

山口大学教育学部　「研究論叢」12－１

山梨大学学芸学部　「研究報告」12

ユネスコ東アジア文化研究センター "EAST ASIAN CULTURAL STUDIES"
１，２

横浜国立大学学芸学部　「人文紀要」８

立教大学日本文学会　「立教大学日本文学」８，９

立教大学文学部　「心理・教育学科研究年報」５

立正大学文学部　「文学部論叢」14～16，「国語国文」３

立命館大学人文学会　「立命館文学」198～211

立命館大学日本文学会　「論究日本文学」17～19

竜谷大学　「論集」368～372,「国文学論叢」９，10

ローマ字教育会　「ことばの教育」134

和歌山大学学芸学部　「紀要」12

早稲田大学　「国文学研究」25，26，「学術研究」11，「史観」62～67

ＣＭ合同研究会　「Ａ・Ｃ・Ｃ・ＣＭ研究」11，14

SEVER POP "ORBIS" 10－２，11－１

UNIVERSITY OF CALIFORNIA "PUBLICATIONS IN LINGUISTICS"
25

UNIVERSITY OF WASHINGTON "MODERN LANGUAGE QUARTER-
LY" 22－４，23－１～３

UNIVERSITY OF LONDON "BULLETIN OF THE SCHOOL OF
ORIENTAL AND AFRICAN STUDIES" 25－１，２

庶　務　報　告

A. 庁舎および経費

1. 庁舎

所　在	東京都北区稲付西山町	
敷　地		10,247.84m²
建　物		
本　　館(延)	鉄筋コンクリート，二階建	1,694.64m²
付属建物(延)		1,720.94m²
	計	3,415.58m²

2. 経費

昭和37年度予算　総額		48,699,000円
	人件費	40,033,000円
	事業費	8,666,000円
昭和37年度文部省科学研究費(各個研究)		150,000円
昭和37年度官庁営繕費		6,055,000円
〃　各所修繕費		1,189,000円

B. 評　議　員　会

会長　久松潜一(37.1.16 会長就任)　○副会長　有光次郎(38.3.18 副会長就任)

○阿部真之助	阿部　吉雄	石井　良助
○伊藤忠兵衛	○桂　寿一	◎桑原　武夫
高津　春繁	佐々木八郎	沢田　慶輔
◎沢登　哲一	坪井　忠二	◎時枝　誠記
◎中島　健蔵	中島　文雄	西尾　実
西脇順三郎	◎松方　三郎	山本　勇造
※佐伯　梅友	※中村　光夫 (木庭　一郎)	※永井　健三
※細田　菊雄	※横田　実	

○印は38.2.4再任を示す。　◎印は38.2.3任期満了を示す。

※印は38.2.4就任を示す。

C. 組 織 と 職 員

1. **定員** 教官 33 事務官 14 その他 24 計 71

2. **組織および職員**

	職　名	氏　名	備　考
国立国語研究所	所　長	岩淵悦太郎	
第1研究部	部　長	林　　大	
話しことば研究室	室　長	大石初太郎	
		宮地　　裕	
		南　不二男	
		鈴木　重幸	
		泉　喜与子	
		吉村　香苗	
書きことば研究室	室　長	見坊　豪紀	
		水谷　静夫	
		石綿　敏雄	
		宮島　達夫	
		橋本　圭子	
		高木　　翠	
		鈴木百合子	38.1.15　辞職
		小林さち子	
地方言語研究室	室　長	柴田　　武	
		野元　菊雄	
		上村　幸雄	
		徳川　宗賢	
		白沢　宏枝	
第2研究部	部　長	輿水　　実	
国語教育研究室	室　長	芦沢　　節	
		村石　昭三	
		吉沢　典男	
		根本今朝男	
		川又瑠璃子	
言語効果研究室	室　長	永野　　賢	
		高橋　太郎	
		渡辺　友左	
		宮地美保子	37.12.15辞職
		菅原　茂子	37.6.16採用
第3研究部	部　長	山田　　巌	
近代語研究室	室　長	林　　四郎	

		進藤　咲子	
		宮島　秋子	37.6.15辞職
		中曽根　仁	
古代語研究室開設準備室	主任（併）	山田　巌	
		広浜　文雄	主任研究官
第4研究部	部長（併）	岩淵悦太郎	
第1資料研究室	室　長	松尾　拾	
		西尾　寅弥	
		田中　章夫	
		露峰　裕子	
		河東はるみ	37.5.1採用
第2資料研究室	室　長	飯豊　毅一	
		大久保　愛	
		高田　正治	
		塚田　菊子	37.4.1採用
		小山　孝子	
第3資料研究室	室　長	斎賀　秀夫	
		松本　昭	
		宇野瑠美子	37.4.1採用
庶務部	部　長	尾崎源之助	
庶務課	課　長	三島　良兼	
	課長補佐	名古屋恒太郎	
		鈴木　篁二	
		芳賀清一郎	
		西山　博	38.2.16会計課から配置換
		増山　治子	38.2.15辞職
		根岸佐代子	
		斎藤　恭子	37.4.1採用
会計課	課　長	出牛清次郎	
	課長補佐	伊藤　仲二	
		三浦　清伍	
		渋谷　正則	
		西山　博	38.2.16庶務課に配置換
		鈴木　亨	
		岡本　まち	
		江頭　健一	37.12.31.辞職
		吉田芳太郎	37.11.17死亡退職
		金田　とよ	
		加藤　雅子	
		中村　佐仲	38.1.1採用

図書室	室長（併）	安藤信太郎 船倉　正章 大石初太郎 鈴木篁二(併) 芳賀清一郎(併) 大塚　通子	37.12.25採用

D. 内地留学生受け入れ

全国都道府県から内地留学生を受け入れて，研究の便をはかっている。次にその氏名研究題目などを掲げる。

氏名	学　校	研究題目	研究期間
権頭和夫	埼玉県秩父市立原谷小学校教諭	教科書教材の文体論的研究	昭和37. 4. 1から 〃 38. 3.31まで
米沢憲一	徳島県美馬郡半田町立大惣小学校教諭	読解力を高めるための理論的研究と具体的な実践への考察	昭和37. 5. 1から 〃 37.10.31まで
岡本昌夫	山口県防府市立佐波小学校教諭	意味構造に立つ読解指導	昭和37. 5. 7から 〃 37. 7.21まで
井上　晟	宮崎県児湯郡新富町立新田小学校教諭	国語科における読解指導過程と思考過程	昭和37. 9. 1から 〃 37.11.15まで
小林春夫	愛知県名古屋市立志賀中学校教諭	中学生の作文にあらわれた思考過程の研究とその指導	昭和37.10. 2から 〃 37.11.30まで
寺沢正直	岩手県大船渡市立大船渡小学校教諭	国語科の原理と実践（読解指導）	昭和37.10.20から 〃 38. 1.20まで

E. 日　誌　抄

1962.	4.20	米国聖書協会言語部長E. A. Nida　研究所見学
	4.20	チェコスロバキア科学アカデミー東洋研究所員イルジー・ネウストゥプニー研究所見学
	5. 2	各省直轄研究所長連絡協議会総会（全国町村会館で）
	5. 7	琉球大学助教授中今信研究所見学
	5.20	樟蔭学園教諭杉藤美代子研究所見学
	5.23	文部省所轄研究所長会議（学士会館で）
	5.24～25	第21回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議（東京大学生産技術研究所・物性研究所で）
	6.13	英国 Linguaphone Institute, Rolond Brockhurst/ 研究

所見学

6.14　韓国青丘大学助教授金宅圭研究所見学

6.15～16　第13回文部省所轄機関事務協議会（水沢で）

6.18　特許庁川島順外2名研究所見学

6.22　韓国青丘大学助教授兪昌植約2か月間随時来所し研究に従事された

7.16　東京教育大学教授石井庄司外11名研究所見学

7.18　アリゾナ大学助教授 Don. C. Bailey 研究所見学

7.24　第49回国立国語研究所評議員会

議事

1. 昭和37年度の研究事業計画
2. その他

7.30　福島大学国語国文学教室学生大橋幸雄外8名研究所見学

7.31　立教中学校教諭鈴木武男外3名研究所見学

8. 1　米国メリーランド大学教授 John Young 研究所見学

8. 9　文部省の会計監査

監査官　田代事務官　水落事務官　斎藤事務官

9.28　高崎市立塚沢中学校教諭鈴木隆澄外9名研究所見学

10. 8　各省直轄研究所長連絡協議会総会（全国町村会館で）

10.11～12　第15回文部省所管研究所事務協議会（片瀬で）

10.15　新庁舎ひろうの会　出席者102名

10.18　東京都立大学国文学専攻生村田房子外6名研究所見学

10.24　韓国ハングル学会総務幹事崔昌植研究所見学

10.25　西ドイツ，ミュンスター大学助教授 Bruno Lewin 研究所見学

10.30～31　文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議第3部会（奈良で）

11.10　岡山大学教授池上保太研究所見学

11.16　文部省所轄研究所長会議（国立遺伝学研究所で）

11.26　二松学舎大学助教授浮田章一外25名研究所見学

11.29～30　第13回文部省所管人文系（第3部会）事務協議会（伊東で）

12.13　第50回国立国語研究所評議員会

議事

1. 研究事業の中間報告
2. その他

12.20　国立国語研究所創立記念日

1963. 2.19　玉川大学助教授沖本季外4名研究所見学

2.21　人事院の給与簿監査

監査官　鳥飼事務官　小倉事務官

2.22　台湾大学講師英紹唐研究所見学

2.22　板橋区教育委員会指導主事染田屋謙相外40名研究所見学

3. 18　第51回国立国語研究所評議員会

議事

1. 昭和38年度の研究事業計画
2. その他

昭 和 38 年 10 月

国 立 国 語 研 究 所

東京都北区稲付西山町
電話東京（901）8154（代表）

UDC　058：495.6
NDC　810.5

986

国立国語研究所刊行書

国立国語研究所年報

1～13　(昭和24年度～昭和36年度)

国立国語研究所報告

1　八丈島の言語調査
2　言語生活の実態 (秀英出版刊 ¥300.00)
　—白河市および付近の農村における—
3　現代語の助詞・助動詞
　—用法と実例—
4　婦人雑誌の用語
　—現代語の語彙調査—
5　地域社会の言語生活 (秀英出版刊 ¥600.00)
　—鶴岡における実態調査—
6　少年と新聞
　—小学生・中学生の新聞への接近と理解—
7　入門期の言語能力
8　談話語の実態
9　読みの実験的研究
　—音読にあらわれた読みあやまりの分析—
10　低学年の読み書き能力
11　敬語と敬語意識
12　総合雑誌の用語 (前編)
　—現代語の語彙調査—
13　総合雑誌の用語 (後編)
　—現代語の語彙調査—
14　中学年の読み書き能力
15　明治初期の新聞の用語
16　日本方言の記述的研究 (明治書院刊 ¥900.00)
17　高学年の読み書き能力
18　話しことばの文型(1)
　—対話資料による研究—
19　総合雑誌の用字
20　同音語の研究
21　現代雑誌九十種の用語用字
　—総記および語彙表—
22　現代雑誌九十種の用語用字
　—漢字表—
23　話しことばの文型(2)

国立国語研究所資料集

1　国語関係刊行書目(昭和17～24年)
2　語彙調査
　—現代新聞用語の一例—

3 送り仮名法資料集

4 明治以降国語学関係刊行書目 (秀英出版刊 ¥300.00)

5 沖縄語辞典 (大蔵省印刷局 ¥2,500.00)

国立国語研究所論集

1 ことばの研究

国語年鑑

(昭和29年版) (秀英出版刊 ¥450.00)

(昭和30年版) (秀英出版刊 ¥600.00)

(昭和31年版) (秀英出版刊 ¥450.00)

(昭和32年版) (秀英出版刊 ¥480.00)

(昭和33年版) (秀英出版刊 ¥480.00)

(昭和34年版) (秀英出版刊 ¥500.00)

(昭和35年版) (秀英出版刊 ¥550.00)

(昭和36年版) (秀英出版刊 ¥800.00)

(昭和37年版) (秀英出版刊 ¥500.00)

(昭和38年版) (秀英出版刊 ¥950.00)

高校生と新聞 国立国語研究所・日本新聞協会共著 (秀英出版刊 ¥280.00)

青年とマス・コミュニケーション 日本新聞協会・国立国語研究所共著 (金沢書店刊 ¥280.00)

1962—1963

ANNUAL REPORT OF NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword

Outline of Researches from April 1962 to March 1963

Research in Sentence Patterns of Colloquial Japanese

Research on Use of Characters and Vocabulary in Magazines

Survey for Linguistic Atlas of Japan

Study of Language Development of School Children

Study of Typographic Conditions Necessary for Writing laterally of Japanese Sentences

Social Survey on Problems of Linguistic Life, including Opinion Research of Colleges' Students on Problems of Writing

Study on Japanese Language of Meizi Period

Making of Word Index of 'IROHA-ZIRUISYÔ', a Classified Japanese Dictionary in Heian Period (12C).

Research in Special Probleme

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
INATUKE-NISIYAMA, KITA, TOKYO